

富士市埋蔵文化財調査報告 第81集

ま え の は ら い せ き ふ じ お か い ち こ ふ ん ぐ ん
前の原遺跡・富士岡1古墳群

集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書

2024年

富士市教育委員会

例 言

1. 本書は、静岡県富士市富士岡1614番地に所在する「しずおかけふしよしふしおか前の原遺跡・まゑのはらいせき富士岡1古墳群」の発掘調査報告書である。
2. 集合住宅建設に伴う発掘調査を平成24(2012)年2月16日から平成24(2012)年3月31日まで実施した。検出された遺構や出土遺物の整理事業は調査終了から令和6(2024)年8月30日まで実施した。報告書は令和6(2024)年9月30日に刊行した。
3. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

事業主体者	個人	
調査主体者	富士市教育委員会教育長	山田 幸男
調査担当者	富士市教育委員会文化振興課	佐藤 祐樹
発掘調査支援担当	株式会社 東日 文化財調査室(現 株式会社 珠流河国文化財調査研究所)	小金澤 保雄
	同	小金澤 彩可
発掘調査作業員	土佐谷 道雄・山本 辰夫・小池 進・渡邊 敏雄	
報告書作成支援担当	株式会社東日 文化財調査室(現 株式会社 珠流河国文化財調査研究所)	小金澤 保雄
	同	小金澤 彩可
整理作業員	望月 豊・望月 洋子・眞野 祥子	
4. 写真撮影は現場写真撮影を小金澤保雄・小金澤彩可、遺物写真撮影を小金澤保雄・小金澤彩可・眞野祥子が行った。
5. 本書の執筆は佐藤祐樹・小金澤彩可・小金澤保雄が行い、それぞれの文責を文末に記した。全体の編集は小金澤彩可が担当した。
6. 本報告における出土品および記録図面・画像データ・写真などは富士市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまで次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝いたします。(順不同・敬称略) 大東建託株式会社

凡 例

1. 前の原遺跡・富士岡1古墳群の埋蔵文化財発掘調査における基準点・グリッドは以下のとおりである。

座標は世界測地系、平面直角座標系、第8系である。			
調査グリッド A1	平面直角座標	X座標 -91830.000000 m	Y座標 20770.000000 m
	緯度経度	北緯 35度 10分 19秒	東経 138度 43分 40秒
2. 挿図中に記載した断面基準線の数字は海拔高度である。単位はメートルとする。方位は真北を表す。
3. 遺物観察の色調は、新版『標準土色帳』(農林水産技術会議事務局監修 2002)を参考とした。
4. 遺物・遺構の方位・縮尺については各図中にスケール・方向を明示した。写真の縮尺は任意である。また挿図における凡例は各図中に示している。
5. 図版の引用については各図中に記した。
6. 各遺構の略称については文中に記した。

目次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経緯	1
II 遺跡概観	1
1 位置と地理的環境	1
2 歴史的環境と周辺の遺跡	3
3 前の原遺跡・富士岡1古墳群のこれまでの調査履歴	5
III 調査経過	6
1 発掘調査の経過	6
2 整理作業	6
IV 標準土層	6
V 発見された遺構と遺物	7
1 遺構	7
2 遺物	27
VI 自然科学分析編	48
蛍光X線による胎土分析	48
VII まとめ	56
胎土分類の比較による縄文土器	56
引用・参考文献	63
報告書抄録	73

挿図目次

図1 前の原遺跡・富士岡1古墳群の位置と周辺の地形	2	図12 6号住居跡 実測図	12
図2 前の原遺跡・富士岡1古墳群と周辺の遺跡分布	3	図13 7号住居跡 実測・遺物出土状況図	13
図3 前の原遺跡・富士岡1古墳群 今回の発掘調査位置と周辺の発掘調査	5	図14 8号住居跡 実測・遺物出土状況図	14
図4 標準土層	5	図15 9号住居跡 実測・遺物出土状況図	15
図5 遺構全体図・グリッド配置図	7	図16 10号住居跡 実測・遺物出土状況図	16
図6 花川戸第4号墳 周溝 実測図	8	図17 11号住居跡 実測・遺物出土状況図	17
図7 1号住居跡 実測・遺物出土状況図	9	図18 12号住居跡 実測・遺物出土状況図	17
図8 2号住居跡 実測・遺物出土状況図	9	図19 13号住居跡 実測・遺物出土状況図	17
図9 3号住居跡 実測・遺物出土状況図	10	図20 14号住居跡 実測・遺物出土状況図	18
図10 4号住居跡 実測図	11	図21 土坑 実測図	18
図11 5号住居跡 実測・遺物出土状況図	12	図22 1号配石遺構 実測・遺物出土状況図	19
		図23 2号配石遺構 実測図	19

図 24	3号配石遺構 実測・遺物出土状況図	19	図 52	1号集石遺構 出土遺物実測図	36
図 25	1・2・3号集石遺構 実測・遺物出土状況図	20	図 53	2号集石遺構 出土遺物実測図	36
図 26	1号溝状遺構 実測図	21	図 54	3号集石遺構 出土遺物実測図	36
図 27	2号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	22	図 55	2号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	37
図 28	3号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	23	図 56	3号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	37
図 29	4号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	24	図 57	4号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	38
図 30	5号溝状遺構 実測図	24	図 58	5号溝状遺構 出土遺物実測図	38
図 31	6号溝状遺構 実測・遺物出土状況図	24	図 59	6号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	38
図 32	7号溝状遺構・10号土坑 実測・遺物出土状況図	25	図 60	7号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図	39
図 33	8号溝状遺構 実測図	25	図 61	包含層 出土遺物拓影・実測図①	40
図 34	9号溝状遺構 実測図	25	図 62	包含層 出土遺物拓影・実測図②	41
図 35	ピット配置図	26	図 63	包含層 出土遺物拓影・実測図③	42
図 36	1号住居跡 出土遺物拓影・実測図	27	図 64	前の原遺跡出土遺物 胎土分類①	49
図 37	2号住居跡 出土遺物拓影・実測図	27	図 65	前の原遺跡出土遺物 胎土分類②	50
図 38	3号住居跡 出土遺物拓影・実測図	28	図 66	前の原遺跡出土遺物 胎土分類③	51
図 39	4号住居跡 出土遺物拓影・実測図	28	図 67	前の原遺跡出土遺物 胎土比較①	52
図 40	5号住居跡 出土遺物拓影・実測図	28	図 68	前の原遺跡出土遺物 胎土比較②	53
図 41	7号住居跡 出土遺物拓影・実測図	29	図 69	前の原遺跡出土遺物 胎土比較③	54
図 42	8号住居跡 出土遺物拓影・実測図	30	図 70	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 A群	57
図 43	9号住居跡 出土遺物拓影・実測図	31	図 71	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 B群	58
図 44	10号住居跡 出土遺物拓影・実測図①	32	図 72	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 C群	58
図 45	10号住居跡 出土遺物拓影・実測図②	33	図 73	前の原遺跡出土遺物 胎土分類 D・E群	59
図 46	11号住居跡 出土遺物拓影・実測図	33	図 74	縄文時代中期の五領ヶ台式土器を中心とした年代と遺跡の分布	60
図 47	12号住居跡 出土遺物実測図	34	図 75	縄文時代中期の五領ヶ台式土器の西南関東地方の遺跡の分布	61
図 48	13号住居跡 出土遺物実測図	34	図 76	静岡県東部の縄文時代中期前半の東海系土器出土遺跡の分布	62
図 49	14号住居跡 出土遺物拓影・実測図	34			
図 50	1号配石遺構 出土遺物拓影・実測図	35			
図 51	3号配石遺構 出土遺物拓影・実測図	36			

表目次

表 1	前の原遺跡・富士岡1古墳群周辺の遺跡一覧	4	表 4	土器観察表	43
表 2	周辺の発掘調査履歴	5	表 5	石器観察表	47
表 3	ピット一覧表	26			

写真図版目次

写真図版 1	発掘調査前 南西から	6	写真図版 12	7号住居跡 検出状況 西から	66
写真図版 2	埋戻し終了 北西から	6	写真図版 13	8号住居跡 検出状況 南から	66
写真図版 3	花川戸第4号墳 周溝 検出状況 南西から	65	写真図版 14	10号住居跡 遺物出土状況 南から	66
写真図版 4	花川戸第4号墳 周溝 完掘 南西から	65	写真図版 15	11号住居跡 完掘 南東から	66
写真図版 5	花川戸第4号墳 周溝 完掘 北東から	65	写真図版 16	12号住居跡 検出状況 南東から	66
写真図版 6	1号住居跡 検出状況 北から	65	写真図版 17	13号住居跡 土層 南から	66
写真図版 7	2号住居跡 検出状況 西から	65	写真図版 18	14号住居跡 検出状況 北から	66
写真図版 8	3号住居跡 検出状況 西から	65	写真図版 19	3号溝状遺構 検出作業 北から	67
写真図版 9	4号住居跡 検出状況 南から	65	写真図版 20	4号溝状遺構 遺物出土状況 北から	67
写真図版 10	5号住居跡 検出状況 南東から	65	写真図版 21	8号溝状遺構 検出状況 東から	67
写真図版 11	6号住居跡 完掘 南から	66	写真図版 22	5号溝状遺構 完掘 北から	67

写真図版 23	標準土層 北から.....	67	写真図版 38	13号住居跡 出土遺物	70
写真図版 24	調査区西側 南から.....	67	写真図版 39	14号住居跡 出土遺物	70
写真図版 25	調査区東側 南から.....	67	写真図版 40	1号配石遺構 出土遺物	70
写真図版 26	調査区北東側 北東から.....	67	写真図版 41	3号配石遺構 出土遺物	70
写真図版 27	1号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 42	1号集石遺構 出土遺物	70
写真図版 28	2号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 43	2号集石遺構 出土遺物	71
写真図版 29	3号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 44	3号集石遺構 出土遺物	71
写真図版 30	4号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 45	2号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 31	5号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 46	3号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 32	7号住居跡 出土遺物.....	68	写真図版 47	4号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 33	8号住居跡 出土遺物.....	69	写真図版 48	5号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 34	9号住居跡 出土遺物.....	69	写真図版 49	6号溝状遺構 出土遺物	71
写真図版 35	10号住居跡 出土遺物	69	写真図版 50	7号溝状遺構 出土遺物	72
写真図版 36	11号住居跡 出土遺物	70	写真図版 51	包含層出土遺物①.....	72
写真図版 37	12号住居跡 出土遺物	70	写真図版 52	包含層出土遺物②.....	73

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

合資会社 仁藤商店（以下、事業者）は、当該地において、集合住宅新築工事を計画した。富士市教育委員会文化振興課は、包蔵地に隣接地していることや包蔵地範囲が拡大する可能性を考え、試掘・確認調査を実施したい旨を回答した。

それに基づき、文化振興課職員による試掘・確認調査を平成23年7月27日～8月30日に行い【第12地区第1次調査】、新たに古墳1基を発見し、「花川戸第4号墳」とした。

第2次調査では敷地内にトレンチ6本を新たに設定し、重機による表土除去後、人力による精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。計画建物は、北側と南側と2棟あり、南側については保護層30cmが確保されるものの、北側の建物については計画通りであると保護層がはかれないことが明らかとなり、記録保存調査を実施することで合意した。

調査は、富士市教育委員会が調査主体者となり、支援業者として民間調査組織を扱うことで実施することで協議を開始し、平成24年1月10日、富士市教育委員会・事業者・発掘調査支援業者（株式会社 東日）の三者で「平成23年度 富士岡1古墳群における文化財調査に関する協定書」締結した。協定書では、平成24年3月31日発掘作業を終了し、平成25年3月31日までに整理作業・報告書刊行を終了させることが決められた。

また、平成24年1月19日、事業者と株式会社東日の関連会社である株式会社株流河国文化財調査研究所の間で、調査費用に関する契約がなされた。

（佐藤 祐樹）

II 遺跡概観

1 位置と地理的環境

前の原遺跡・富士岡1古墳群は、富士山南麓に所在する静岡県富士市富士岡の標高20～40m付近に位置する（図1）。南へ270mで東名高速道路、北へ1,400mで新東名高速道路が、それぞれ東西に通っている。調査地点はすぐ東を流れる赤淵川の河岸段丘上に位置し、近年は、赤淵川沿いに富士溶岩と愛鷹山の間の谷あいを通る県道76号線が市域中部と連結し交通量が増しているが、基本的にはせせらぎと木々に囲まれた静かな地である。この地の地形・地質的特徴として、南側にかつての浮島沼が広がっていたこと、また富士山と愛鷹山の境の地であることが挙げられる。

1. 南側に広がっていたかつての浮島沼

南側にはかつての浮島沼であった平地が広がり、遺跡から現在の駿河湾までは4kmほどの距離である。約10,000年前には現在の浮島の平地は海であったが、富士川から運ばれた土砂が駿河湾の湾岸流で西に広がって堆積し、次第に現在の海岸線通りに浜堤を形成していった。当初はこの浜堤により汽水湖がつけられたが、縄文海進のピークを過ぎた縄文時代前期から中期の5,400～4,000年前頃、浜堤は完全に閉じ、やがて富士山や愛鷹山を流下する小河川により徐々に淡水湖へと変わっていった。小河川は土砂も運び、それにより湖は少しずつ北側が沖積地となり、また湖を浅くし湿原化していったが、それでもなお大正時代までは富士市の吉原地区東側から沼津市の西側まで続く、東西約13km、南北約2kmの大きな湿原であった。現在のように干拓されたのは、昭和18(1943)年の昭和放水路の完成、また昭和41(1966)年の田子の浦港開港に伴う沼川排水工事の完成によるものである。以降、浮島の地は水田地・工業地となり、年々住宅地や商業施設も増えてきている。浮島沼の昔の面影は富士市の浮島ヶ原自然公園（富士市中里2553-8）などで見ることができ、この公園はバードウォッチングの名所としても知られている。

2. 富士山と愛鷹山の境の地

遺跡のすぐ東を流れる赤淵川は、地質的に愛鷹山と富士山を隔てる川である。今から約11,000～8,000年前の間、何度かの噴火で新富士旧期の富士山から噴出した溶岩は愛鷹山に遮られ、現在の富士市と三島市の二方向へ流下し、現富士市域においては愛鷹山の西側、つまり当地が溶岩の東端となった。当地を形成しているのは10,000年前に噴出し流下した會比奈溶岩Iである。

愛鷹山に端を発する赤淵川は愛鷹山麓を北東から南西へ流れ下り、標高400～200mの間で千東川など小河川と合流しながら、やがて流れを南北方向に変え、新富士旧期の溶岩と愛鷹山の境を流下していく。赤淵川や千東川の水量は常時は少ないが、雨などで水量が多い時には幻の滝として知られる「赤淵川の七滝」が出現する。これらの滝は富士溶岩が作り出した景観でもある。

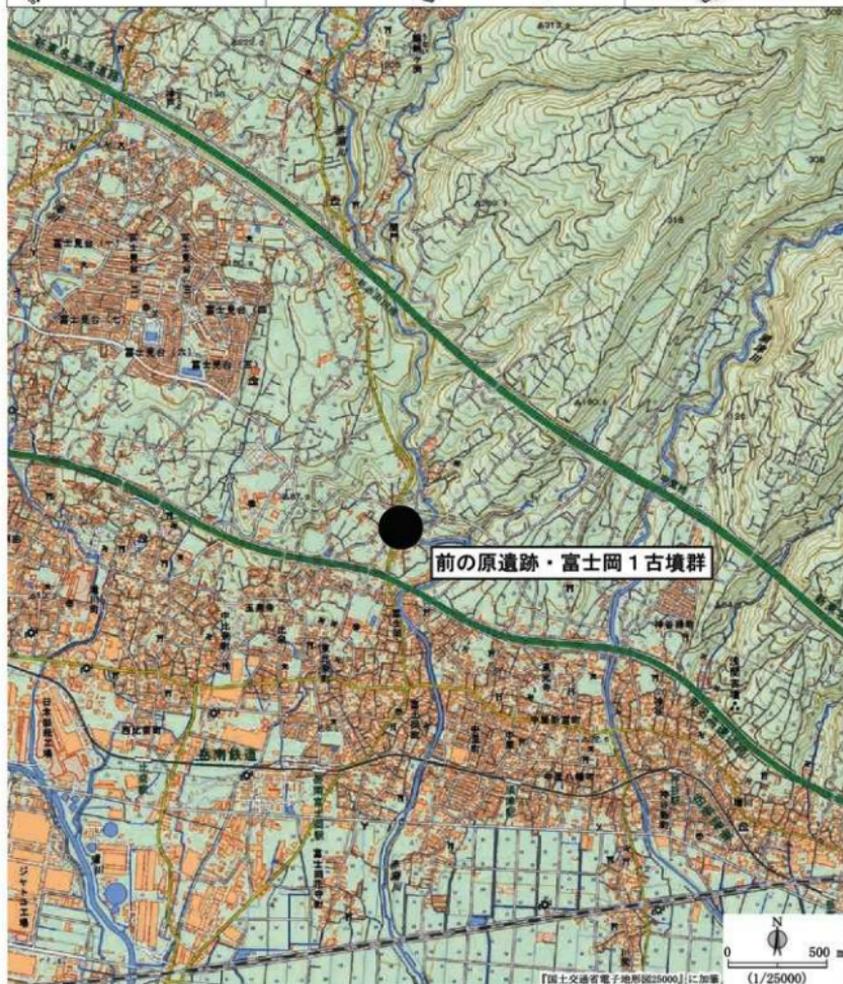


図1 前の原遺跡・富士岡1古墳群の位置と周辺の地形

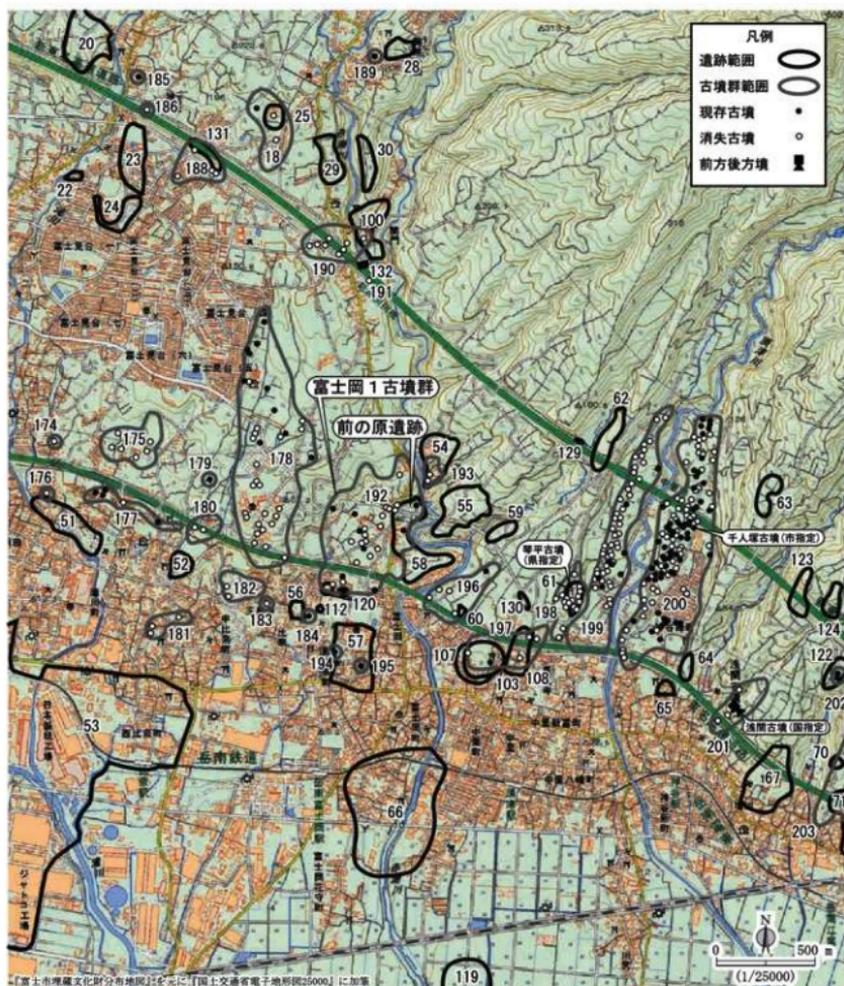


図2 前の原遺跡・富士岡1古墳群と周辺の遺跡分布

2 歴史的環境と周辺の遺跡

1. 縄文時代

富士市内の縄文時代の遺跡は、富士宮市から続く星山丘陵沿いの地域と、富士山南東麓から愛鷹山にかけての地域の2地域に集中する傾向がある。前の原遺跡は後者に位置し、近接地では花川戸遺跡(54)で早～中期、向山遺跡(55)で早期、中尾沢遺跡(59)で早期・前期～中期、分地遺跡(130)で中期、そして前の原遺跡(58)で前期～中期の遺物が出土している。富士市域で前期の遺跡数が少ないことを考えると、花川戸遺跡、中尾沢遺跡、前の原遺跡と、富士山と愛鷹山の境である赤瀬川沿いで前期の遺跡が集中して存在することは注目される。

遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	遺跡の時代
20	澤沼遺跡	神戸	散布地	縄文古墳
22	三度崎A遺跡	三ツ沢	散布地	縄文
23	寺下遺跡	神戸	散布地	縄文、奈良・平安
24	三度崎B遺跡	三ツ沢	散布地	縄文、古墳
25	神戸石坂遺跡	神戸	散布地	縄文
28	鶴無ヶ淵遺跡	鶴無ヶ淵	散布地	縄文
29	亀塚遺跡	間門	散布地	旧石器～縄文
30	峠山遺跡	間門	散布地	旧石器～弥生
51	森塚上遺跡	原田	散布地	縄文、古墳
52	鶴夜籠遺跡	原田	散布地	縄文、古墳
53	井田遺跡	今泉	その前の遺跡 北の谷の東	弥生～古墳、奈良・平安
54	花川戸遺跡	比奈	散布地	縄文
55	南山遺跡	富士岡	集落跡	縄文、弥生～古墳
56	竹の鼻遺跡	比奈	散布地	縄文、古墳
57	弥宜ノ前遺跡	比奈	集落跡	古墳、奈良・平安
58	前の原遺跡	富士岡	散布地	縄文
59	中尾沢遺跡	富士岡	散布地	縄文、古墳
60	丸山遺跡	富士岡	散布地	古墳
61	大塚道東遺跡	中里	散布地	縄文
62	榎木平遺跡	富土岡	散布地	縄文
63	百間遺跡	中里	散布地	縄文
64	神谷遺跡	神谷	散布地	縄文
65	地藏畑遺跡	神谷	散布地	奈良・平安
66	花守遺跡	富士岡	散布地	弥生～古墳、奈良
67	宮前遺跡	増川	集落跡	旧石器～平安
70	江尾遺跡	江尾	散布地	縄文
71	コーカン遺跡	江尾	散布地	縄文、古墳
100	夷城跡	間門	城跡跡	中世
103	天神川城跡	中里	城跡跡	中世
107	天念寺遺跡	中里	散布地	古墳～奈良・平安
112	西王寺経塚	比奈	その他の遺跡	平安
119	行簡遺跡	中里	散布地	弥生
120	下前原遺跡	比奈	集落跡	縄文、平安
122	平塚遺跡	増川	集落跡	弥生、古墳
123	天ヶ沢東遺跡	増川	散布地	縄文

遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	遺跡の時代
124	吉木戸A遺跡	増川	散布地	旧石器、縄文
129	富士岡中尾遺跡	富士岡	散布地	縄文
130	分地池遺跡	中里	散布地	縄文
131	砂坂遺跡	神戸	散布地	縄文
132	不動権遺跡	間門	散布地	縄文 中世
174	滝川1古墳群	原田	古墳	古墳
175	滝川2古墳群	原田	古墳	古墳
176	滝川3古墳群	原田	古墳	古墳
177	滝川4古墳群	原田	古墳	古墳
178	比奈1古墳群	比奈	古墳	古墳
179	比奈2古墳群	原田	古墳	古墳
180	比奈3古墳群	比奈	古墳	古墳
181	比奈4古墳群	比奈	古墳	古墳
182	比奈5古墳群	比奈	古墳	古墳
183	比奈6古墳群	比奈	古墳	古墳
184	比奈7古墳群	比奈	古墳	古墳
185	神戸1古墳群	神戸	古墳	古墳
186	神戸2古墳群	神戸	古墳	古墳
188	神戸4古墳群	神戸	古墳	古墳
189	鶴無ヶ淵古墳群	鶴無ヶ淵	古墳	古墳
190	間門古墳群	間門	古墳	古墳
191	間門松沢第1号墳	間門	古墳	古墳
192	富士岡1古墳群	富士岡	古墳	古墳
193	富士岡2古墳群	富士岡	古墳	古墳
194	富士岡3古墳群	比奈	古墳	古墳
195	富士岡4古墳群	富士岡	古墳	古墳
196	中里1古墳群	中里	古墳	古墳
197	中里2古墳群	中里	古墳	古墳
198	中里3古墳群	中里	古墳	古墳
199	中里4古墳群	中里	古墳	古墳
200	神谷古墳群	神谷	古墳	古墳
201	増川古墳群	増川	古墳	古墳
202	平塚古墳群	増川	古墳	古墳
203	船津1古墳群	江尾	古墳	古墳

※「富士市埋蔵文化財分布地図【富士市内における遺跡一覧】」より作成

表1 前の原遺跡・富士岡1古墳群周辺の遺跡一覧

2. 古墳時代

富士市内の古墳時代の遺跡は、富士川の沖積地や浮島沼の湿地を生産地として弥生時代から発達した。富士岡1古墳群周辺では宮庭遺跡(67)、神谷遺跡(64)、地藏畑遺跡(65)、天念寺遺跡(107)、弥宜ノ前遺跡(57)が、標高20～30mほどの位置に存在する。これらの遺跡は南に広がる浮島沼湿地を生産地としていたと考えられる。これらの集落を背景に、富士山南東麓～愛鷹南西麓に、多くの古墳が作られた。

前期に築造された古墳として、増川古墳群(201)内には国指定史跡であり、全長93mの市内最大の前方後方墳である浅間古墳がある。また比奈1古墳群(178)には全長60mの前方後円墳である東坂古墳が存在した。中期初頭には中里3古墳群(198)内に所在する県指定史跡の琴平古墳などが築造された。

しかし古墳時代中期にあたるAD400～440年頃、新富士山南側山体から大崩スコリアが噴出した。富士川河口断層帯の活動、浮島沼の水位上昇も同時期に起こったと推定され、浮島沼中央部の浜堤上に所在した沼津市の雄鶏塚遺跡は、これらの変動により水没し放棄された可能性が指摘されている。このような自然環境の変化が当時の富士市域にも大きく影響したことは間違いなく、古墳時代中期の集落は激減する。後期になってようやくこの地域の人々の活動は再び活発化し、古墳も築造されていく。

これだけの自然災害ののち、6世紀後半になると、東駿河は全国的に見ても多く古墳が築造される地域となった。富士山南東麓から愛鷹南西麓にかけて、滝川1～4古墳群(174～177)、比奈1～7古墳群(178～184)、神戸1・2・4古墳群(185・186・188)、鶴無ヶ淵古墳群(189)、間門古墳群(190)、中里1～4古墳群(196～199)、増川古墳群(201)等その他、神谷古墳群(200)には市指定史跡の千人塚古墳がある。富士岡1～4古墳群(192～195)に含まれる富士岡1古墳群も、この時期に築造された古墳の集中地のひとつである。

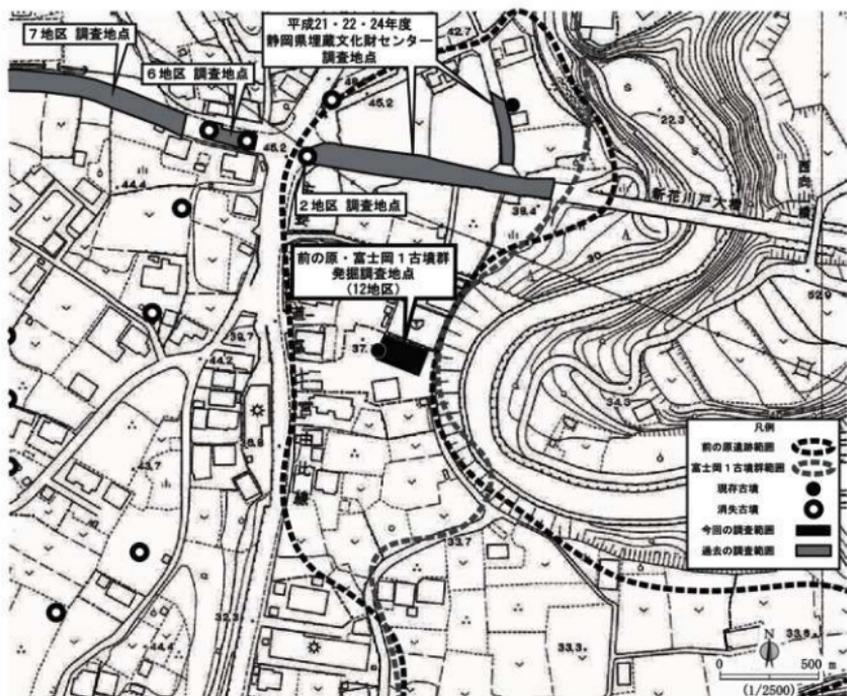


図3 前の原遺跡・富士岡1古墳群 今回の発掘調査位置と周辺の発掘調査

地区名	調査原因	調査面積 m ²	調査期間	報告書
2地区	道路改修工事による	30	平成6(1994)年7月4日～同年8月12日	富士市教委1995『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集花川戸第1号墳』
6地区	農道整備事業による	650	平成14(2002)年9月3日～同年10月31日	富士市教委2003『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書』
7地区	農道整備事業による	115	平成15(2003)年10月15日～同年10月16日 平成16(2004)年2月19日～同年2月20日	富士市教委2009『平成15・19年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』
12地区	農道整備事業による	6,375.8	平成21(2009)年8月～平成22(2010)年8月	静岡県埋蔵文化財センター 2013『富士岡1古墳群他』
	農道整備事業による	327	平成24(2012)年6月～8月	
12地区	集合住宅建設による	302,223	平成24(2012)年2月16日～同年3月31日	本書

表2 周辺の発掘調査履歴

3 前の原遺跡・富士岡1古墳群のこれまでの調査履歴

富士岡1古墳群では、これまでに12の地区で調査が行われてきた(図3・表2)。このうち、2地区では富士市教育委員会により平成6(1994)年に花川戸第1号墳の調査が行われた。6地区では平成14(2002)年に花川戸第2・3号墳の調査が行われた。平成21・22・24(2009・2010・2012)年には静岡県埋蔵文化財センターにより調査が行われ、古墳時代前期の住居跡・方形周溝墓5基、古墳時代後期の古墳周溝が3基検出された。また旧石器時代の尖頭器やナイフ形石器、縄文時代早期、前期～中期初頭の遺構遺物が出土した。

今回の調査では現地調査は富士岡1古墳群として調査したが、平成21・22・24年の埋蔵文化財センターの調査結果や今回の調査での縄文時代の遺構・遺物の検出・出土状況から、富士市教育委員会は富士岡1古墳群の南側に所在する縄文時代の遺跡である前の原遺跡の範囲を北に広げることを選定した。報告書では前の原遺跡・富士岡1古墳群として報告することとなった。

(小金澤 彩可)

III 調査経過

1 発掘調査の経過

平成 24 年 2 月中旬に重機による表土掘削を行い、作業員による精査作業を開始した。2 月下旬から 3 月中旬にかけて花川戸第 4 号墳精査と縄文時代の遺構確認面検出・精査、包含層精査を行った。3 月下旬からは縄文時代の包含層精査、遺構検出・精査を行い、順次発掘、写真撮影、遺構記録保存を行い調査が終了した。調査面積は 302.223 m²であった。



写真図版 1 発掘調査前 南西から



写真図版 2 埋戻し終了 北西から

2 整理作業

整理作業は出土した遺物などを整理し、発掘調査の成果を報告書の形で公表することを主な目的として行った。

整理作業では、遺物整理・測量図整理・現場写真整理・報告書作成の作業を行った。遺物整理では、主に遺物の洗浄・注記・拓影・実測・写真撮影などの作業を行った。拓影・実測・写真撮影は、出土した遺物の中から選別したもののみを対象にした。遺物実測は NEXT ENGINE を用いたレーザー 3D 計測または Agisoft Metashape Standard を用いた 3D 写真画像計測を行い、拓影図は Agisoft Metashape Standard を用いた 3D 画像をオルソ処理し作成した。報告書図版作成は Adobe Illustrator、Adobe Photoshop、編集作業は Adobe InDesign を用いた。遺物写真撮影はデジタルカメラ Canon EOS 5D を用いた。

報告書は、遺物整理・測量実測図面整理・現場写真整理の成果をもとに、文章の執筆・編集を行い作成した。

IV 標準土層

調査区の南壁を標準土層とした(図 4・5)。

表土層	近世～近代の耕作土。
第 I 層	黒褐色土 締まりやや強く粘性強い。径 5～10mm 大のスコリア粒を多く含む。古墳周溝確認面。
第 II 層	黒褐色土 締まり粘性共に強い。径 1～3mm 大のスコリア粒を含む。炭化物を少量含む。縄文時代の遺物を含む。
第 III 層	黒褐色土 締まり粘性共に強い。径 1mm 大のスコリア粒を少量含む。縄文時代の包含層。
第 IV 層	暗黄褐色土 締まり粘性共に強い。径 1mm 大のスコリア粒を僅かに含む。縄文時代の遺構確認面。

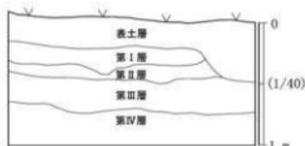


図 4 標準土層

(小金澤 彩可)

V 発見された遺構と遺物

1 遺構

今回の調査では、古墳周溝1基、住居跡14軒、土坑10基、配石遺構3基、築石遺構3基、溝状遺構9条、遺構に付属しないピット28基が検出された。遺構の時代は中世以降、古墳時代、縄文時代に分かれる。

調査区全体は近代～現代の建物により上部が削平されており、特に古墳の周溝は上部が大きく削平されていて下部のみ検出することができた。縄文時代の包含層や遺構確認面も上部が削平されていたが比較的残りが良く、遺物や遺構を検出することができた。

以下、遺構別に記述していく。

古墳周溝

事前の2回の確認調査で存在が確認された花川戸第4号墳の周溝である。調査区西側で検出された。

花川戸第4号墳周溝 (SZ04-SD01、SZ04-SX01) (図6)

調査区西側の B4-B5-C4-C5 グリッド、標高 121.50m にて検出された。

古墳の周溝である SZ04-SD01 と、確認調査で「古墳造成土」と定義された SZ04-SX01 が並行して検出され、SZ04-SD01 が SZ04-SX01 を切る形で検出されている。また古墳崩落・攪乱時に堆積したとみられる土層が SZ04-SD01・SX01 の上部から検出された。検出されたのは周溝の東側の一部で、西側は調査区域外に延びている。近世～近代の耕作や建物により上部を削平、また一部を攪乱されていた。遺構に付属するピットは9基検出された。

規模は現況で、SZ04-SD01 が最大長 8.18m、最大幅 1.86m、深さ 0.33m、主軸の方向は N-38°-E を指向する。SZ04-SX01 は最大長 5.17m、最大幅 1.61m、深さ 0.14m、主軸の方向は不明である。

遺構に付属するピットが9基検出された (SZ04-Pit01 ～ 09)。SZ04-Pit05 以外は SZ04-SD01 東側に沿って検出された。各ピットの計測値は図6に示した。

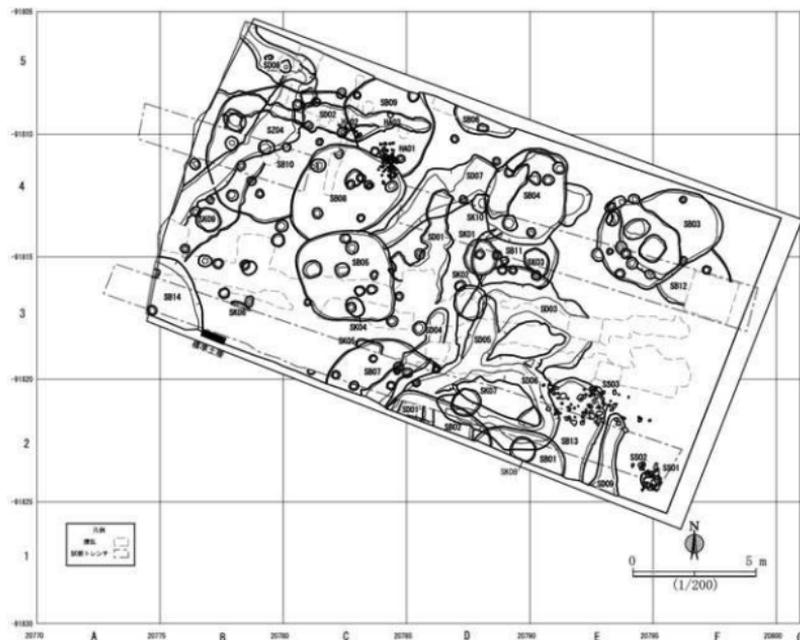


図5 遺構全体図・グリッド配置図

SZ04-S01

- 1 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い、径2～8mm大のスコリア粒を僅かに含む、古墳築造土・堆積土。
- 2 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い、径3～6mm大のスコリア粒を僅かに含む、周溝層土。
- 3 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い、径2～6mm大のスコリア粒を僅かに含む、周溝層土。
- 4 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや強い、径5～10mm大のスコリア粒を僅かに含む、周溝層土。
- 5 黒褐色土 締まりやや強く粘性やや弱い、径1～4mm大のスコリア粒を僅かに含む、周溝層土。

SZ04-SX01

- 6 黒褐色土 締まり粘性共にやや強い、径5～10mm大のスコリア粒を僅かに含む、古墳築造に伴う造成土。
- 7 黒褐色土 締まり強く粘性やや弱い、径3～8mm大・径10mmのスコリア粒を僅かに含む、墳丘盛土。
- SZ04-P1共通
- 8 黒褐色土 締まり強く粘性やや弱い、径2～8mm大のスコリア粒を僅かに含む、周溝内ピット層土。
- 9 黒褐色土 締まり粘性共にやや強い、径2～8mm大のスコリア粒を僅かに含む、周溝内ピット層土。

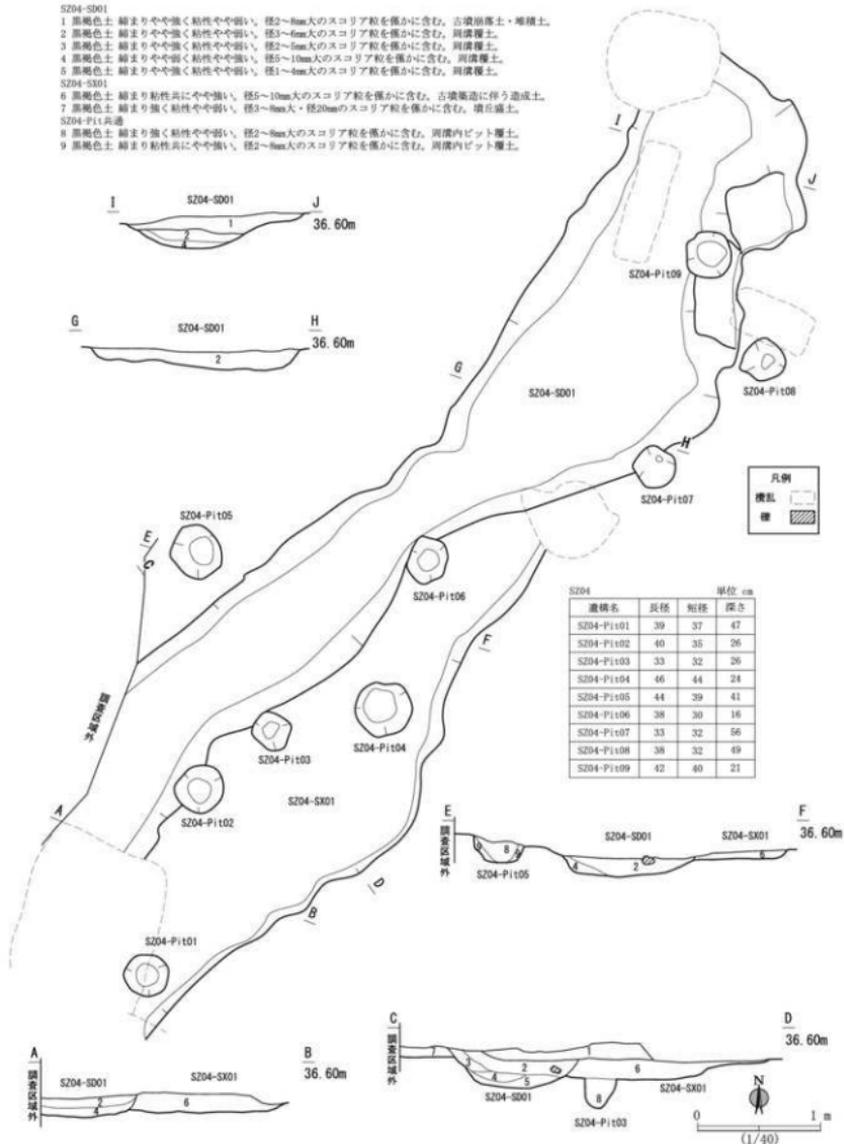


図6 花川戸第4号墳 周溝 実測図

遺物は、遺構の立地から縄文時代の土器・石器が覆土から出土したが、古墳時代の遺物は僅かな小破片のみ出土した。時代は遺構から判断して古墳時代後期である。

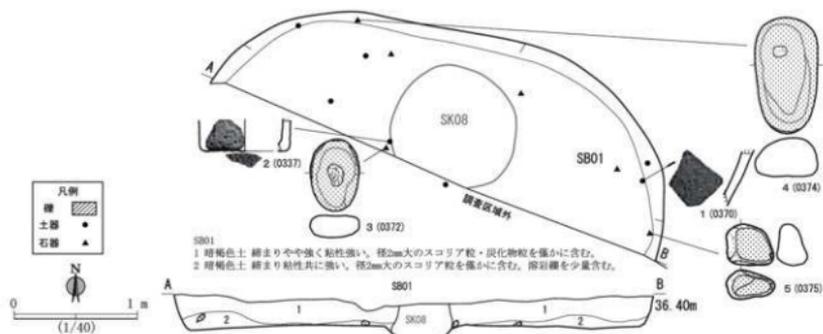


図7 1号住居跡 実測・遺物出土状況図

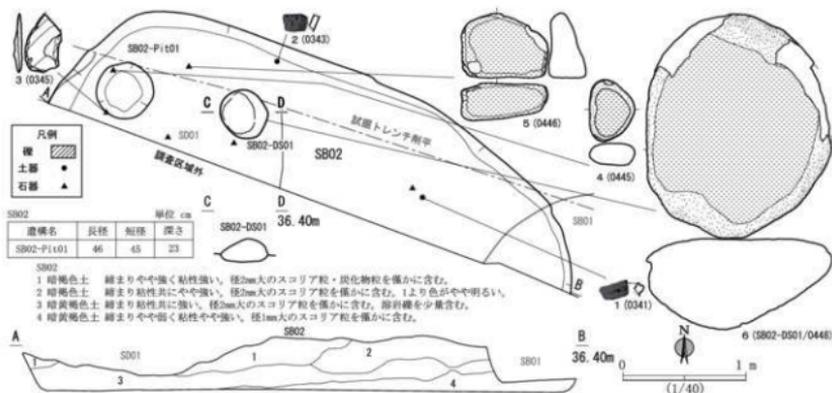


図8 2号住居跡 実測・遺物出土状況図

住居跡

住居跡は調査区全体で14軒検出された。時代はすべて縄文時代である。

1号住居跡 (SB01) (図7)

調査区南東側 D2-E2 グリッド、標高 36.40m にて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。8号土坑に切られている。遺構の西側で2号住居跡、北側で6号溝状遺構、東側で13号住居跡を切っている。平面形態は円へ楕円形と推定され、規模は現況で南北 1.29m、東西 3.87m、深さ 0.28m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、石器は磨石・蔽石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

2号住居跡 (SB02) (図8)

調査区南側中央の C2-D2 グリッド、標高 36.47m にて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。東側を1号住居跡、北側を7号土坑、西側を1号溝状遺構に切られている。北側で6号溝状遺構、西側で7号住居跡を切っている。遺構に付属するピットは現況で1基検出された。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北 1.10m、東西 4.50m、深さ 0.43m を測る。主軸の方向は不明である。

台石が1基検出された (SB02-D001)。ピットは1基検出された (SB02-Pit01)。ピットの計測値は図8に示した。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、石器はスクレイパー、石皿、磨石・蔽石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

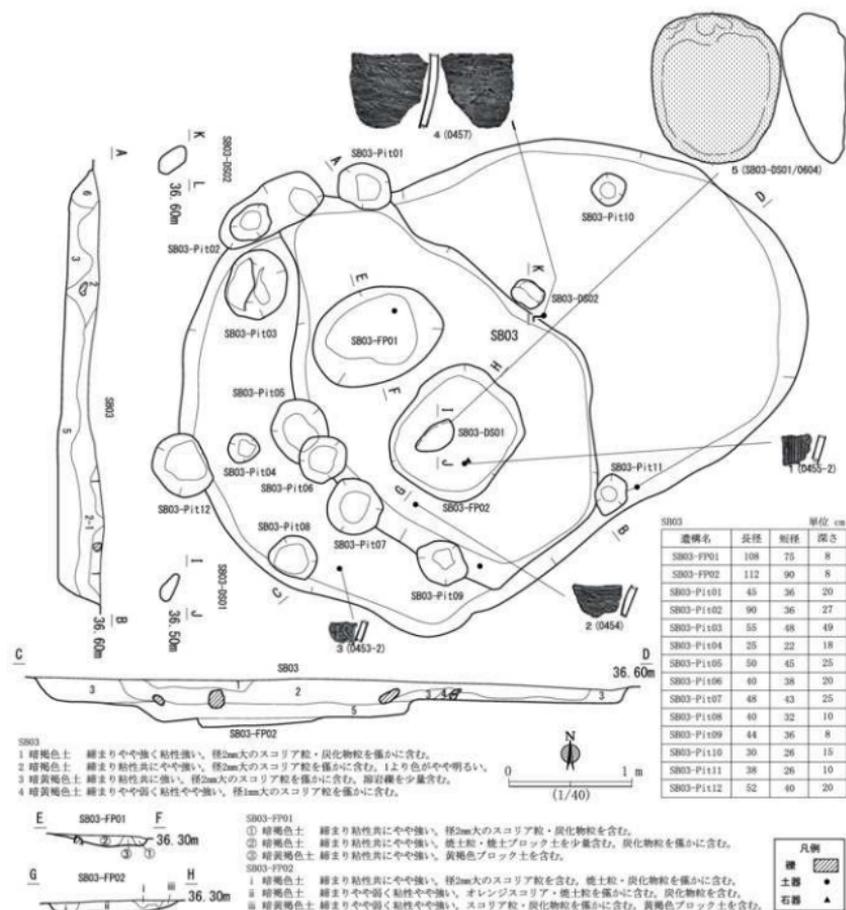


図9 3号住居跡 実測・遺物出土状況図

3号住居跡 (SB03) (図9)

調査区北東側のE3-E4-F3-F4グリッド、標高36.44mにて検出された。

遺構の南東側で12号住居跡を切っている。西側で4号住居跡・7号溝状遺構、南西側で11号住居跡・3号溝状遺構が検出された。遺構に付属する炉跡が2基、台石が2基、ピットは12基検出された。遺構から30～60cm大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は楕円形、規模は最大長5.06m、最大幅3.92m、深さ0.37m、主軸の方向はN-65°-Eを測る。

炉跡が2基検出された (SB03-FP01・02)。台石は2基検出された (SB03-DS01・02)。SB03-FP02の上に、斜めに立てた状態で台石 (SB03-DS01) が出土した。ピットは12基検出された (SB03-Pi01～12)。各炉跡・ピットの計測値は図9に示した。

遺物は縄文時代前期後半の諸磯式縄文土器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代前期後半である。

4号住居跡 (SB04) (図10)

調査区中央北よりのD4-E4グリッド、標高36.53mにて検出された。

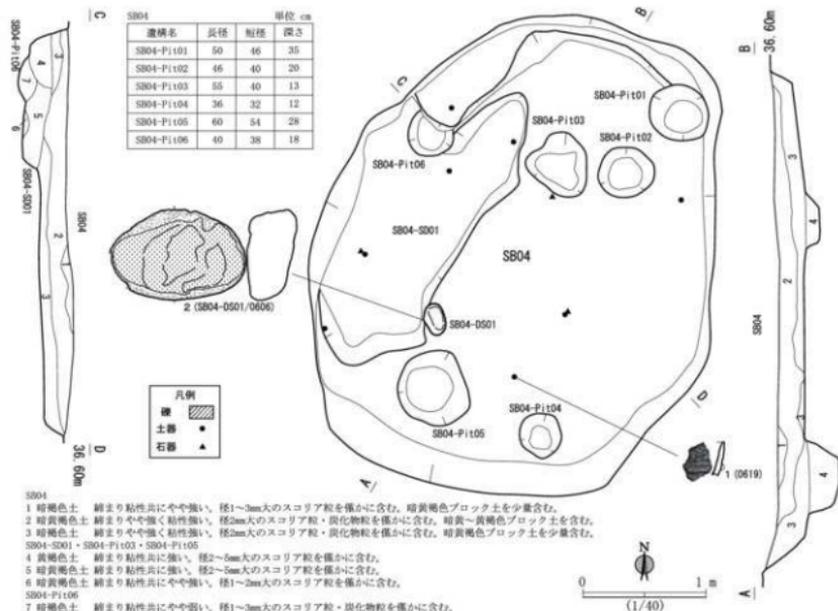


図10 4号住居跡 実測図

遺構の中央で7号溝状遺構、南側で11号住居跡を切っている。北西側で6号住居跡が検出された。遺構内の西側で溝状の掘り込みが検出された(SB04-SD01)。遺構に付属するピットは6基、台石が1基検出された。遺構から30~60cm大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。

平面形態は楕円形、規模は最大長4.00m、最大幅3.33m、深さ0.28m、主軸の方向はN-29°-Eを計る。

遺構内西側で検出されたSB04-SD01は、最大長2.61m、最大幅1.27m、深さ0.21mを測る。ピットは6基検出された(SB04-Pi01~06)。各ピットの計測値は図10に示した。

遺物は縄文時代前期後半~中期初頭の縄文土器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代前期後半~中期初頭である。

5号住居跡 (SB05) (図11)

調査区中央西よりのC3-C4グリッド、標高36.32mにて検出された。

遺構の上部は近現代の建物跡により削平されていた。北東側で7号溝状遺構、北西側で8号住居跡を切っている。東側で1号溝状遺構、南東側で7号住居跡が検出された。遺構に付属する土坑が2基、ピットは3基検出された。遺構内で石皿が3点検出された。遺構から30~60cm大の礫が検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は不整形、規模は南北3.70m、東西3.72m、深さ0.14m、主軸の方向は不明である。

土坑は2基検出された(SB05-SK01・02)。ピットは3基検出された(SB05-Pi01~03)。各土坑・ピットの計測値は図11に示した。遺物は縄文時代前期後半の外來系土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、磨・敲石、台石、石皿が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

6号住居跡 (SB06) (図12)

調査区北側中央のD4-D5グリッド、標高36.52mにて検出された。

遺構の北側は調査区域外に伸びている。南西側で9号住居跡・2号溝状遺構、南側で7号溝状遺構、南東側で4号住居跡が検出された。遺構に付属するピットは1基検出された。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北0.82m、東西2.59m、深さ0.46mを測る。主軸の方向は不明である。

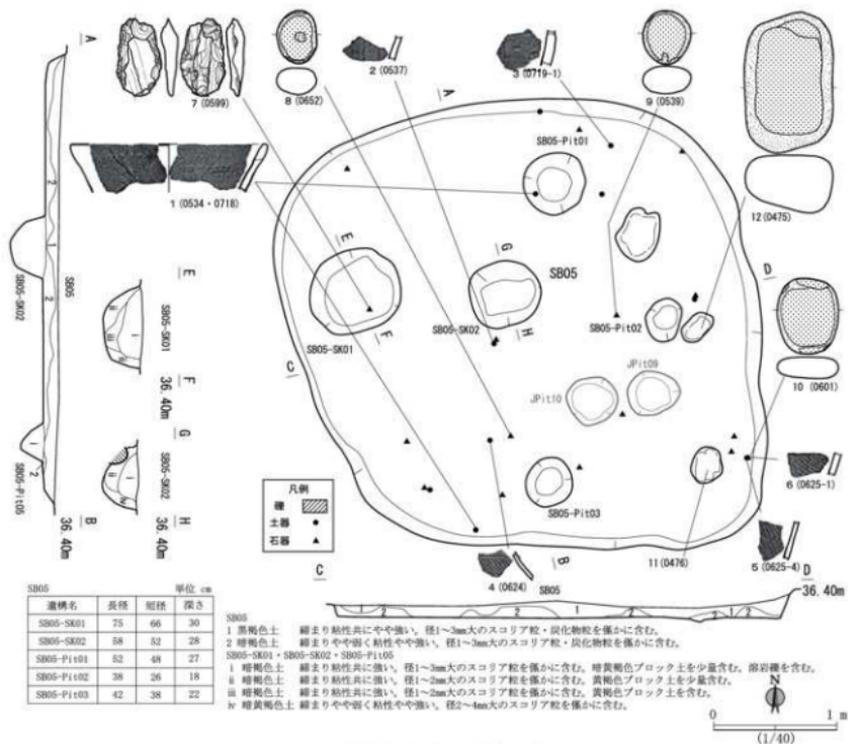


図11 5号住居跡 実測・遺物出土状況図

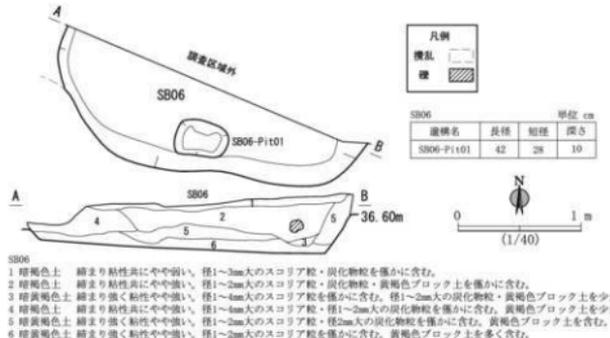


図12 6号住居跡 実測図

石が1基、ピットは9基検出された。遺構から30~60cm大の礫が多く検出された。遺構の廃業後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北2.67m、東西6.37m、深さ0.34mを測る。主軸の方向は不明である。

台石が1基検出された(SB07-DS01)。ピットは9基検出された(SB07-Pit01~09)。各ピットの計測値は図13に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、磨・蔽石が出土した。

ピットは1基検出された(SB06-Pit01)。ピットの計測値は図12に示した。

遺物は出土しなかった。

時期は遺構の検出状況や覆土から判断して縄文時代である。

7号住居跡(SB07)(図13)

調査区南側中央のC2-C3-D2-D3グリッド、標高36.29mにて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。中央を1・4・5号溝状遺構、東側を2号住居跡・6号溝状遺構に切られている。台

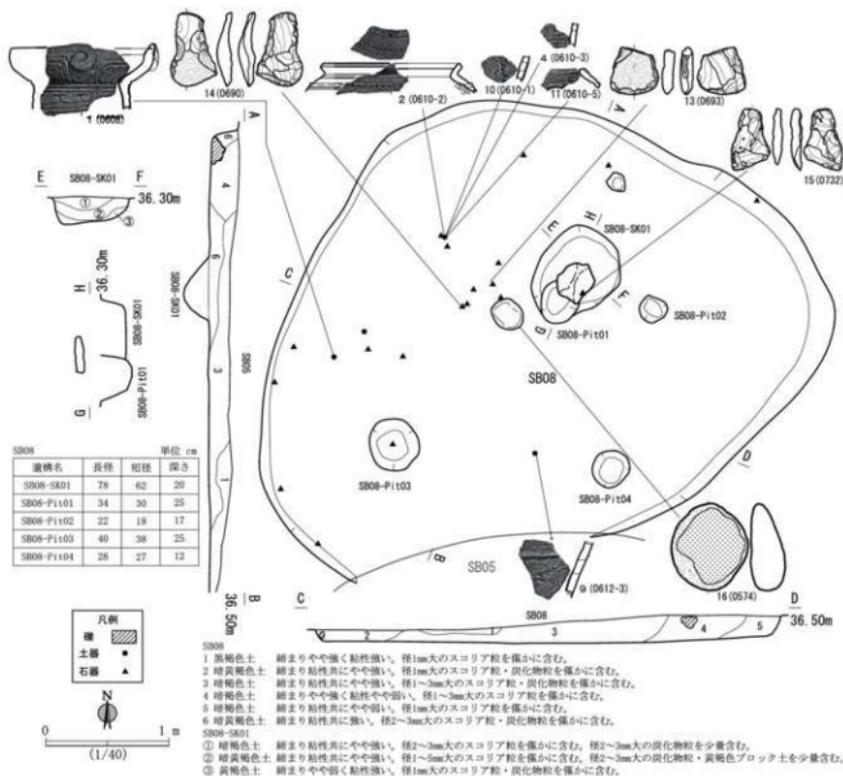


図14 8号住居跡 実測・遺物出土状況図

深さ0.06m、主軸の方向は不明である。

ピットは4基検出された（SB09-Pit01～04）。ピットの計測値は図15に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、スタンプ形石器、磨・敲石が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

10号住居跡（SB10）（図16）

調査区西側のB4-B5-C4-C5グリッド、標高36.48mにて検出された。

北側を2号溝状遺構、西側上部を花川戸第4号墳周溝、東側で8・9号住居跡に切られている。現況で遺構に付属するピットが4基検出された。遺構の中央西側で配石状の礫・石器が検出された。遺構から30～60cm大の礫が多く検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北5.33m、東西6.14m、深さ0.20m、主軸の方向は不明である。

ピットは4基検出された（SB10-Pit01～04）。各ピットの計測値は図16に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器はスクレイパー、石筥、打製石斧、磨・敲石、石皿が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

11号住居跡（SB11）（図17）

調査区中央東よりのD3-D4-E3-E4グリッド、標高36.58mにて検出された。

北側を4号住居跡、南側を3号溝状遺構に切られている。現況で遺構に付属するピットが6基検出された。平面形態は楕円形と

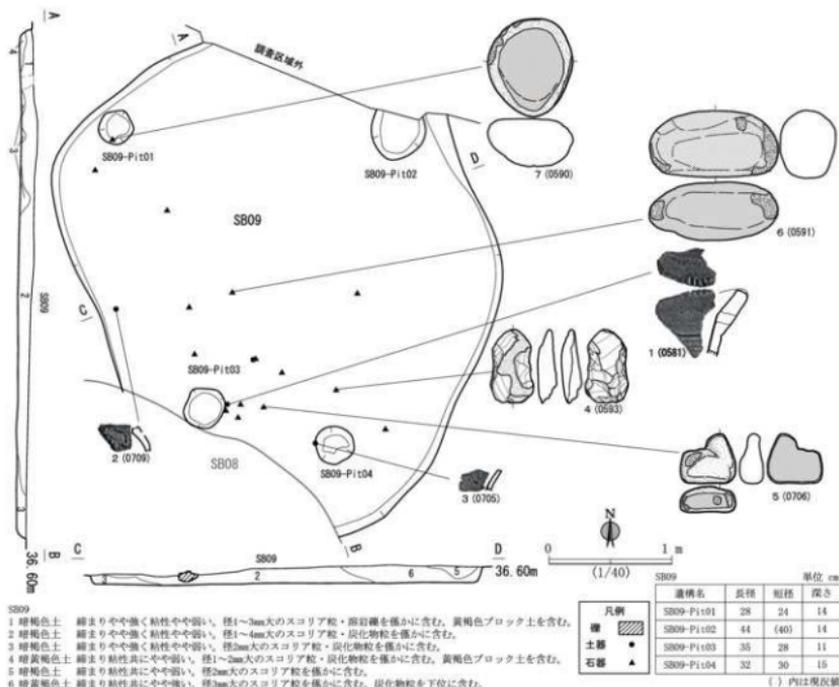


図 15 9号住居跡 実測・遺物出土状況図

推定される。規模は現況で南北 2.30m、東西 3.49m、深さ 0.26m を測る。主軸の方向は不明である。

ピットは6基検出された (SB11-Pit01 ~ 06)。各ピットの計測値は図 17 に示した。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

12号住居跡 (SB12) (図 18)

調査区北東の F3-F4 グリッド、標高 36.60m にて検出された。

遺構の南西側は試掘トレンチに削平されている。北西側を3号住居跡に切られている。現況で遺構に付属するピットが1基検出された。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南西 - 北東 2.76m、北西 - 南東 1.60m、深さ 0.22m を測る。主軸の方向は不明である。

ピットは1基検出された (SB12-Pit01)。ピットの計測値は図 18 に示した。

遺物は縄文時代の石皿が出土した。

時期は切合や覆土から判断して縄文時代前期後半である。

13号住居跡 (SB13) (図 19)

調査区南東の D2-E2 グリッド、標高 36.58m にて検出された。

遺構の南側は調査区域外に延びている。西側を1号住居跡・6号溝状遺構に切られている。東側で9号溝状遺構が検出された。直上で3号集石構が検出された。平面形態は不明である。規模は現況で南北 3.90m、東西 3.21m、深さ 0.32m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代の石鏃、磨・敲石が出土した。

時期は検出面や覆土から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

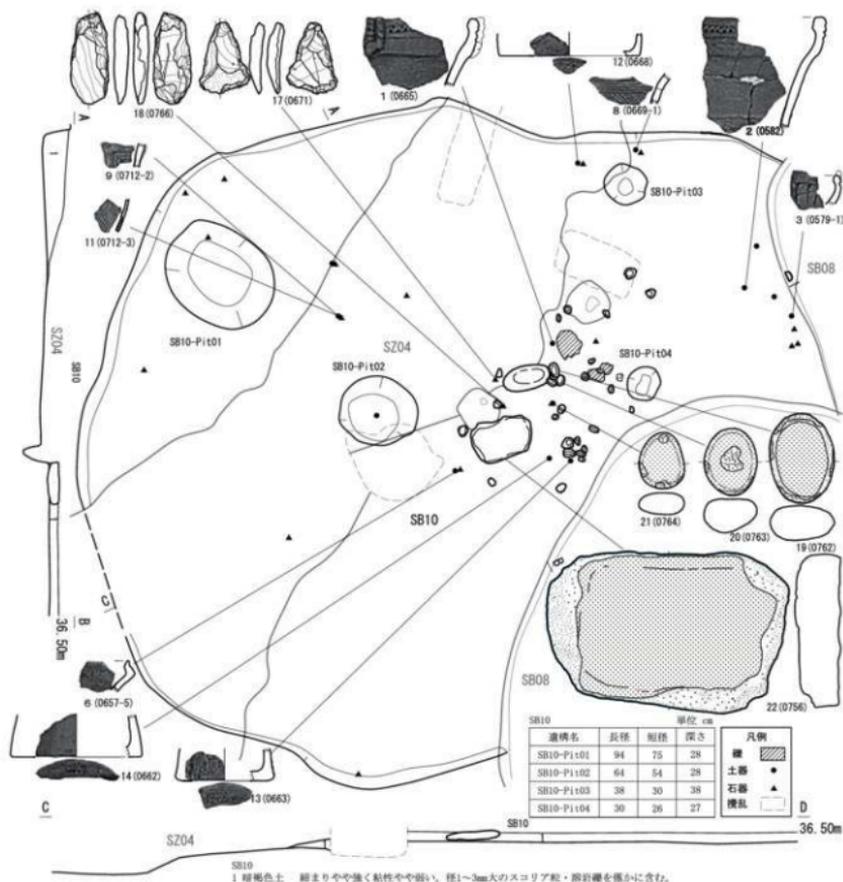


図16 10号住居跡 実測・遺物出土状況図

14号住居跡 (SB14) (図20)

調査区南西隅のA3-B3グリッド、標高35.80mにて検出された。

遺構の西～南側は調査区域外に延びており、北東側の一部が検出された。遺構から10cm前後大の丸みのある自然礫と30～60cm大の溶岩礫から構成される礫の集合が検出された。遺構の廃棄後に投げ込まれた礫と思われる。平面形態は楕円形と推定される。規模は現況で南北2.50m、東西2.43m、深さ0.26mを測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代前期後半の諸磯式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は石織、スクレイパー、石錘、スタンプ形石器、磨・蔽石が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代前期後半である。

土坑

1号土坑 (SK01) (図21)

調査区中央のD3-D4グリッド、標高36.55mにて検出された。

直下で11号住居跡、東側で3号土坑、南側で2号土坑が検出された。平面形態はほぼ円形で、規模は最大長1.46m、最大幅1.37m、

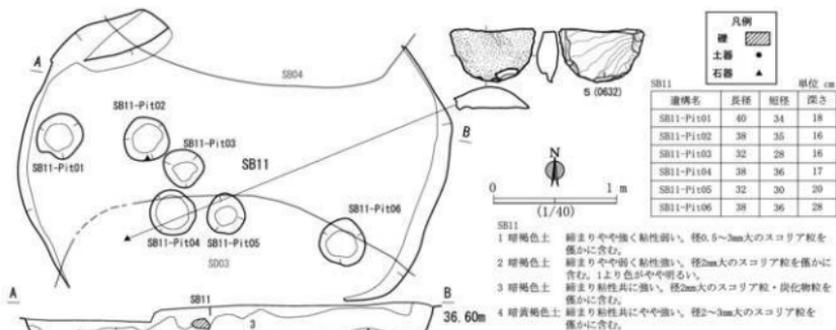


図 17 11号住居跡 実測・遺物出土状況図



図 18 12号住居跡 実測・遺物出土状況図

深さ0.14mを測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

2号土坑 (SK02) (図 21)

調査区中央のD3グリッド、標高36.44mにて検出された。

直下で3・5号溝状遺構、北側で1号土坑、北東側で3号土坑が検出された。平面形態はほぼ円形で、規模は最大長1.43m、最大幅1.37m、深さ0.13mを測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

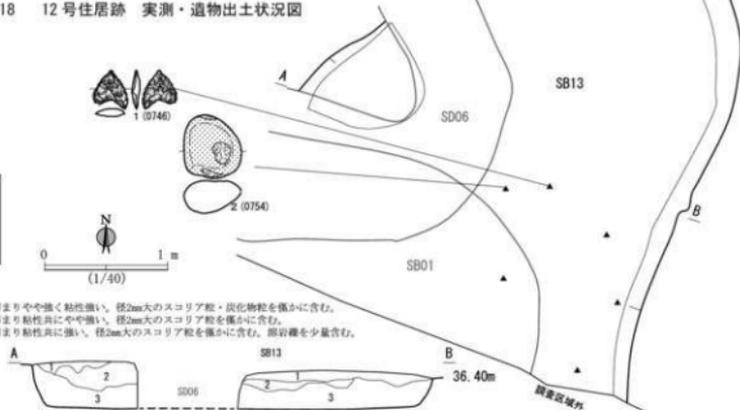


図 19 13号住居跡 実測・遺物出土状況図

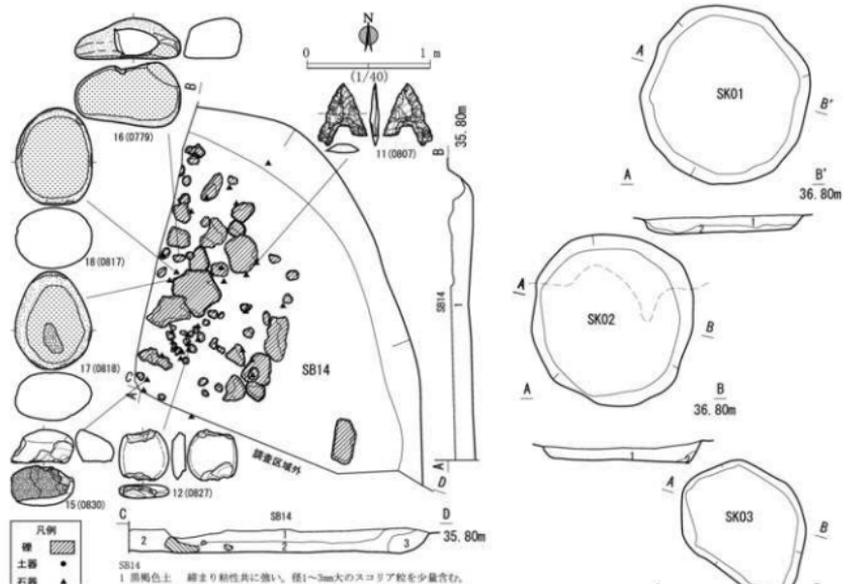


図20 14号住居跡 実測・遺物出土状況図

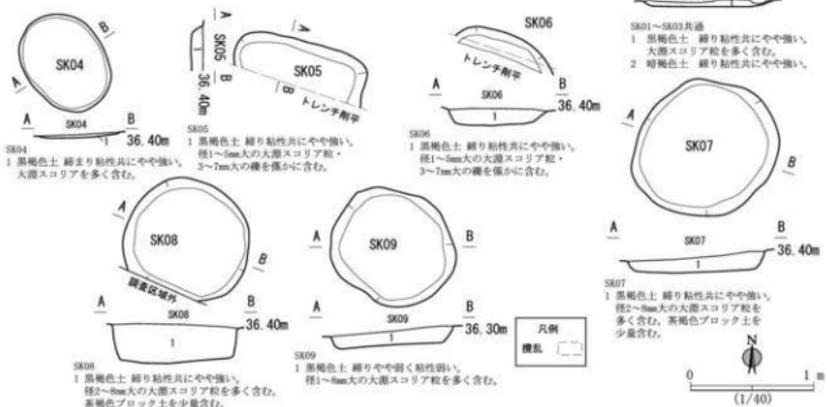


図21 土坑 実測図

時期は覆土から判断して中世以降である。

3号土坑 (SK03) (図21)

調査区中央東よりのD3-D4-E3-E4グリッド、標高36.60mにて検出された。

直下で11号住居跡、西側で1号土坑、南西側で2号土坑が検出された。平面形態は不整形で、規模は最大長1.21m、最大幅0.94m、深さ0.05mを測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文土器の小破片が出土した。

時期は覆土から判断して中世以降である。

4号土坑 (SK04) (図 21)

調査区中央南西よりの C3 グリッド、標高 36.38m にて検出された。

直下で5号住居跡、南東側で5号土坑が検出された。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.84m、短軸 0.65m、深さ 0.04m を測る。主軸の方向は $N-37^{\circ}-W$ を指向する。遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

5号土坑 (SK05) (図 21)

調査区中央南よりの C3 グリッド、標高 36.31m にて検出された。

直下で7号住居跡、西側で6号土坑が検出された。遺構の南側は試掘トレンチにより削平されていた。平面形態は不明、規模は現況で最大長 1.09m、最大幅 0.38m、深さ 0.09m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

6号土坑 (SK06) (図 21)

調査区南西の B3 グリッド、標高 36.28m にて検出された。

東側で5号土坑が検出された。遺構の南側は試掘トレンチにより削平されていた。平面形態は不明、規模は現況で最大長 0.85m、最大幅 0.19m、深さ 0.14m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

7号土坑 (SK07) (図 21)

調査区中央南やや東よりの D2 グリッド、標高 36.31m にて検出された。

北側で2号土坑、南東で8号土坑が検出された。平面形態はほぼ円形で、規模は最大長 1.22m、最大幅 1.05m、深さ 0.15m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

8号土坑 (SK08) (図 21)

調査区南東側の D2-E2 グリッド、標高 36.28m にて検出された。

遺構の南端は調査区域外に延びている。直下で1号住居跡が検出された。平面形態はほぼ円形で、規模は現況で最大長 1.05m、最大幅 1.03m、深さ 0.32m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄土器の小破片、黒曜石の剥片などが出土した。

時期は覆土から判断して中世以降である。

9号土坑 (SK09) (図 21)

調査区西の B4 グリッド、標高 36.23m にて検出された。

遺構の直下で花川戸第4号墳周溝が検出された。平面形態は円形に近い不整形で、規模は最大長 1.01m、最大幅 0.92m、深さ 0.14m を測る。主軸の方向は不明である。

遺物は出土しなかった。

時期は覆土から判断して中世以降である。

10号土坑 (SK10) (図 22)

調査区中央北よりの D4 グリッド、標高 36.41m にて検出された。

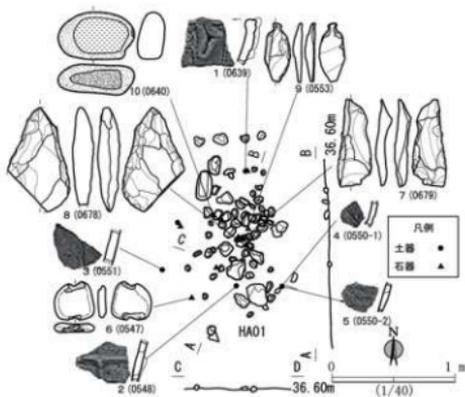


図 22 1号配石遺構 実測・遺物出土状況図

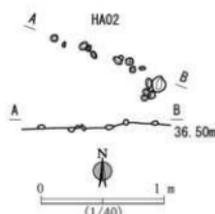


図 23 2号配石遺構 実測図

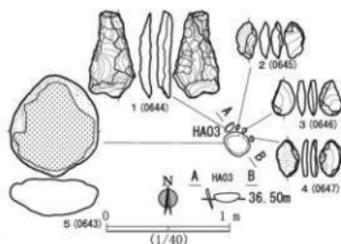


図 24 3号配石遺構 実測・遺物出土状況図

時期は出土した石器から判断して縄文時代である。

集石遺構

1号集石遺構 (SS01) (図24)

調査区南東隅のE2-F2グリッド、標高36.20mにて検出された。西側で13号住居跡、北西側で2・3号集石遺構が検出された。集石の下から土坑が検出された(SS01-SK01)。規模は集石部分で最大長1.25m、最大幅0.81m、土坑で最大長0.85m、最大幅0.69m、深さ0.17mを測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、石器は磨・蔽石が出土した。

時期は出土した層位や土器から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

2号集石遺構 (SS02) (図24)

調査区南東隅のE2グリッド、標高36.16mにて検出された。西側で13号住居跡、北西側で3号集石遺構、南東側で1号集石遺構が検出された。規模は最大長0.34m、最大幅0.29mを測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代の磨・蔽石が出土した。

時期は出土した層位や遺物から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

3号集石遺構 (SS03) (図24)

調査区南東隅のE2グリッド、標高36.30mにて検出された。直下で13号住居跡、北西下で6号溝状遺構、南東で9号溝状遺構、1・2号集石遺構、南西で1号住居跡が検出された。規模は集石部分で最大長4.66m、最大幅1.84mを測る。主軸の方向は不明である。遺物は縄文時代の磨・蔽石、凹石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

溝状遺構

1号溝状遺構 (SD01) (図26)

調査区中央のC2-C3-D2-D3-D4グリッド、標高36.48～36.55mにて検出された。

遺構は南下し、南側は調査区域外に延びている。検出部分の中央付近は攪乱を受けている。直下で2号住居跡を切っている。規模は現況で最大長9.37m、幅0.82～2.41m、深さ0.28mを測る。主軸の方向はN-8°-Eを指向する。

遺物は縄文土器の小破片が出土した。

時期は覆土から判断して中世以降である。

2号溝状遺構 (SD02) (図27)

調査区北西のB5-C4-C5-D5グリッド、標高36.47～36.60mにて検出された。

遺構は東から西へ向かって標高を下げている。遺構の西側は調査区域外に延びている。検出部分の中央付近は攪乱を受けている。遺構の中央西よりで花川戸第4号墳周溝(SZ04-SD01)を切っている。規模は現況で最大長8.91m、幅0.49～1.42m、深さ0.09mを測る。主軸の方向はN-84°-Wを指向する。

遺物は縄文時代前期後半～中期初頭の縄文土器、縄文時代の石器

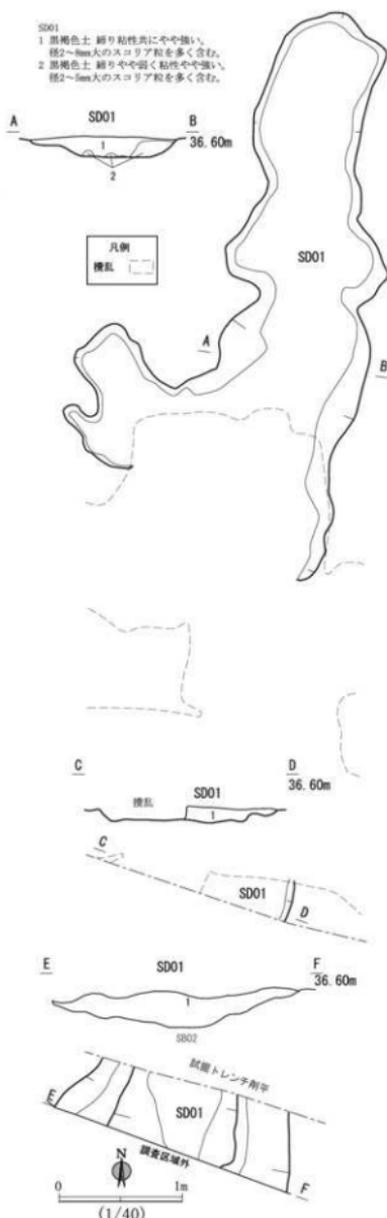


図26 1号溝状遺構 実測図

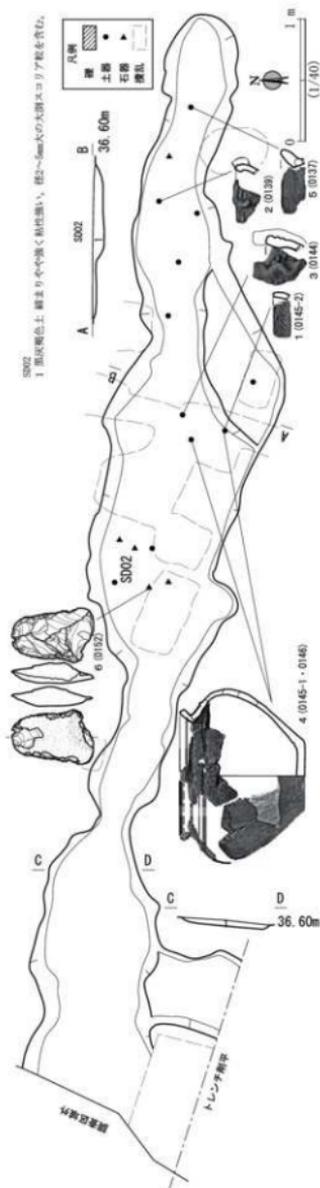


図27 2号溝状遺構 実測・遺物出土状況図

が出土した。

時期は縄文土器が出土しているが、覆土や切合から判断して中世以降である。

3号溝状遺構 (SD03) (図28)

調査区南東のD3-E3グリッド、標高36.36～36.50mにて検出された。

遺構は楕円を描くように一周し、南側で6号溝状遺構を切っている。遺構全体としては北側が浅く南側は深い。南東側で南西側で5号溝状遺構、南側で2号住居跡、北側で11号住居跡を切っている。検出部分の中央付近は浅い攪乱を受けており、北東側は深い攪乱を受けている。規模は現況で南北5.18m、東西7.67m、幅0.90～2.49m、深さ0.27～0.69mを測る。主軸の方向不明である。

遺物は縄文時代前期後半の諸磯式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は打製石斧、磨・蔽・凹石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

4号溝状遺構 (SD04) (図29)

調査区中央南端のC2-C3-D3グリッド、標高36.23～36.29mにて検出された。

遺構は北から正南北に南下し、途中で南西方向に向きを変える。南西側で7号住居跡を切っている。正南北から南西方向へ向きを変える部分で攪乱を受けている。規模は現況で最大長4.80m、幅0.51～1.18m、深さ0.11～0.21mを測る。主軸の方向は正南北～N-47°-Eを指向する。

遺物は縄文時代中期初頭の小型深鉢、石器は打製石斧が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代中期初頭である。

5号溝状遺構 (SD05) (図30)

調査区中央南東よりのD3グリッド、標高36.49mにて検出された。

遺構の直上で3号溝状遺構に切られている。遺構からは40～60cm大の礫が数点検出された。規模は現況で最大長2.75m、幅1.11m、深さ0.72mを測る。主軸の方向はN-14°-Eを指向する。

遺物は縄文時代の打製石斧が出土した。

時期は検出面や切合から判断して縄文時代前期後半～中期初頭である。

6号溝状遺構 (SD06) (図31)

調査区南東のD2-D3-E2-E3グリッド、標高36.36～36.50mにて検出された。

遺構は楕円を描いて一周するかのように湾曲し、北側で3号溝状遺構を切っている。南側で1・2号住居跡に切られている。東側で13号住居跡、西側で7号住居跡を切っている。底部の標高は北側が高く南側は低い。規模は現況で南北3.88m、東西4.93m、幅0.73～1.41m、深さ0.68mを測る。主軸の方向は不明である。

遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は石匙、磨・蔽石、凹石が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代中期初頭である。

7号溝状遺構 (SD07) (図32)

調査区中央のC4-D4-E4グリッド、標高36.45mにて検出された。

遺構は東から西へ流れており、向きを変えて南西方向に下る。東よりで4号住居跡、南側を10号土坑、南西で5号住居跡に切られている。規模は現況で最大長7.48m、幅0.60～1.56m、深さ0.21mを測る。主軸の方向は東西方向部分でN-71°-W、南西方向部分でN-52°-Eを指向する。

遺物は縄文時代前期後半の諸磯式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、石器は磨・蔽石が出土した。

時期は出土した土器や切合から判断して縄文時代前期後半である。

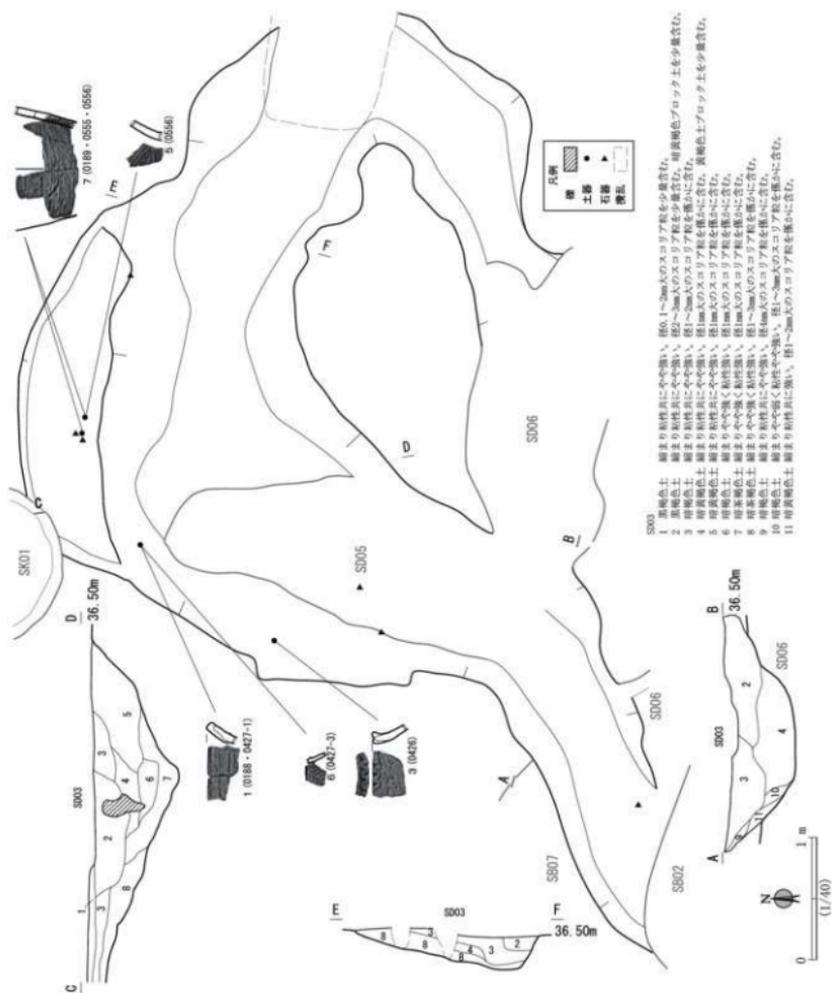


図 28 3号溝状遺構 実測・遺物出土状況図

8号溝状遺構 (SD08) (図 33)

調査区北西端の B5-C5 グリッド、標高 36.54m にて検出された。

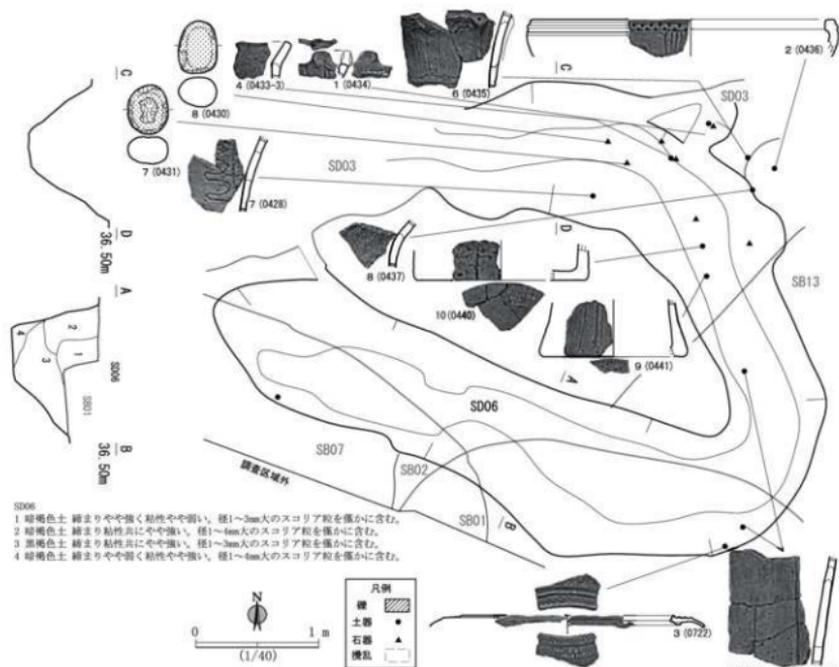
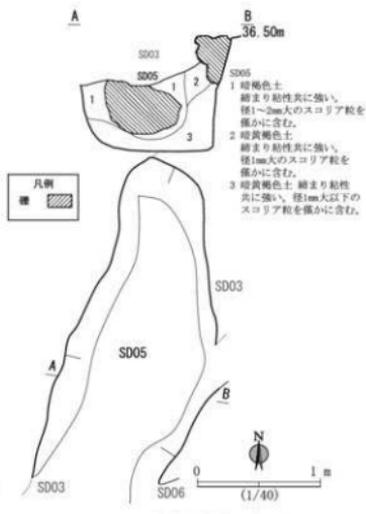
遺構の西側は調査区域外に伸びている。東端は西側より深くなっている。北東側上部は近現代の建物跡による擾乱を受け、東側上部は花川戸第4号墳周溝に切られている。規模は現況で最大長 7.48m、幅 0.60 ~ 1.56m、深さ 0.21m を測る。主軸の方向は N-54°-W を指向する。

遺物は縄文時代の土器が出土した。

時期は出土した土器から判断して縄文時代である。

9号溝状遺構 (SD09) (図 34)

調査区南東の E2 グリッド、標高 36.54m にて検出された。



遺跡名	時代	標高 m	グリッド	平面形態	長径 cm	短径 cm	深さ cm
Pa01	古墳時代以降	36.26	B3	不整形	42	41	7
Pa02	古墳時代以降	36.28	B3	楕円形	44	30	10
Pa03	古墳時代以降	36.28	B3	楕円形	59	53	6
Pa04	古墳時代以降	36.27	C3	不明	29	(19)	4
Pa05	古墳時代以降	36.52	C5	楕円形	41	36	26
Pa06	古墳時代以降	36.37	A3	楕円形	38	35	20
Pa07	古墳時代以降	36.59	C4	不整形	50	42	18
JP01	縄文時代	36.41	D4	不整形	32	32	19
JP02	縄文時代	36.47	D4	楕円形	31	29	20
JP03	縄文時代	36.43	C4	楕円形	36	34	23
JP04	縄文時代	36.38	C4	不整形	38	35	37
JP05	縄文時代	36.40	C5-C5	不整形	39	29	15
JP06	縄文時代	36.41	C4	不整形	36	35	20
JP07	縄文時代	36.32	C4	不整形	42	39	24

遺跡名	時代	標高 m	グリッド	平面形態	長径 cm	短径 cm	深さ cm
JP08	縄文時代	36.36	C4	不整形	61	52	34
JP09	縄文時代	36.21	C3	不整形	43	36	27
JP10	縄文時代	36.20	C3	不整形	42	41	27
JP11	縄文時代	36.21	C3	不整形	30	28	27
JP12	縄文時代	36.46	D4	円形	31	29	24
JP13	縄文時代	36.51	A3	不明	36	34	32
JP14	縄文時代	36.05	B3-B4	不整形	53	45	30
JP15	縄文時代	36.05	B3	不整形	43	41	19
JP16	縄文時代	36.09	D3	不整形	41	37	21
JP17	縄文時代	36.20	B4-C4	円形	54	52	11
JP18	縄文時代	36.22	B4-C4	楕円形	52	47	35
JP19	縄文時代	36.25	B4	不整形	34	32	30
JP20	縄文時代	36.20	D4	不整形	36	35	24
JP21	縄文時代	36.25	D4	楕円形	54	50	33

() は埋没品

表3 ビット一覧表

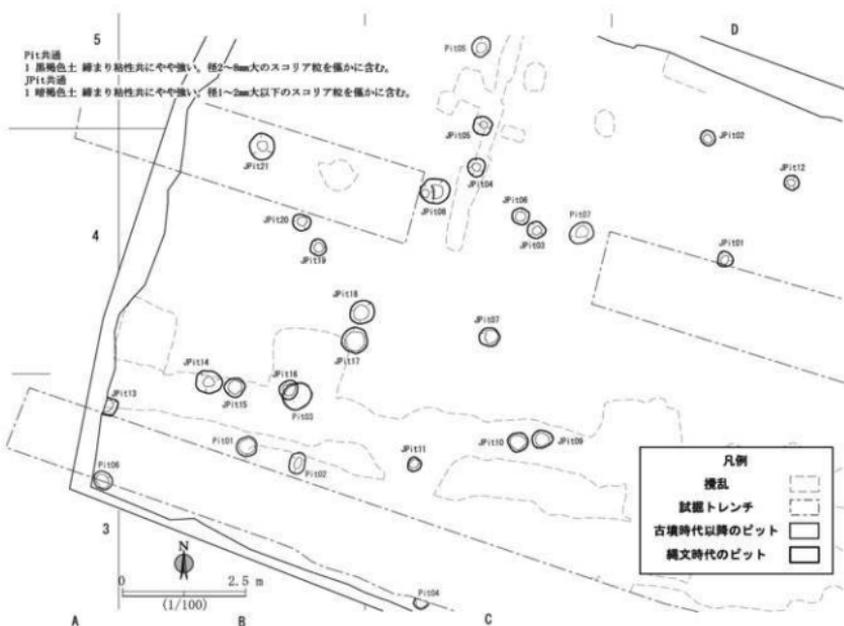


図35 ビット配置図

ビット (図35、表3)

遺構に付属しないビットは古墳時代以降のビット7基 (Pa01～07) と縄文時代のビット21基 (JP01～21) が検出された。これらは覆土で区別した。いずれも調査区西側で多く検出されている。各ビットの詳細・計測値は表3に示した。

(小金澤 彩可)

2 遺物

今回の調査では主に縄文時代前期後半～後期初頭の縄文土器が出土した。諸磯式土器、五領ヶ台式土器を中心に、外來系土器が混在する。また包含層から縄文時代早期の格状体圧痕土器の破片が出土し、図示した。石器は打製石斧、磨・敲石、凹石、石皿が多く出土し、石鏃や石匙、石鏝は出土したが量は少ない。

以下、遺構別に記述していく。

住居跡

1号住居跡 (図36)

土器は2点の無文土器を図示した。1(0370)は胴部、2(0337)は底面に網代痕のある小型深鉢の底部である。

石器は3点を図示した。3(0372)は安山岩製の磨・敲・凹石、4(0374)は安山岩製の磨・敲石、5(0375)は磨・敲石で表面と底面に磨痕、側面に敲痕がみられる。

2号住居跡 (図37)

土器は2点を図示した。1(0341)は波状口縁部で、口唇部と外面口縁部に竹管状工具による横位の沈線を施す。2(0343)は表面に縄文を施す。

石器は4点を図示した。3(0345)はホルンフェルス製のスクレイパー、5(0446)は安山岩製の磨・敲石、6(SB02-DS02/0448)は住居跡内で検出された安山岩製の台石である。

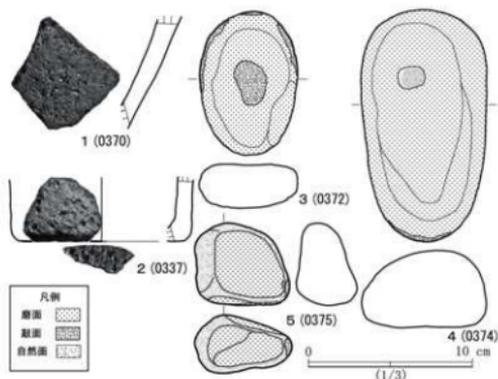


図36 1号住居跡 出土遺物拓影・実測図

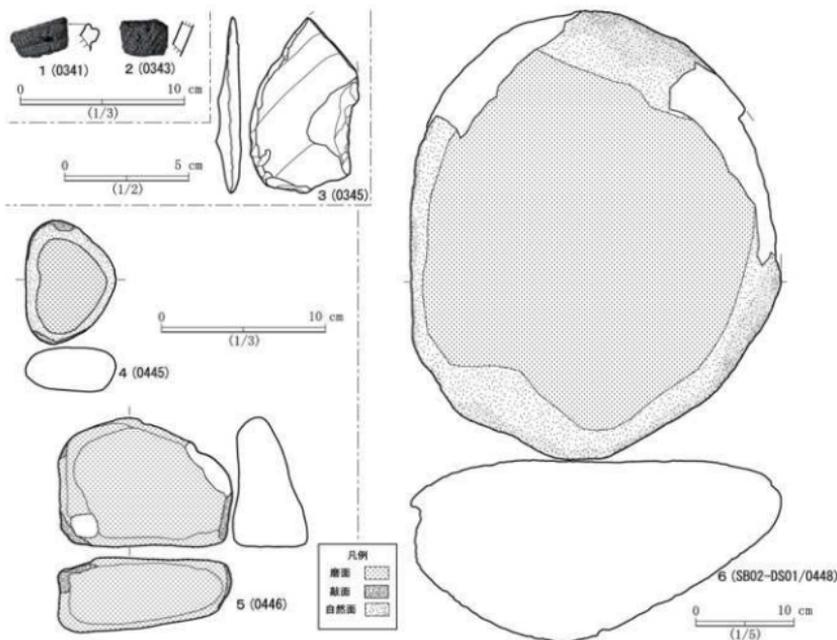


図37 2号住居跡 出土遺物拓影・実測図

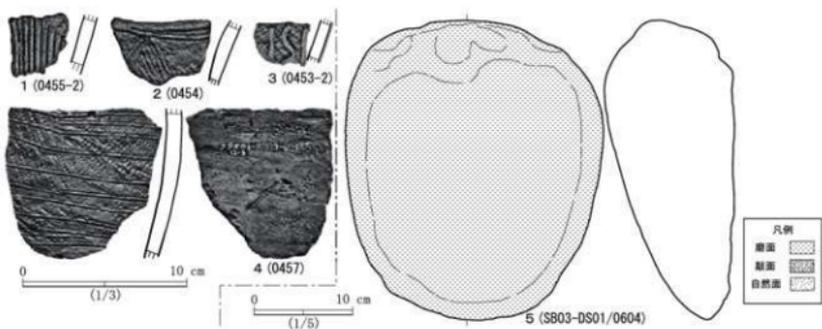


图 38 3号住居跡 出土遺物拓影・実測圖

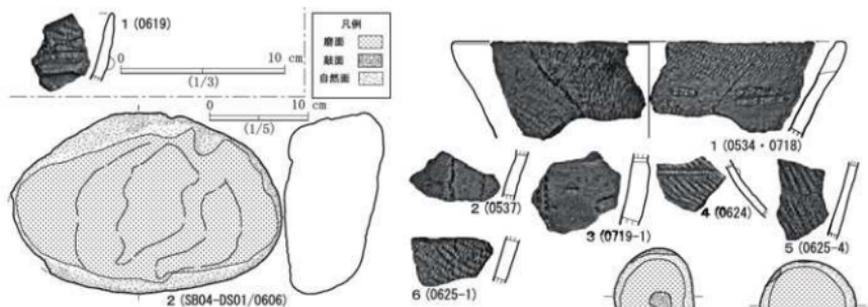


图 39 4号住居跡 出土遺物拓影・実測圖

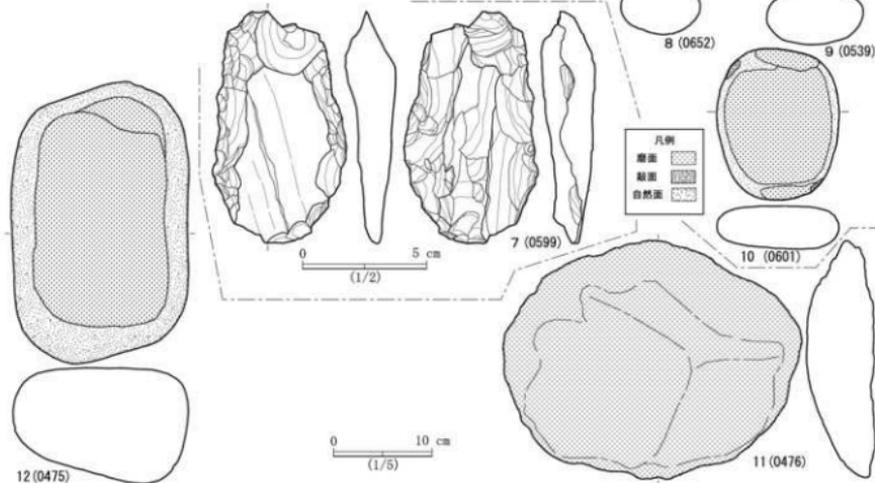


图 40 5号住居跡 出土遺物拓影・実測圖

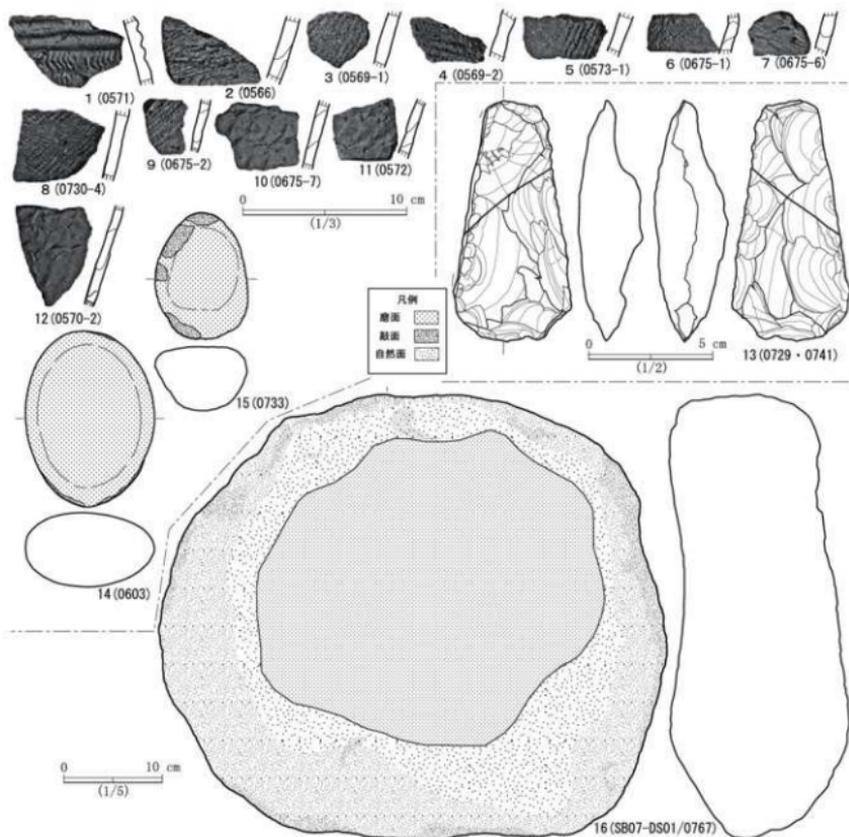


図41 7号住居跡 出土遺物拓影・実測図

3号住居跡 (図38)

土器は4点を図示した。2・4は諸磯式土器である。1(0455-2)・2(0454)は竹管状工具による沈線、3(0453-2)は縄文の地に細い縦位の紐状張付文、4(0457)は縄文の地に竹管状工具による不規則な横位の沈線を施す。

石器は1点を図示した。5(SB03-DS01/0604)は住居跡内で検出された泥岩製の台石である。

4号住居跡 (図39)

土器は1点を図示した。1(0619)は外面波状口縁、口唇部ナデ・口縁部斜縄文・結節浮線文・上部に沈線をもつ横位の隆線文、内面口縁部に稜・ナデを施す。

石器は1点を図示した。2(SB04-DS01/0606)は住居跡内で検出された安山岩製の台石である。

5号住居跡 (図40)

土器は6点を図示した。2・3は五領ヶ台式土器、4・5は外来系土器である。1(0534・0718)は口縁部で口唇部面取り後斜縄文、外面斜縄文、内面口縁部から2.5cm幅で斜縄文・ナデを施す。2(0537)は縄文、3(0719-1)は竹管状工具による縦位の沈線が入る胴部、4(0624)は縄文に横位の結節浮線文、5(0625-4)・6(0625-1)は縄文が施される胴部である。

石器は6点を図示した。7(0599)は頁岩製の打製石斧、8(0652)は安山岩製の磨・敲石・凹石、9(0539)は安山岩製・10(0601)は泥岩製の磨・敲石、11(0476)は泥岩製・12(0475)は安山岩製の石皿である。

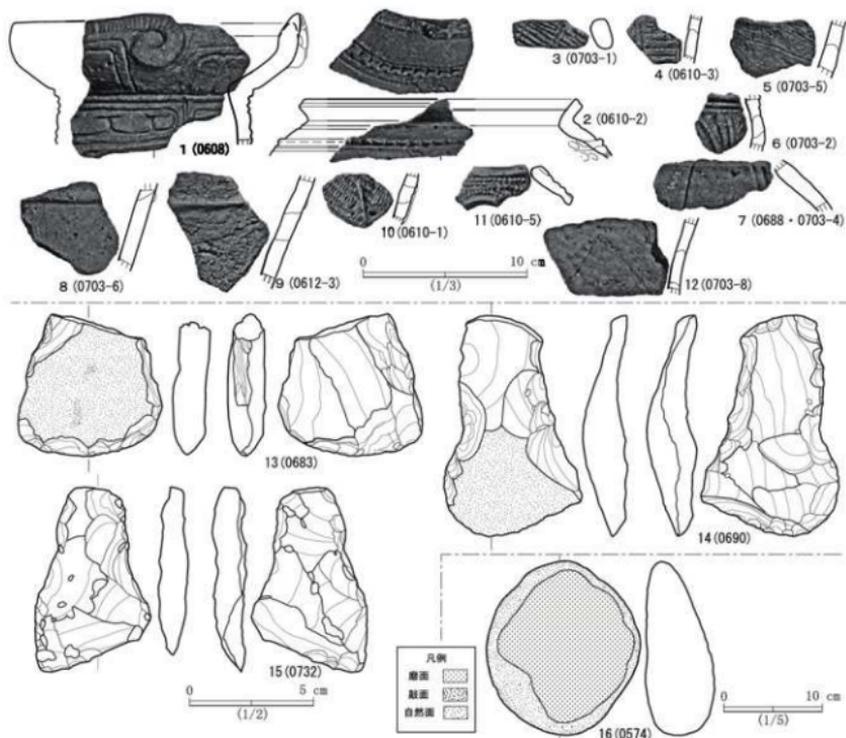


図 42 8号住居跡 出土遺物拓影・実測図

7号住居跡 (図 41)

土器は12点を図示した。10～12は五領ヶ台式土器である。1は竹管状工具による横位の沈線下に竹管状工具による連続押圧を施す。2(0566)・3(0569-1)・4(0569-2)・5(0573-1)・6(0675-1)・7(0675-6)・8(0730-4)・9(0675-2)は縄文、10(0675-7)・11(0572)・12(0570-2)は無文で輪積痕を表に残し裏はナデている。

石器は4点を図示した。13(0729・0741)はホルンフェルス製の打製石斧、14(0603)は輝石安山岩製の磨・敲石、15(SB07-DS01/0767)は住居跡内で検出された安山岩製の台石である。

8号住居跡 (図 42)

土器は12点を図示した。1～4・6は五領ヶ台式土器、11は外来系土器である。1(0608)は口唇部竹管状工具によるD字文を付す隆線文の先を溝状に突起状に張付、口縁部竹管状工具による横位の沈線の下に連続逆U字文、頸部に竹管状工具による横位の沈線、胴部竹管状工具による横位の槽円形沈線の中に棒状工具によるB型文を施す。2(0610-2)は口唇部横位の沈線、頸部竹管状工具による横位の押し文、肩部半載竹管状工具による横位の交互刺突文・押し文による区画沈線・押し文による曲線の沈線を施す。10(0610-1)・11(0610-5)は外来系土器の胴部である。

石器は4点を図示した。13(0683)は珪質頁岩製の磨・敲石、14(0690)は泥岩製の磨・敲石、15(0732)は泥岩製の打製石斧、16(0574)は安山岩製の石皿である。

9号住居跡 (図 43)

土器は3点を図示した。1(0581)は波状口縁部で、口唇部に棒状工具によるキザミを施す。

石器は3点を図示した。4(0593)は安山岩製の打製石斧、5(0706)は砂岩・6(0591)は安山岩製のスタンプ形石器である。

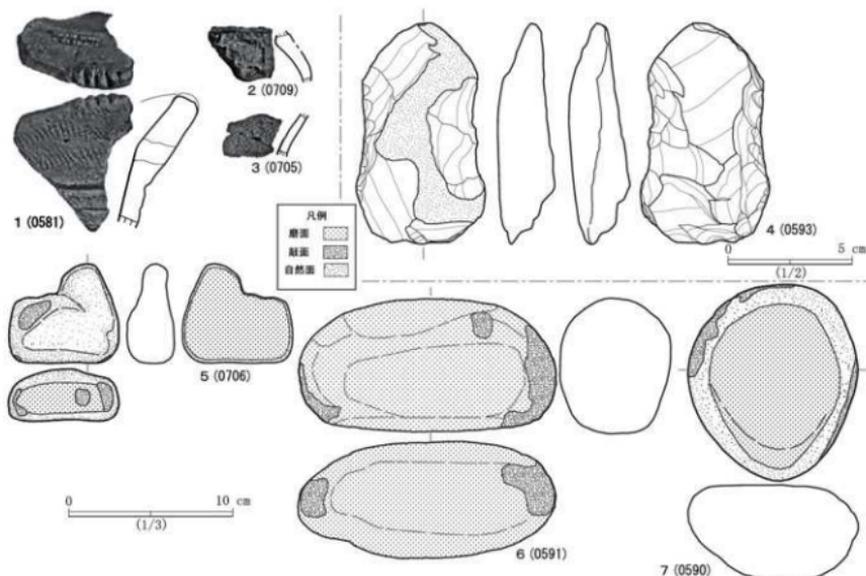


図 43 9号住居跡 出土遺物拓影・実測図

10号住居跡 (図 44・45)

土器は14点を図示した。1～5・8～10・12・13は五領ヶ台式土器、6・11は外来系土器である。1(0665)は波状口縁、口唇部面取り後ナデ・縦位の垂直・直角に曲がる隆帯に竹管状工具によるキザミ、外面口縁部交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線・口縁部文様帯を段で区画・胴部ナデを施す。2(0582)は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線・口縁部文様帯を段で区画・胴部ナデ・横位の浮線文を施す。3(0579-1)は口唇部面取り後ナデ・隅丸長方形の突起、外面口縁部に沿って竹管状工具による横位の沈線、逆三角形の陰刻頂点から縦位の沈線が伸びて形作る逆U字文を施す。4(0773-1)は口縁部に沿って竹管状工具による横位の押引文を3条施す。5(0852-3)は波状口縁部の頂部で、外面渦巻き状の粘土紐を張付・口唇部肥厚・竹管状工具による縦位の押引文、内面渦巻き状の粘土紐を張付・竹管状工具による縦位の押引文・稜を境にナデを施す。6(0657-5)は外面口縁部縦位のソメン状張付文・口縁・頸部境に横位の結節浮線文・肩部格子状ソメン状張付文に竹管状工具による横位の沈線3条・胴部竹管状工具による綾杉文を施す。8(0669-1)・9(0712-2)は五領ヶ台式土器の胴部、12(0668)・13(0663)は表面に調文が施される深鉢の底部である。

石器は6点を図示した。15(0851-2)はホルンフェルスの剥片を利用したスクレイパー、16(0851-1)はホルンフェルス製の石鑿、17(0671)はホルンフェルス製・18(0766)は泥岩製の打製石斧、19(0762)・20(0763)・21(0764)は安山岩製の磨・蔽石、22(0756)は粗板形の泥岩製石皿である。

11号住居跡 (図 46)

土器は4点を図示した。1・2は五領ヶ台式土器である。1(0681-2)は口唇部面取り後ナデ・竹管状工具による縦位の沈線×5の両脇に渦巻き状の粘土紐を張付、外面口縁部横位の浮線文・縦位の棒状張付文・横位の浮線文直下に竹管状工具による横位の押引文・三角形の浮線文の内側に竹管状工具による横位の押引文を施す。2(0858-2)は竹管状工具による集合沈線を施す。3(0681-1)・4(0858-1)は縄文を施す。

石器は2点を図示した。5(0632)はホルンフェルスの剥片を利用した石斧、6(0681-3)は泥岩製の磨・蔽石である。

12号住居跡 (図 47)

石器は1点を図示した。1(0768)は安山岩製の石皿で、一度割れた石皿を再利用している。

13号住居跡 (図 48)

石器は2点を図示した。1(0746)は黒曜石製の石鏃、2(0754)は安山岩製の磨・蔽石である。

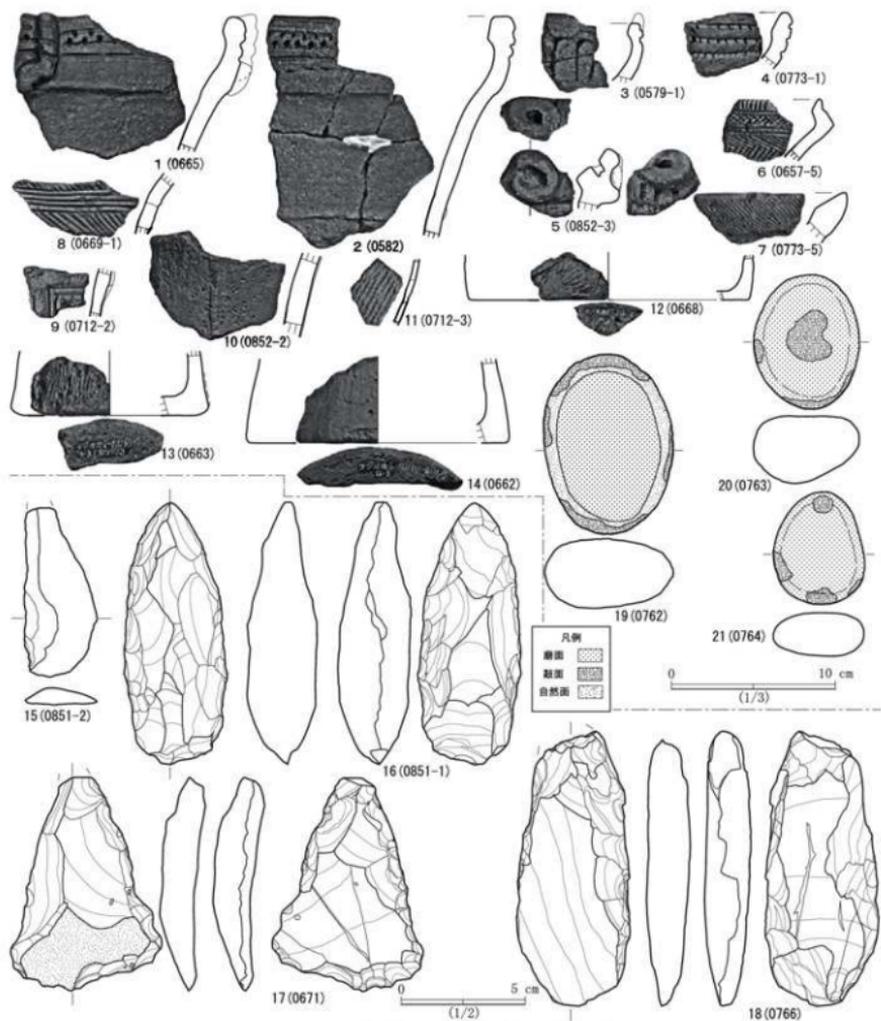


図44 10号住居跡 出土遺物拓影・実測図①

14号住居跡 (図49)

土器は10点を図示した。3・5~7・14は諸磯式土器、1は五領ヶ台式土器、2・8・9は外来系土器である。1(0846-11)は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部交互刺突文・棒状工具による横位の沈線区画・棒状工具による縦位の沈線・棒状工具による二重円形文を施す。2(0770-4)は波状口縁、口縁端部折返し内側に面取り後ナデ、外面横位の結節浮線文・稜に隆線文・横位の結節浮線文2条の間に斜線文を施す。3(0846-5)・4(0846-2)は竹管状工具による集合沈線、5(0770-8)は縦位C字文、6(0846-3)は縄文の地文に横位の結節浮線文を施す。7(0846-12)・8(0846-7)・9(0846-6)は縄文を施す。10(0770-1)は縄文の地に縦位のC字文が施される深鉢の底部である。

石器は8点を図示した。11(0807)は黒曜石製の石鏃、12(0827)は泥岩製の石錘、13(0853-1)安山岩製・14(0853-2)はチャート

製のスクレイパー、15(0830)は安山岩製のスタンプ形石器、16(0779)は安山岩製の、17(0818)・18(0817)は泥岩製の磨・蔽石である。

配石遺構

1号配石遺構 (図50)

土器は5点を図示した。1は五領ヶ台式土器である。1(0639)は口唇部面取り後ナデ、外面三角形の粘土紐による張付文・竹管状工具による押引文・ナデを施す。2(0548)・3(0551)は隆線文、4(0550-1)は竹管状工具による集合沈線、5(0550-2)は縄文を施す。

石器は5点を図示した。6(0547)は安山岩製の石錘、7(0679)はホルンフェルス製のスクレイパー、8(0678)は安山岩製の打製石斧、9(0553)はホルンフェルス製の石匙、10(0640)は安山岩製のスタンプ形石器である。

3号配石遺構 (図51)

石器は5点を図示した。1(0644)は安山岩製の打製石斧、2(0645)・3(0646)・4(0647)は安山岩製のスクレイパー、5(0643)は泥岩製の石皿である。5の周囲に1~4を配置した状態で検出された。

集石遺構

1号集石遺構 (図52)

石器は2点を図示した。1(0378)は泥岩製の磨・凹石、2(0381)は安山岩製の磨・蔽石である。

2号集石遺構 (図53)

石器は1点を図示した。1(0383)は安山岩製の磨・蔽・凹石である。

3号集石遺構 (図54)

石器は3点を図示した。1(0384)は泥岩製の磨・蔽・凹石、2(0388)は安山岩製の磨・蔽石であるが、割れた後に割れ口をスタンプ形石器のように使用している。3(0387)は砂岩製の磨・蔽石である。

溝状遺構

2号溝状遺構 (図55)

土器は5点を図示した。1~4は五領ヶ台式土器である。1(0145-2)は口唇部面取り後ナデ、外面竹管状工具による縦糸条の集合沈線・竹管状工具による横位の浮線2条を施す。2(0139)は口唇部面取り後ナデ・渦巻き状隆線文を張付、外面口縁部竹管状工具による横位の沈線・棒状工具による逆U字文を施す。3(0144)は波状口縁、口唇部面取り後ナデ・頂部に円柱形の張付、外面口縁部頂部を中心に波状口縁に沿って交互刺突文・頂部より垂下曲線状の隆線文を施す。4(0145-1・0146)は頸部は鋭く屈曲、口唇部面取り後竹管状工具による横位の押引文、外面口縁部ナデ・頸部竹管状工具による横位の押引文に4単位の2連続U字文・胴部ナデ・交互刺突文・竹管状工具による横位の押引文・胴部ナデ・棒状工具による縦位の平行沈線・底部付近ヘラケズリ後ナデを施す。5(0137)は無文の口縁部である。

石器は1点を図示した。6(0152)は頁岩製の打製石斧である。

3号溝状遺構 (図56)

土器は8点を図示した。7は諸磯式土器、1・2は五領ヶ台式土器、6は外来系土器である。1(0188・0427-1)・2(0188-5)は口縁部で沈線・隆線文などを施す。3(0426)は口縁部で口唇部面取り後ナデ・棒状工具による沈線で逆U字文を隔刻、外面ケズリ

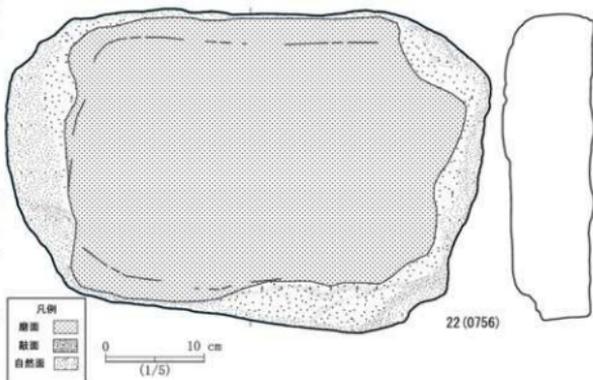


図45 10号住居跡 出土遺物拓影・実測図②

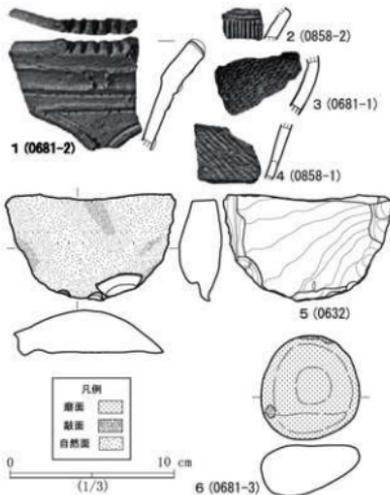


図46 11号住居跡 出土遺物拓影・実測図

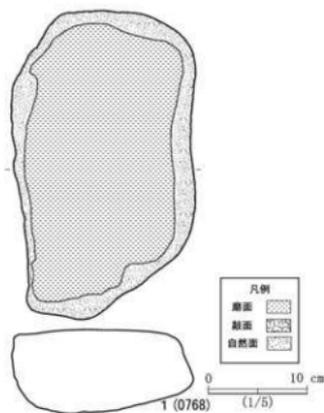


図 47 12号住居跡 出土遺物実測図

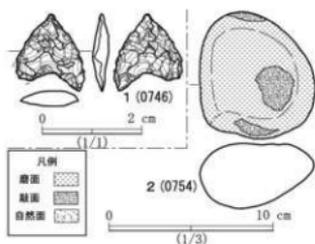


図 48 13号住居跡 出土遺物実測図

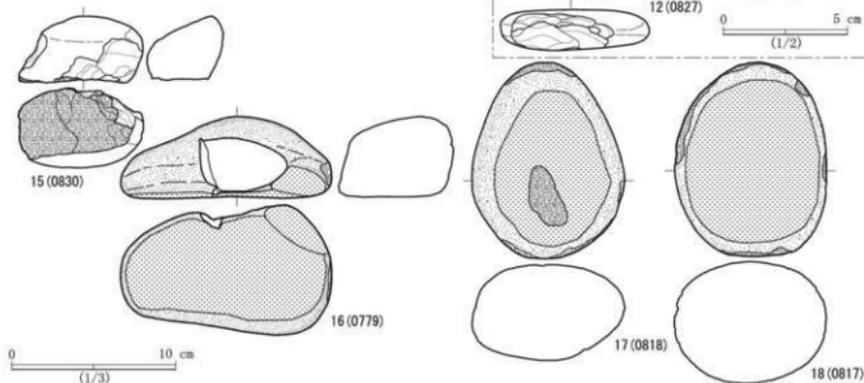
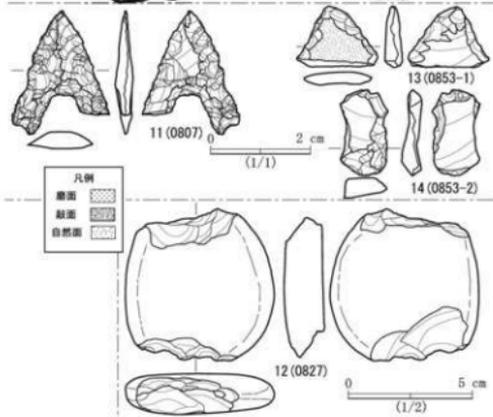
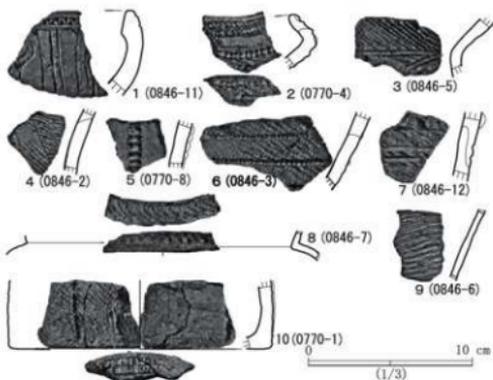


図 49 14号住居跡 出土遺物拓影・実測図



後ナデを施す。4(0189-3・0638-1)は胸部で頸部は屈曲、外面頸部～胸部に渦巻状の隆線文・竹管状工具による横位の沈線文・胸部縦位の隆線文・竹管状工具による曲線の沈線文を施す。5(0556)は竹管状工具による集合沈線。6(0427-3)は縄文の地に結節浮線文、7(0189・0555・0556)は縄文の地に竹管状工具による不規則な横位の沈線、8(0189-2・0638)は結節縄文を施す。

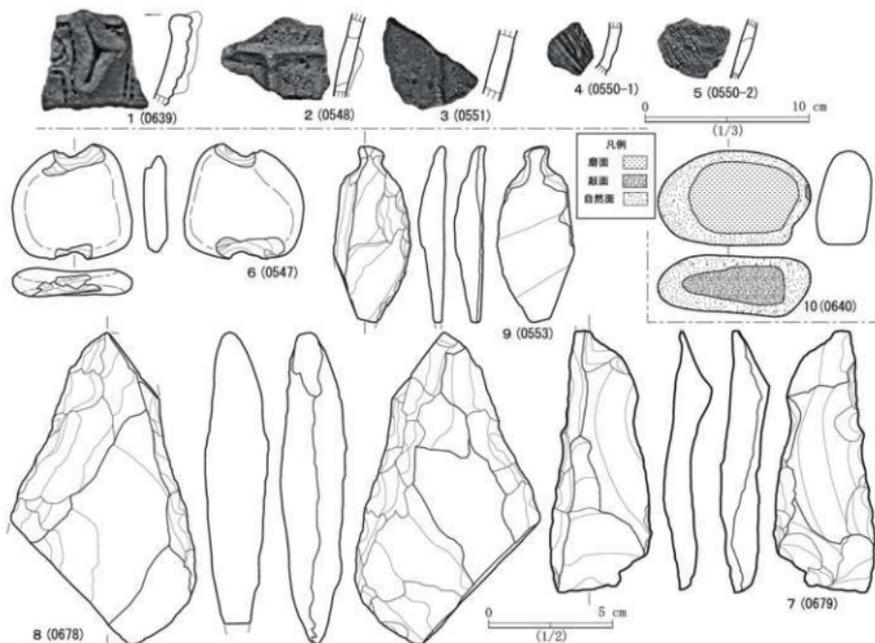


図50 1号配石遺構 出土遺物拓影・実測図

石器は2点を図示した。10(0188-3)は安山岩製の石斧で基部を欠損している。11(0190)は安山岩製の磨・蔽・凹石である。

4号溝状遺構 (図57)

土器は1点を図示した。1(0477)は小型深鉢の口縁～底部で、口唇部面取り後ナデ・縦位の短い隆線文、外面横位の隆線文・縦位の隆線文・ケズリ後ナデ、底部ナデを施す。

石器は2点を図示した。2(0480)・3(0481)はホルンフェルス製の打製石斧である。

5号溝状遺構 (図58)

石器は1点を図示した。6(0750)はホルンフェルス製のスクレイパーで、剥片を利用している。

6号溝状遺構 (図59)

土器は9点を図示した。1・2・6・7・9は五領ヶ台式土器である。1(0434)は口縁～突起部で口唇部面取り後ナデ・表裏面に渦巻き状の突起、外面口縁部棒状工具による縦位の沈線を施す。2(0436)は口縁部で口唇部面取り後ナデ、外面交互刺突文・竹管状工具による横位の沈線内をナデ・竹管状工具による縦位の沈線を施す。3(0722)は口縁部で、口唇部結節浮線文、外面斜縄文・横位の結節浮線文×2、内面口縁部結節浮線文・口縁部肥厚し斜縄文・稜・胴部ナデを施す。4(0433-3)は無文の口縁部である。5(0437・0443-1・0723)は深鉢の胴部で縦位の隆線文を施す。6(0435)は深鉢の胴部で、外面頸部に竹管状工具による横位の沈線・胴部二重の逆U字文・地文は斜縄文・その下部を竹管状工具による横位の沈線で区画・上端が短いY字を呈する縦位の隆線文を施す。7(0428)は深鉢の胴部で、外面竹管状工具による縦位の押し文・竹管状工具による垂下曲線状の押し文を施す。8(0437)は縄文を施す。9(0441)は深鉢の底部で、外面竹管状工具による縦位の沈線・地文は斜縄文・縦位の隆線文、底面ナデを施す。

石器は5点を図示した。10(0676-2)は黒曜石製の石匙である。11(0431)は安山岩製の磨・蔽・凹石、12(0439)・13(0726)・14(0430)は安山岩製の磨・蔽石である。

7号溝状遺構 (図60)

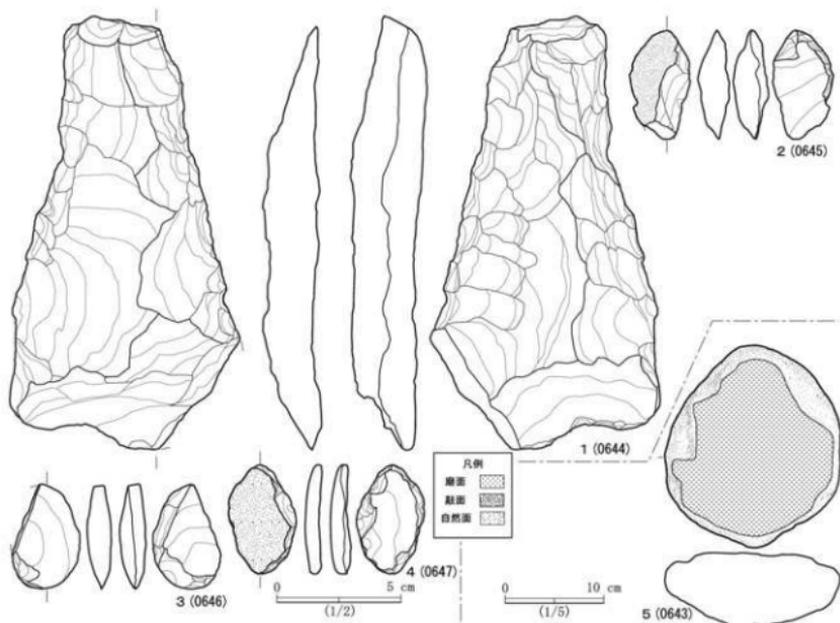


图 51 3号配石遗構 出土遺物拓影·実測図

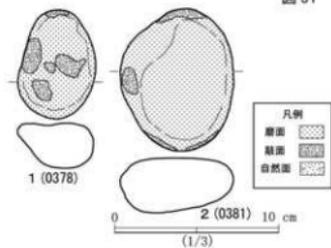


图 52 1号集石遺構 出土遺物実測図

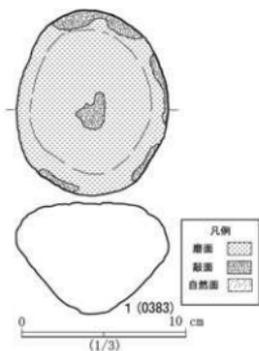


图 53 2号集石遺構 出土遺物実測図

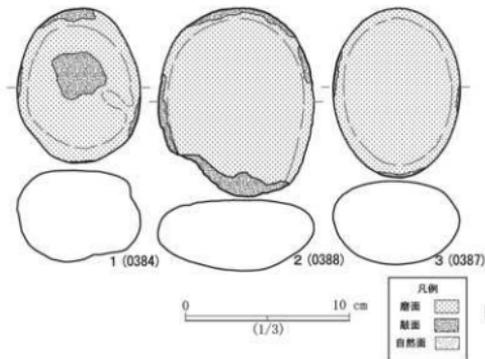


图 54 3号集石遺構 出土遺物実測図

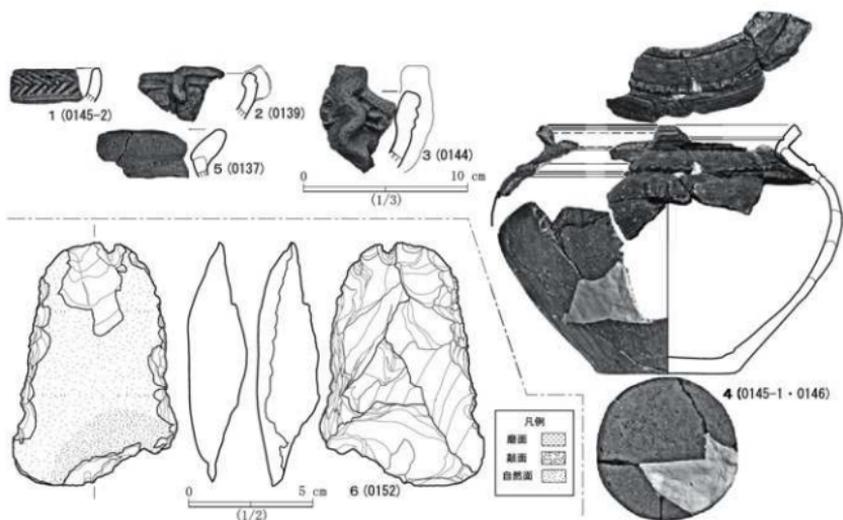


図 55 2号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

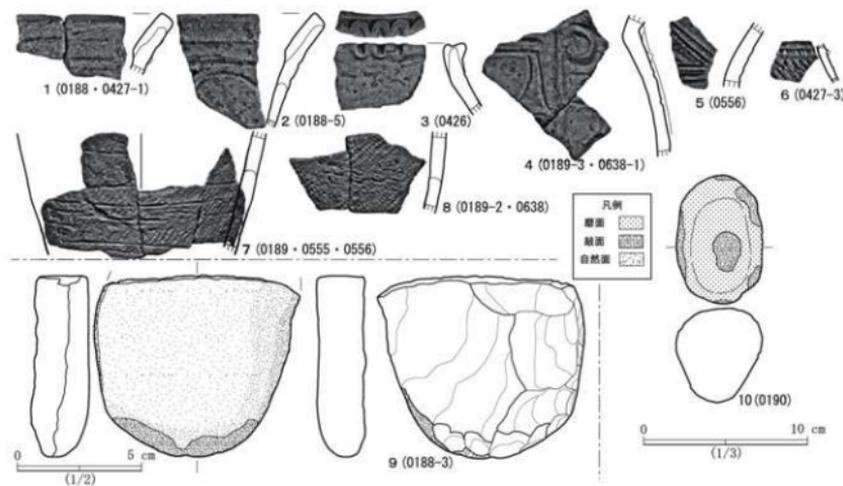


図 56 3号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

土器は8点を図示した。8は諸磯式土器、7は五領ヶ台式土器、である。1(0615)はキザミを施した縦位の隆線文、2(0720-1)は縦位の隆線文、3(0720-4)・4(0720-7)は縦位の隆線文・竹管状工具による縦位の沈線・縄文を施す。5(0720-2)は竹管状工具による集合沈線を施す。6(0720-3)・7(0720-5)は縄文の地に竹管状工具による沈線文が入る。8(0614・0720-6)は縄文の地に半截竹管状工具による不規則な横位の沈線を施す。

石器は1点を図示した。9(0677)は安山岩製の磨・敲石である。

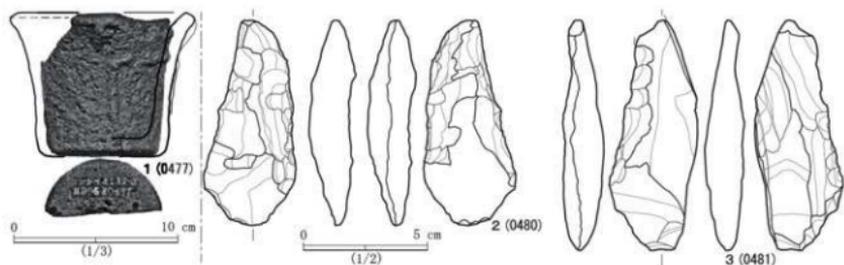


图 57 4号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

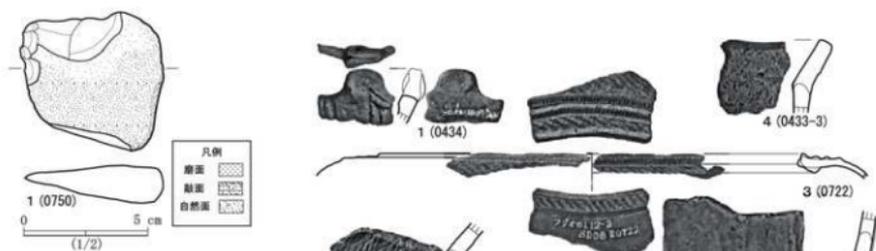


图 58 5号溝状遺構 出土遺物
実測図

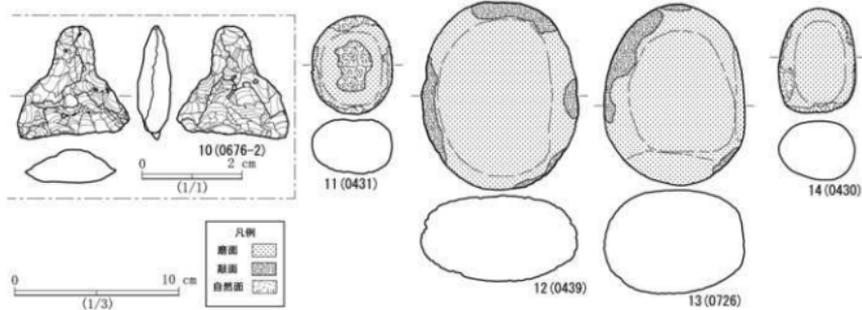
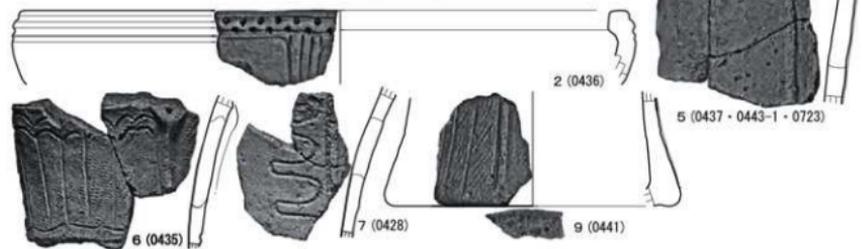


图 59 6号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

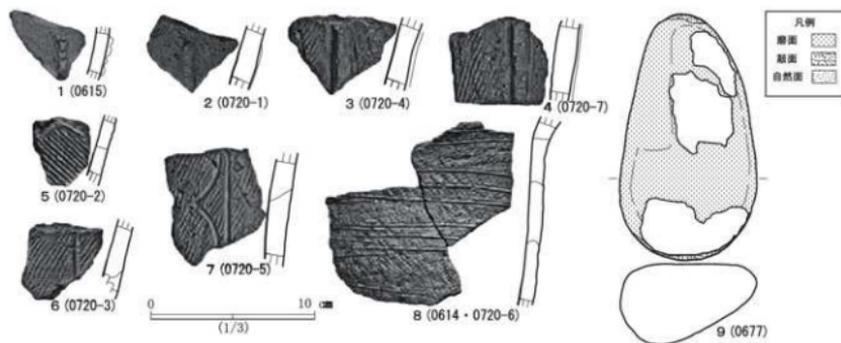


図 60 7号溝状遺構 出土遺物拓影・実測図

包含層

土器 (図 61・62)

58点を図示した。1は絡状体、2～9は諸磯式土器、10～34は五領ヶ台式土器、35～37は隆線文、38・39は沈線文、40～43は縄文の口縁部、44～47は無文の口縁部・底部、48～56は外来系土器、57は土製円盤である。

1(444-4)は表面に絡状体圧痕文を施す。

2(0291)は口唇部面取り後ナデ、外面竹管状工具による緩形状の集合沈線・横位の集合沈線・円形張付文を施す。3(0785)・4(0294)・0296)は外面竹管状工具による不規則な横位の沈線・斜縄文、6(0498)は頸部に竹管状工具による粗い平行沈線を施す。5(0293)・7(0349)は外面竹管状工具による不規則な横位の沈線・粗いナデ、8(0231)は外面隆線文を竹管状工具による押し印文で囲む区画文・ナデを施す。9(0103)は外面斜縄文・縦位の結節浮線文を施す。

10(0466)は波状口縁の頂部、突起の張付痕、口唇部丸めてナデ、竹管状工具によるC字文、外面口縁に沿って竹管状工具による区画内に三角形の刺突と縦位の細かい集合沈線で充填、突起の張付痕下部に三角形の連続刺突、口縁文様区画に竹管状工具による横位の沈線と並行するC字文を施す。11(0065)は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部逆三角形の張付文・斜縄文・竹管状工具による横位の沈線・竹管状工具による渦巻状・長方形の沈線・地文は縄文を施す。12(0473)は口唇部面取り後ナデ、外面口縁部斜縄文・屈曲部に曲線の隆線文・胴部竹管状工具による横位の沈線×3・竹管状工具による三叉状の沈線中央部に三角形の刺突・地文は斜縄文を施す。13(0050)・0223)・0224)・14(0169)・15(0269)は口縁に沿って交互刺突文を施す。16(0307)は口縁に沿って竹管状工具による連続刺突を施す。17(0176)は口縁に沿って連続ギザミを施す。18(0056)・0227)・0230)・0234)は口唇部に交互刺突文が入り上部に逆三角形の陰刻が入る把手が付く。19(0078)・20(0080)は竹管状工具による沈線、21(0116)・22(0325)・23(0444-1)は半載竹管状工具による集合沈線、24(0785)は棒状工具による沈線を施す。25(0081)は外面棒状工具による円形文を竹管状工具による三叉の押し印で区画・竹管状工具による長方形の押し印文を施す。26(0196)は縄文の地に逆三角形の陰刻・頂点から棒状工具による沈線による逆U字文、27(0183)・28(0203)・29(0211)・30(0444-2)・31(0501)・32(0287)は縄文の地文に竹管状工具による沈線と逆U字文またはU字文を施す。33(0333)は突起部で頂部二重の逆三角形、外面に竹管状工具による曲線の押し印文を施す。34(0465-2)は張付文でフジツボ形、端部に竹管状工具による横位の沈線、外面極細の竹管状工具による集合沈線・三角形の刺突、内面指頭痕を施す。

35(0529-2)・36(0233)は横位の隆線文、37(0504-2)は曲線の隆線文を施す。38(0095)は竹管状工具による集合沈線、39(0108)は竹管状工具による曲線の集合沈線にケズリ後ナデを施す。40(0204)・41(0228)は口縁部に縄文・頸部に半載竹管状工具による横位の沈線を施す。42(0292)・43(0350)はくの字に内曲する口縁部で縄文を施す。45(0237)は無文の口縁部でケズリ後ナデ、46(0056)は穿孔が施される。

48(0298)は口唇部に縄目と竹管状工具によるギザミ、外面縄文の地に緩い曲線の山形状隆線にC字文を施す。49(0522)・50(0106)は口縁に沿って横位の棒状張付文を施す。51(0331)・52(0507)・53(0502)・54(0444-3)はC字文を施す。55(0222)・56(0260)は半載竹管状工具による集合沈線を施す。

57(0318)は無文の土製円盤である。

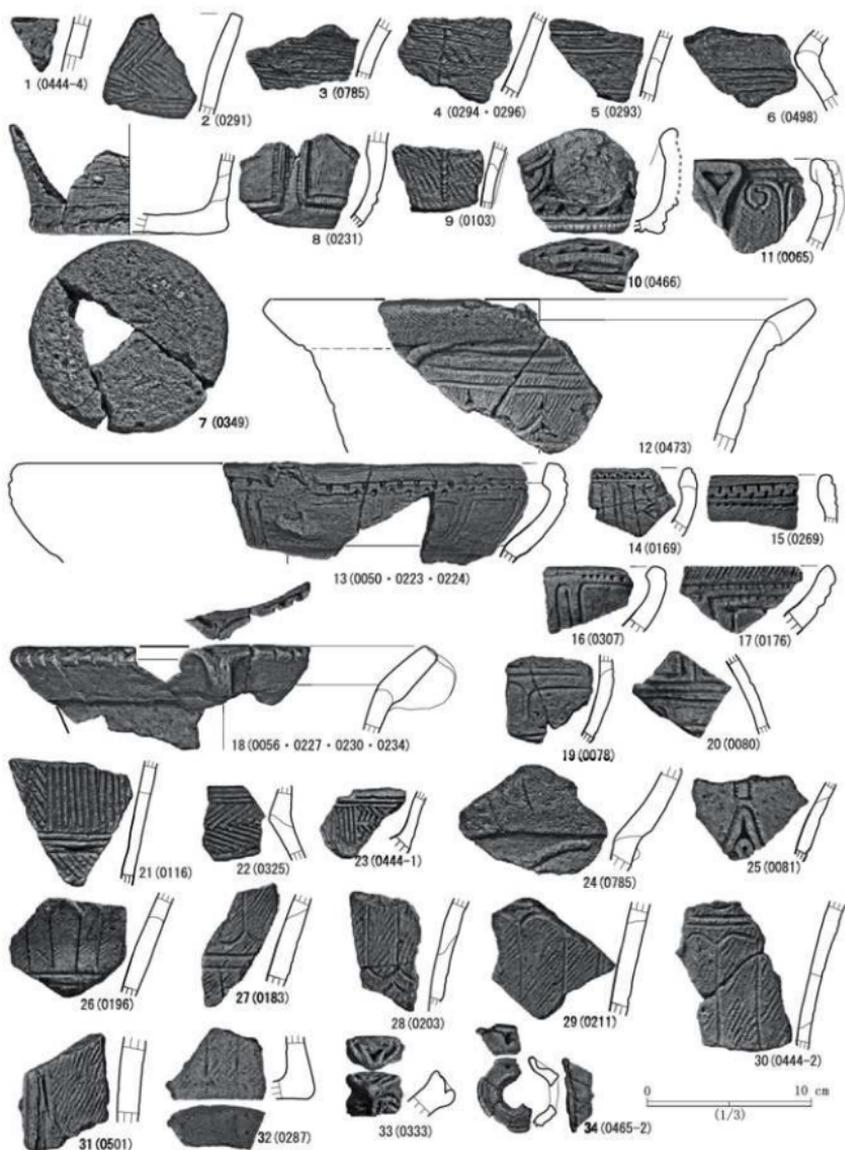


圖 61 包含層 出土遺物拓影・実測圖①

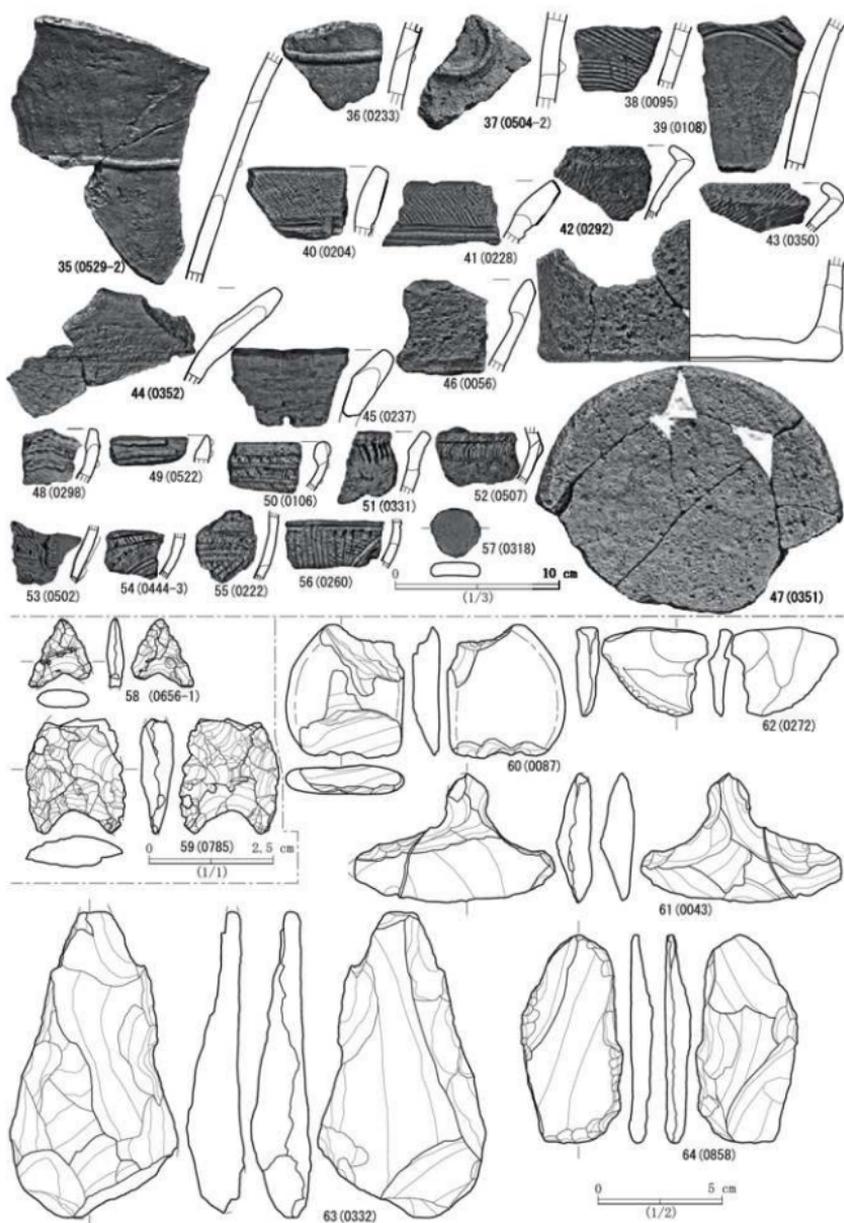


图 62 包含層 出土遺物拓影・実測図②

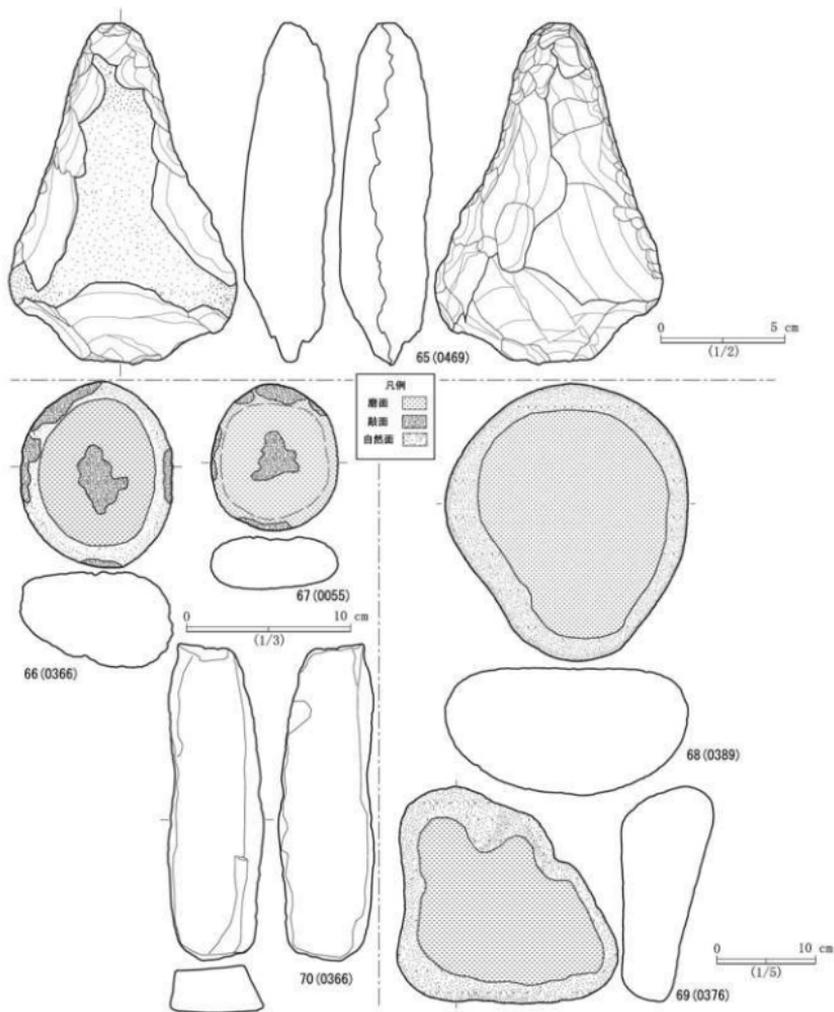


図 63 包含層 出土遺物拓影・実測図③

石器 (図 62・63)

58(0656-1)・59(0785)は黒曜石製の石鏃、60(0087)は輝石安山岩製の石錘、61(0043)はホルンフェルス製の石匙、62(0272)はホルンフェルス製のスクレイパー、63(0332)は頁岩製、64(0858)・65(0469)は安山岩製の打製石斧、66(0366)は泥岩製・67(0055)は安山岩製の磨・蔽・凹石、68(0389)・69(0376)は安山岩製の石皿である。

70(0366)は時期が不明の砂岩製の砥石である。

(小金澤 彩可)

報告書番号	器物番号	出土地点	時代	器種	形状	陶質	地味	口径 (cm)			色澤	用途	附記	備考
								口径	高さ	底径				
図42-53	0444-1	佐賀県	縄文時代前期後半～中期前半	甕	無蓋	灰	白	-	-	-	にじみ・褐色土の跡あり	内山竹管状・修飾・工具による磨削・赤鉄質の沈着	砂・金粟粉・赤鉄粉・白鉄粉を含む	
図42-56	0222	佐賀県	縄文時代前期後半～中期前半	甕	無蓋	灰	白	-	-	-	にじみ・褐色土の跡あり	内山竹管状・修飾・工具による磨削・赤鉄質の沈着・内面ナマ・取柄あり	砂・金粟粉・赤鉄粉・白鉄粉を含む	
図42-57	0300-1	佐賀県	縄文時代前期後半～中期前半	甕	無蓋	灰	白	-	-	-	にじみ・褐色土の跡あり	内山竹管状・工具による磨削・長方形の凹状溝刻・内面ナマ・取柄あり	砂・金粟粉・赤鉄粉・白鉄粉を含む	
図42-58	0238	佐賀県	縄文時代前期後半～中期前半	土師器	無蓋	灰	白	3.0	3.0	-	にじみ・褐色土の跡あり	内山竹管状・修飾・工具による磨削・内面ナマ	金粟粉を含む・砂・赤鉄粉・赤鉄粉・白鉄粉を含む	

表 4-5 土器観察表

報告書番号	器物番号	出土地点	時代	器種	形状	陶質	地味	口径 (cm)			色澤	用途	備考
								最大長	最大幅	高さ			
図36-03	0372	5901	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	8.8	6.0	2.7		186g	
図36-04	0374	5901	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	14.2	7.6	4.7		402g	
図36-05	0375	5901	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	2.0	1.8	0.7		107g	
図37-03	0345	5902	縄文時代	スライパー	取柄	灰	白	5.3	5.4	0.8		(27g)	
図37-04	0345	5902	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	7.6	3.5	2.7		139g	
図37-05	0346	5902	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	2.9	10.6	1.5		507g	
図37-06	5902-0300-0316	5902	縄文時代	石	無文	灰	白	27.5	45.8	19.5		29.6kg	
図37-06	5902-0300-0309	5902	縄文時代	石	無文	灰	白	30.5	39.1	13.1		15.2kg	
図37-02	5901-1700-1006	5901	縄文時代	石	無文	灰	白	18.5	27.5	10.0		5.6kg	
図39-02	0300	5905	縄文時代	打製石	無蓋	灰	白	6.5	3.5	2.3		119g	
図40-06	0622	5905	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	9.3	4.8	3.3		142g	
図40-09	0339	5905	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	6.0	3.9	3.1		179g	
図40-10	0601	5905	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	9.3	7.5	3.7		262g	
図40-11	0426	5905	縄文時代	石	無蓋	灰	白	31.1	30.2	6.8		6.4kg	
図40-12	0473	5905	縄文時代	石	無蓋	灰	白	28.8	18.0	11.8		10.8kg	
図41-06	0529-0741	5907	縄文時代	打製石	無文	灰	白	9.8	(4.8)	2.7		(125g)	
図41-07	0603	5907	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	10.8	7.6	4.6		222g	
図41-08	0723	5907	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	7.8	5.6	2.9		182g	
図41-09	5907-0301-0267	5907	縄文時代	石	無蓋	灰	白	35.3	31.5	19.2		63.1kg	
図42-12	0683	5908	縄文時代	打製石	1/2	磨製	黄	(8.8)	5.8	1.3		(28g)	
図42-14	0690	5908	縄文時代	打製石	無文	灰	白	09.0	3.8	1.8		(90g)	
図42-15	0732	5908	縄文時代	打製石	無文	灰	白	(7.6)	4.7	1.2		(41g)	
図42-16	0374	5909	縄文時代	石	無蓋	灰	白	17.8	13.5	7.0		8.3kg	
図43-04	0393	5909	縄文時代	打製石	無蓋	灰	白	9.0	5.2	2.3		116g	
図43-05	0396	5909	縄文時代	スリッパ	取柄	灰	白	6.1	6.9	2.9		149g	
図43-06	0391	5909	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	15.7	9.2	6.7		125g	
図43-07	0399	5909	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	12.4	10.4	5.8		69g	
図44-15	0671	5910	縄文時代	打製石	無文	灰	白	10.7	6.1	1.9		(77g)	
図44-16	0366	5910	縄文時代	無文	無蓋	灰	白	(11.2)	4.6	1.2		(116g)	
図44-17	0402-1	5910	縄文時代	石	無蓋	灰	白	10.7	4.7	2.8		142g	
図44-18	0402-2	5910	縄文時代	スライパー	無文	灰	白	10.9	2.9	0.7		(31g)	
図44-19	0363	5910	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	9.2	6.4	4.2		273g	
図44-20	0382	5910	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	11.0	2.9	1.2		431g	
図44-21	0364	5910	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	6.9	3.5	2.7		133g	
図45-22	0370	5910	縄文時代	石	無蓋	灰	白	35.1	41.1	9.2		27.1kg	
図46-05	0622	5911	縄文時代	石	無蓋	灰	白	35.5	39.3	2.6		(276g)	
図46-16	0601-3	5911	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	6.4	6.6	3.3		139g	
図47-01	0368	5912	縄文時代	石	無蓋	灰	白	31.5	38.4	3.5		8.7kg	
図48-01	0348	5913	縄文時代	石	無蓋	灰	白	1.8	1.1	0.3		(0.5g)	
図48-02	0354	5913	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	7.8	7.0	4.9		319g	
図49-11	0607	5914	縄文時代	石	無蓋	灰	白	(2.5)	(2.0)	(0.3)		0.91g	
図49-12	0627	5914	縄文時代	石	無蓋	灰	白	6.2	6.0	6.2		147g	
図49-13	0623-1	5914	縄文時代	スライパー	無蓋	灰	白	(2.5)	(2.3)	(0.5)		3.16g	
図49-14	0623-2	5914	縄文時代	スライパー	無蓋	灰	白	(2.5)	(2.3)	(0.5)		3.16g	
図49-15	0938	5914	縄文時代	スリッパ	取柄	灰	白	4.2	7.4	1.7		(16g)	
図49-16	0779	5914	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	13.8	8.0	4.9		611g	
図49-17	0938	5914	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	12.0	9.3	5.8		932g	
図49-18	0817	5914	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	11.9	9.2	7.9		600g	
図49-06	0347	H401	縄文時代	石	無蓋	灰	白	4.7	4.9	1.2		36g	
図50-02	0323	H401	縄文時代	石	無蓋	灰	白	(7.2)	3.1	1.0		(22.5g)	
図50-09	0629	H401	縄文時代	スライパー	無文	灰	白	(10.7)	4.1	1.3		(65g)	
図50-08	0628	H401	縄文時代	甕・甕・石	無文	灰	白	(11.9)	(7.2)	2.6		(214g)	
図50-10	0640	H401	縄文時代	スリッパ	取柄	灰	白	5.8	9.3	3.3		296g	
図51-03	0643	H402	縄文時代	打製石	無蓋	灰	白	17.7	9.5	2.3		(156g)	
図51-02	0645	H402	縄文時代	スライパー	無蓋	灰	白	14.0	2.9	1.2		(11g)	
図51-03	0646	H402	縄文時代	スライパー	無蓋	灰	白	(2.8)	3.0	(1.2)		(12g)	
図51-04	0647	H402	縄文時代	スライパー	無蓋	灰	白	4.5	2.8	0.8		(6g)	
図51-05	0643	H402	縄文時代	石	無蓋	灰	白	17.7	17.8	7.5		3.9kg	
図52-01	0379	5901	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	6.7	4.6	2.8		109g	
図52-02	0381	5901	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	6.2	6.9	3.4		217g	
図53-01	0383	5903	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	11.4	1.9	0.8		281g	
図54-01	0385	5903	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	9.8	7.5	6.8		354g	
図54-02	0389	5903	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	11.5	9.5	1.4		432g	
図54-03	0387	5903	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	10.1	7.7	5.1		379g	
図55-06	0352	5902	縄文時代	打製石	無蓋	灰	白	(10.0)	(6.3)	2.4		(135g)	
図56-09	0390	5903	縄文時代	打製石	無蓋	灰	白	(7.4)	(6.3)	1.9		(107g)	
図56-10	100-3	5903	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	7.9	5.2	5.8		(278g)	
図57-02	0400	5904	縄文時代	打製石	無蓋	灰	白	8.1	3.7	1.9		(5g)	
図57-03	0401	5904	縄文時代	打製石	無蓋	灰	白	(9.4)	(3.0)	1.6		(55g)	
図58-01	0730	5905	縄文時代	スライパー	無蓋	灰	白	3.8	3.6	1.5		59g	
図59-10	0679-2	5906	縄文時代	石	無蓋	灰	白	1.6	1.6	1.3		2.5g	
図59-11	0323	5906	縄文時代	甕・甕・石	無蓋	灰	白	6.0	1.9	3.4		101g	

表 5-1 石器観察表

報告書 番号	遺物番号	出土 地点	時代	器種	残存 状況	石材	質量 () は測定値			
							最大径 cm	最大幅 cm	厚さ cm	質量
図 39-12	0139	S006	縄文時代	磨・磨石	完整	安山岩	11.5	9.5	5.2	69kg
図 39-13	0138	S006	縄文時代	磨・磨石	完整	安山岩	11.1	9.1	6.3	812g
図 39-14	0130	S006	縄文時代	磨・磨石	完整	安山岩	6.4	4.6	3.6	160g
図 40-09	0677	S007	縄文時代	磨・磨石	完整	安山岩	15.0	10.3	5.0	69kg
図 42-28	0652-1	包含層	縄文時代	石鏃	一部欠損	輝綠石	11.0	11.2	0.3	10.2kg
図 42-30	0765	包含層	縄文時代	石鏃	一部欠損	輝綠石	12.0	12.0	0.7	12.6kg
図 42-40	0667	包含層	縄文時代	石鏃	完整	輝石安山岩	5.4	4.8	1.1	5kg
図 42-61	0013	包含層	縄文時代	石鏃	一部欠損	ホルンフェルス	15.0	10.2	1.4	13kg
図 42-62	0272	包含層	縄文時代	スレイバー	完整	ホルンフェルス	4.3	3.6	0.9	13g
図 42-63	0322	包含層	縄文時代	打製石斧	一部欠損	頁岩	12.5	6.8	2.3	17kg
図 42-64	0908	包含層	縄文時代	打製石斧	完整	安山岩	8.5	5.1	0.9	39g
図 42-65	0909	包含層	縄文時代	打製石斧	完整	安山岩	14.6	9.2	3.6	40g
図 42-66	0366	包含層	縄文時代	磨・磨・磨石	完整	安山岩	11.4	9.3	3.8	69kg
図 42-67	0665	包含層	縄文時代	磨・磨・磨石	完整	頁岩	9.0	7.7	3.2	20kg
図 42-68	0276	包含層	縄文時代	石鏃	完整	安山岩	22.2	22.4	9.4	5.6kg
図 42-69	0369	包含層	縄文時代	石鏃	完整	安山岩	28.3	24.6	12.0	11.2kg
図 42-70	0366	包含層	千明	磨石	完整	磨石	19.4	3.7	2.9	90kg

表 5-2 石器観察表

VI 自然科学分析編

蛍光X線による胎土分析

はじめに

検出された1～11・14号住居跡から出土した縄文土器試料計65点について、蛍光X線分析装置による胎土を分析し、その分析から得られた各元素の強度 (cps) 値によって散布図を作成し、胎土の分類と周辺を含む他の遺跡から出土した土器試料の元素の強度 (cps) 値によって、胎土の類似比較を行った。

分析方法

分析装置

島津製作所エネルギー分散型 EDX700

オリンパスエネルギー分散型 pXFR DP2000

方法

分析対象の遺物は水洗い後に乾燥させ、さらに分析時には刷毛ブラシ等で汚れ・付着物等を丁寧に落とした。

分析面を削る等の無い完全非破壊で大気中で行った。計測時間はEDX700は300秒、DP2000は120秒で行っている。

分析結果

蛍光X線分析によって得られた各元素の強度 (cps) 値のうち、K・Ca・Rb・Sr・Fe・Zrの6種類の元素の強度 (cps) 値を分析対象値として用いた。

そしてK/Ca元素の強度 (cps) 値による散布図、Rb/Sr元素の強度 (cps) 値による散布図、Fe/Zr元素の強度 (cps) 値による3枚の散布図を作業仮説として作成した。

その散布図による散布の特徴から、分類とさらにその細分類を試みた。

蛍光X線分析による胎土分類の特徴 (図 64～66)

Ca/Kの値から見る分析

全ての土器試料は、まずCa元素の強度 (cps) 値の高い値から、暫定的に有効とみなされる作業仮説として、以下の分類を試みた。

A群: Ca元素の強度 (cps) 値 約300～450 (cps)

B群: Ca元素の強度 (cps) 値 約250～350 (cps)

C群: Ca元素の強度 (cps) 値 約160～250 (cps)

D群: Ca元素の強度 (cps) 値 約70～160 (cps)

E群: Ca元素の強度 (cps) 値 約70～80 (cps)

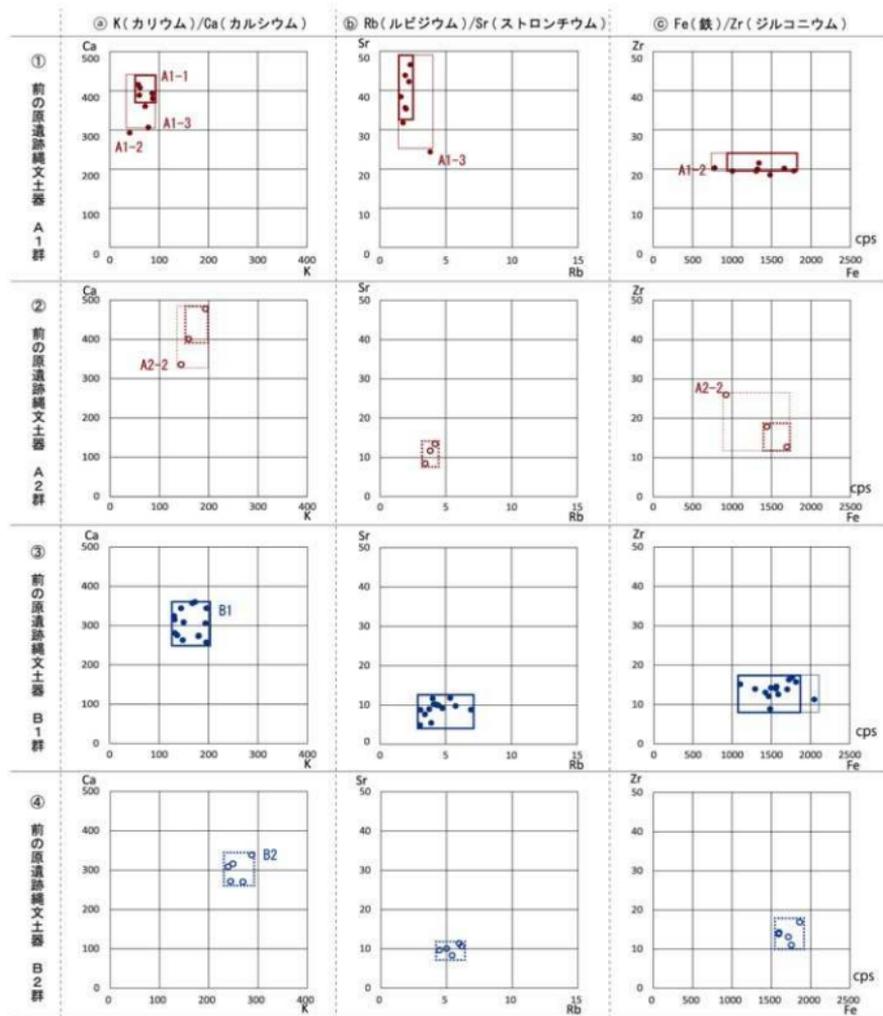


図 64 前の原遺跡出土遺物 胎土分類①

さらに、各群を K 元素の強度 (cps) 値によって以下に細分類を試みた。

A 群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 64)

A1 群 約 40 ~ 100 (cps) 8 点 A2 群 約 140 ~ 200 (cps) 3 点

B 群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 64)

B1 群 約 130 ~ 200 (cps) 14 点 B2 群 約 230 ~ 300 (cps) 5 点

C 群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 65)

C1 群 約 100 ~ 200 (cps) 9 点 C2 群 約 220 ~ 320 (cps) 4 点 C3 群 約 50 ~ 100 (cps) 2 点

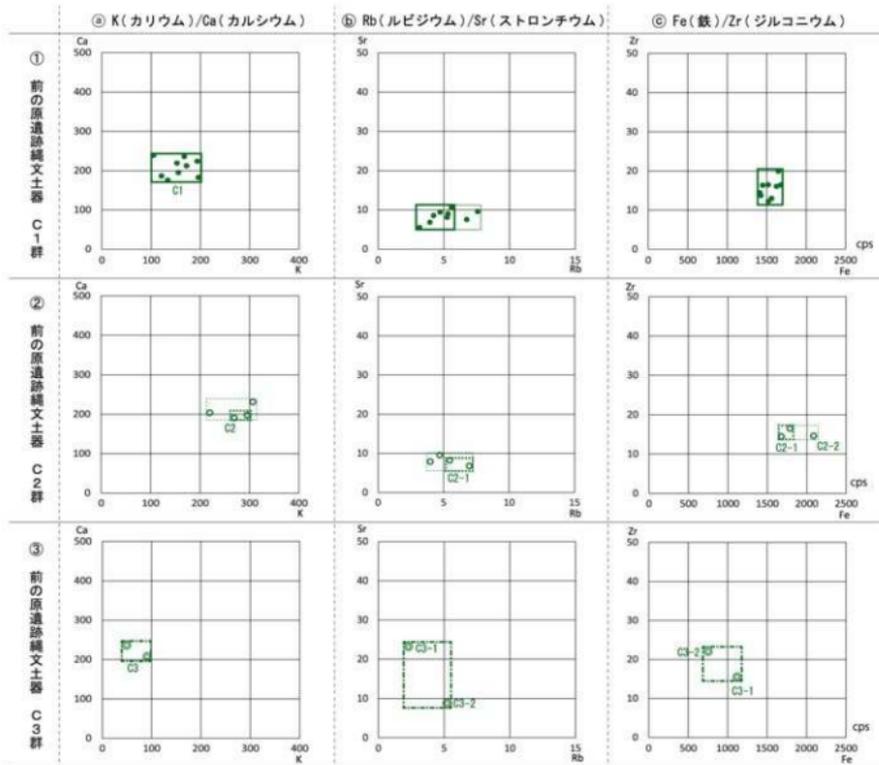


図 65 前の原遺跡出土遺物 胎土分類②

D群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 66)

D1群 約 110 ~ 170 (cps) 10 点

D2群 約 160 ~ 230 (cps) 4 点

D3群 約 150 ~ 270 (cps) 4 点

E群 K 元素の強度 (cps) 値 (図 66)

E1群 約 120 ~ 150 (cps) 2 点

この分類で、Ca 元素の強度 (cps) 値を分類の基礎値として第一に使用した理由を以下に述べる。

自然界では、第四紀火山周辺の火山灰に含まれる炭酸カルシウム (CaCO₃) が堆積する土壌が流れ込む河川で、Ca 元素の強度 (cps) 値が高いことが知られている。日本列島の中央部に位置する大地溝帯であるフォッサマグナ地域の活火山群では、草津白根山、八ヶ岳火山群、富士山などの火山 (南アークボタ編集室 1994) が並んでいることから、その周辺地域では Ca 元素の強度 (cps) 値が高い。そのため静岡県東部から神奈川県西部と、山梨県から長野県南部に流れる河川には、特に Ca 元素の強度 (cps) 値が高い地点がある。例えば、富士山東側山麓の御殿場市を水源とする酒匂川中流域では、特に Ca 元素の強度 (cps) 値が高いことから、神奈川県足柄上郡松田町松田庶子に所在する「からさわ古窯」周辺の胎土 (粘土) を使用して焼成したと推測される瓦・弥生土器・かわらけでは、Ca 元素の強度 (cps) 値が 400 ~ 600 (cps) と高い値を示す。

次に K 元素であるが、K 元素は自然界では Ca 元素とは正反対の分布を示しており、フォッサマグナ地域の第四紀火山周辺の火山灰が堆積する土壌が流れ込む河川では K 元素の強度 (cps) 値が低いことが知られている。そのため静岡県東部から神奈川県西部と山梨県から長野県南部に流れる河川では、特に K 元素の強度 (cps) 値が低い。その中で神奈川県と東京都の境に流れる多摩川流域では、K 元素の強度 (cps) 値がやや高い分布地域がスポット的にみられる。さらに静岡県静岡市域を境 (フォッサマグナ)

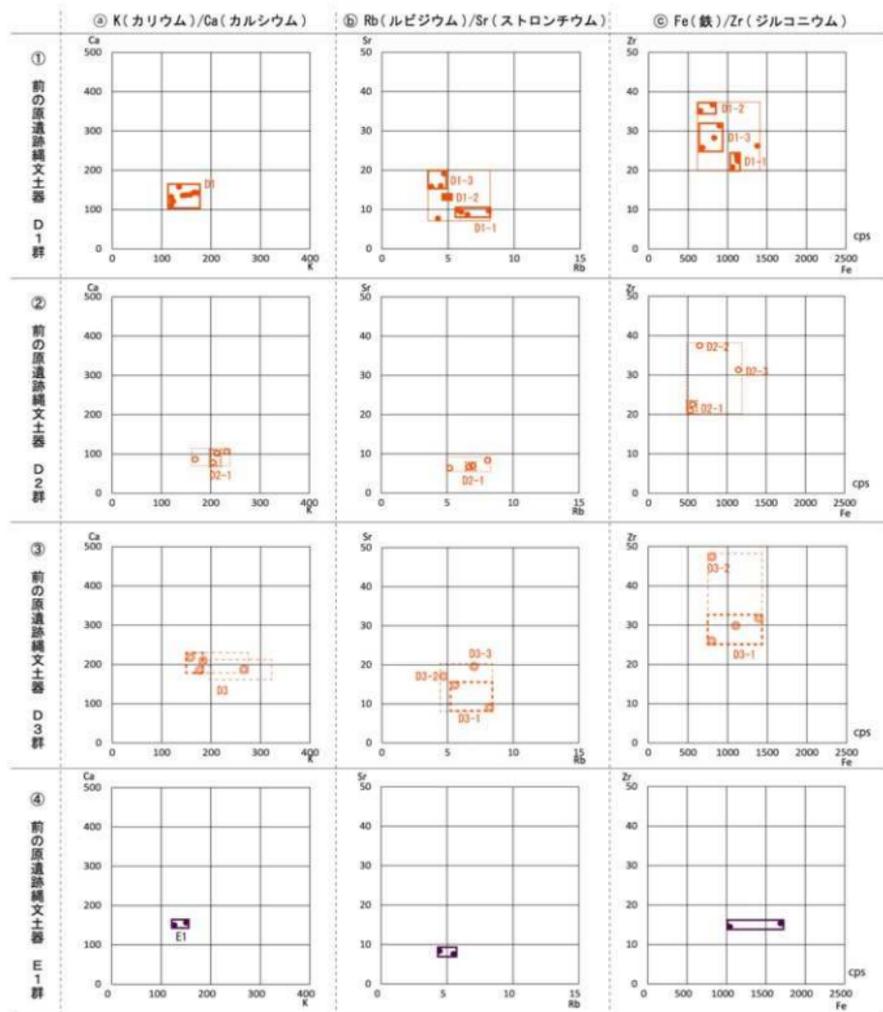


図 66 前の原遺跡出土土壌 胎土分類③

に、その西側から愛知県・岐阜県にかけては、連続して K 元素の強度 (cps) 値がやや高い分布地域が続いてみられる。

Rb/Sr の値から見る分類

Rb 元素の強度 (cps) 値 / Sr 元素の強度 (cps) 値の散布図からは、Sr 元素の強度 (cps) 値が、A1群のみが約 25 (主に 33) ~ 50 (cps) と極めて高い散布を示す。D1群が約 7 ~ 20 (cps)、D3群が約 8 ~ 20 (cps) とやや高い散布を示し、他に C3群の 1 点が約 23 (cps) とやや高い散布を示す以外は、約 5 ~ 15 (cps) の範囲に散布している。

Rb 元素の強度 (cps) 値は、Sr 元素の強度 (cps) 値と同様に、A1群のみが約 2 ~ 5 (cps) とやや低い散布を示す以外は約 3 ~ 7 (cps) の範囲に散布している。

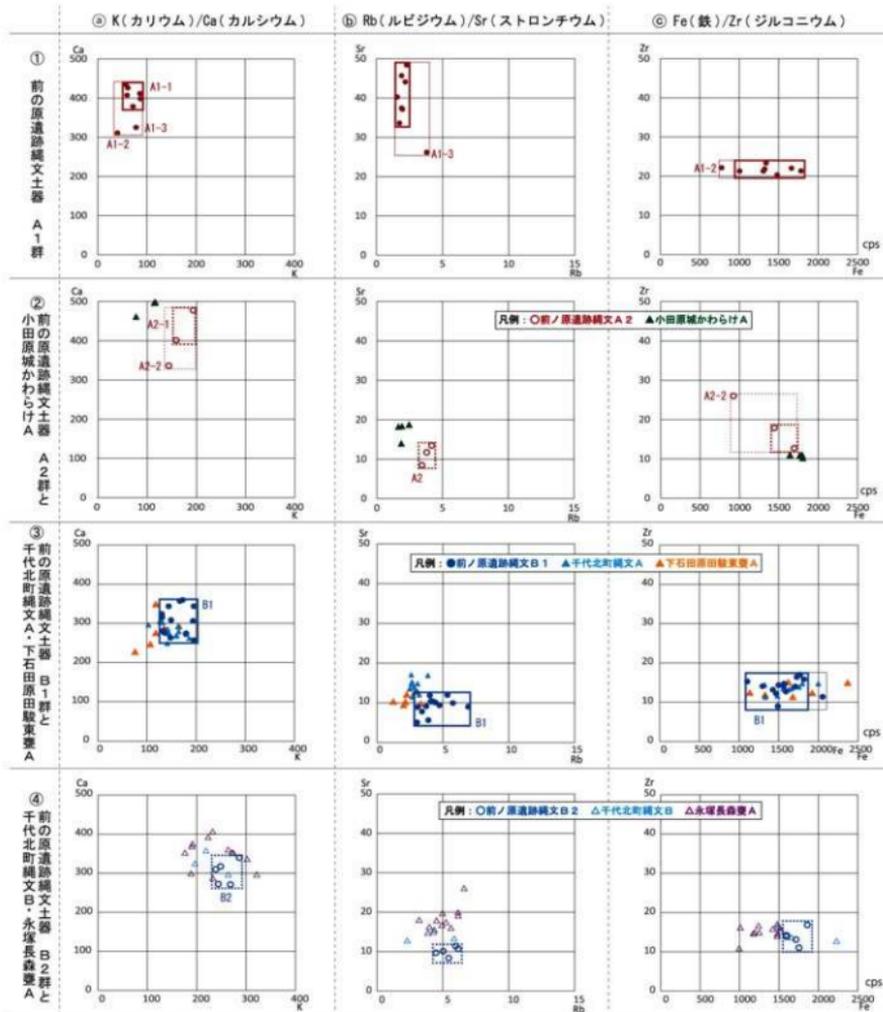


図 67 前の原遺跡出土遺物 胎土比較①

自然界では、Sr 元素は、周期表により Ca 元素と同じアルカリ土類金属に分類され、化学的性質が非常に似ていることもあり、Ca 元素と分布範囲が重複していることが多くある。フォッサマグナ地域の Ca 元素の強度 (cps) 値が高い地域と同じ範囲の、静岡県東部から神奈川県西部、特に山梨県北部から長野県南部に流れる河川には、同様に特に Sr 元素の強度 (cps) 値が高い地点が分布する。

Fe/Zr の値から見る分類

Fe 元素の強度 (cps) 値/Zr 元素の強度 (cps) 値の散布図から、Zr 元素の強度 (cps) 値は、A群: Zr 元素の強度 (cps) 値約 12 ~ 23 (cps)、B群: Zr 元素の強度 (cps) 値約 18 ~ 27 (cps)、C群: Zr 元素の強度 (cps) 値約 12 ~ 22 (cps)、D群:

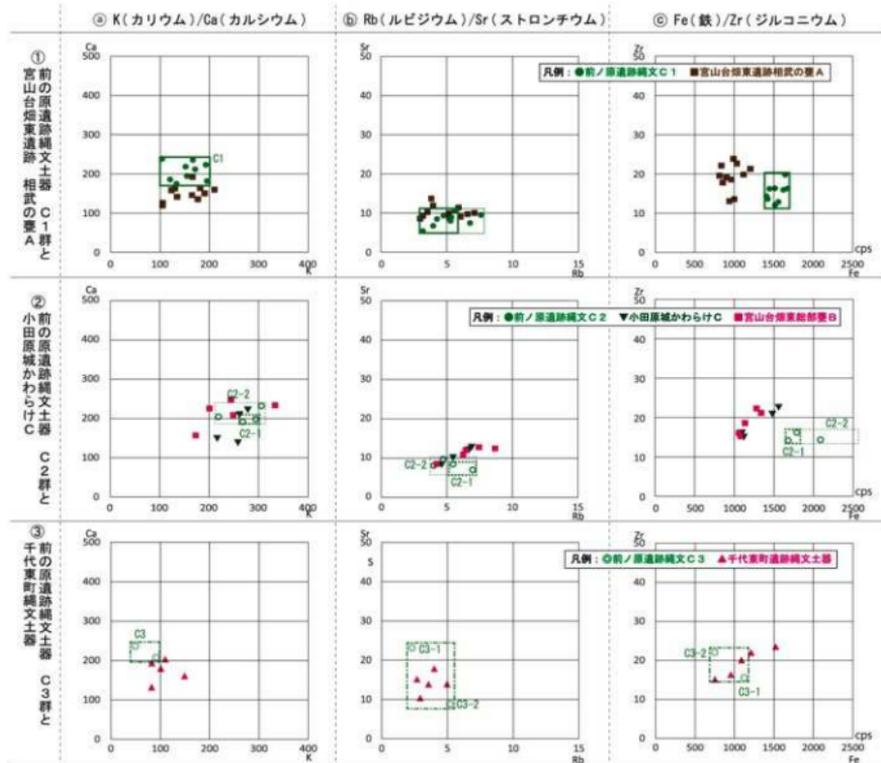


図 68 前原遺跡出土遺物 胎土比較②

Zr 元素の強度 (cps) 値 約 20 ~ 48 (cps), E 群: Zr 元素の強度 (cps) 値 約 13 ~ 48 (cps) となり, D 群の Zr 元素の強度 (cps) 値が約 20 ~ 48 (cps) と高い散布範囲を示している。

Zr 元素は、自然界では東海地方西部で高い分布を示している。特に名古屋市東側の、三河高原から南西に向かって標高が下がる瀬戸市から南にかけて、尾張丘陵が広がる一帯の河川において、Zr 元素が高い分布を示している。この地域は、須恵器・灰軸陶器・緑軸陶器の生産で知られる猿投窯跡が分布する地域である。そのため猿投窯で生産されたと推定される須恵器が出土した、相模国足下郡衛周遺跡である小田原市永塚に所在する永塚長森遺跡出土の須恵器は、Zr 元素強度 (cps) 値がやや高い 30 (cps) を超える試料が多くみられ、また、駿河国駿河郡衛周遺跡である沼津市大岡に所在する下石田原田遺跡出土の須恵器も、同様の分布を示している。

Fe 元素の強度 (cps) 値は、A 群: Fe 元素の強度 (cps) 値 約 12 ~ 23 (cps)、B 群: Fe 元素の強度 (cps) 値 約 18 ~ 27 (cps)、C 群: Fe 元素の強度 (cps) 値 約 12 ~ 22 (cps)、D 群: Fe 元素の強度 (cps) 値 約 20 ~ 48 (cps)、E 群: Fe 元素の強度 (cps) 値 約 13 ~ 48 (cps) となり、D 群の Zr 元素の強度 (cps) 値が約 20 ~ 48 (cps) と高いことから、他の元素の強度 (cps) 値の散布範囲とは異なる範囲を示している。

Fe 元素は酸化鉄として火山灰に含まれ、自然界では第四紀火山周辺の火山灰が堆積する土壌が流れ込む河川では Fe 元素の強度 (cps) 値が高く、静岡県東部から神奈川県西部の酒匂川流域から相模川までの河川では Fe 元素の強度 (cps) 値が高く、また特に山梨県から長野県南部に流れる河川には同様に特に Fe 元素の強度 (cps) 値が高い地点が分布する。

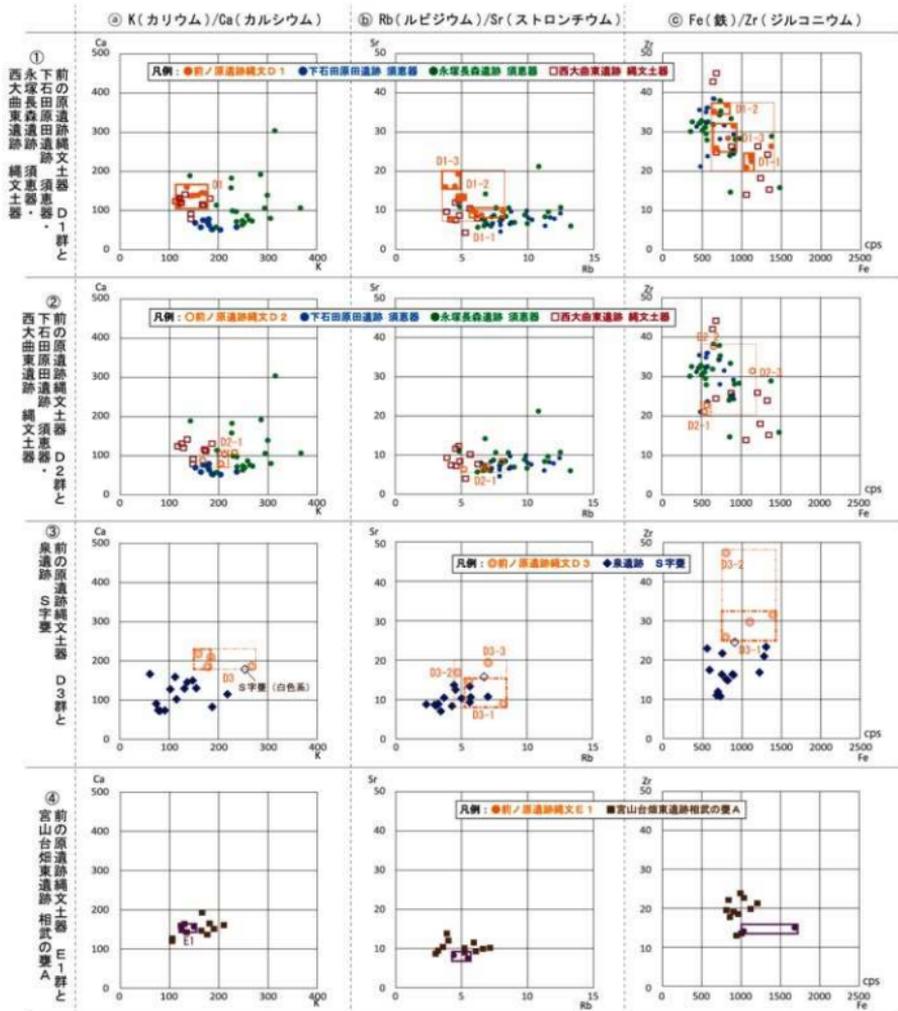


図 69 前原遺跡出土遺物 胎土比較③

蛍光X線分析による胎土分類の比較

縄文土器試料A・B・C・D・E群散布図に重複する散布図を、蛍光X線分析値データベースから選択して重複等を比較した。

縄文土器試料A群 (図 67)

縄文土器試料A群はCa元素の強度(cps)値が高いことを特徴とする群である。Sr元素の強度(cps)値の高いA1群と低いA2群に分かれた。

A1群の散布図に重複するデータはなかったが、Ca/Sr元素の強度(cps)値がともに高い自然界の地域は、先述したように山梨県から長野県南部にかけての地域にほぼ限られている(図67①)。

A2群の散布図に重複するデータはなかったが、小田原市本町一丁目に所在する小田原城三の丸大久保弥六郎邸跡から出土し

たかわらけ（小田原城から出土したかわらけは以下小田原かわらけ）A群は、K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr のどの値も隣接して散布した（図 67 ②）。小田原かわらけA群は小田原北条時代の 16 世紀中葉に作製された「小田原かわらけ」と称される小田原北条時代のかわらけを示す独自のかわらけで、小田原北条氏の滅亡と同時に作製されなくなったもので、酒匂川中流域の松田町内のからざ古窯周辺の胎土（粘土）で作製されたと推定される。

縄文土器試料B群（図 67）

縄文土器試料B群は Ca 元素の強度（cps）値がやや高いことを特徴とする群である。K 元素の強度（cps）値の低いB1群と、高いB2群に分かれた。

B1群の K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータは、まず小田原市千代に所在する千代北町遺跡から出土した縄文時代後期初頭の磨消縄文土器（主に称名寺式）、次に沼津市大岡に所在する下石田原田遺跡から出土した奈良・平安時代の甕（駿東甕）形土器である（図 67 ③）。

称名寺式土器が出土する遺跡の分布は、静岡県東部にややまとまった分布がみられる以外は、関東東地方が分布の中心である。静岡県東部の愛鷹山麓岡田と伊豆半島の中伊豆や東伊豆は、縄文時代中期末葉から後期にかけての敷石住居が検出される遺跡が集中する分布の中心の一つである（山本輝久 2002・2010）。

B2群の K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータは、まず小田原市千代に所在する千代北町遺跡から出土した縄文時代後期初頭の磨消縄文土器（主に称名寺式）B2群、また小田原市永塚に所在する永塚長森遺跡土器甕A群である（図 67 ④）。

神奈川県西部の酒匂川中・下流域の山北町・松田町・大井町・南足柄市・小田原市においても敷石住居が検出される遺跡が集中して分布している（山本輝久 2002・2010）。

縄文土器試料C群（図 68）

縄文土器試料C群は、Ca 元素の強度（cps）値が約 200（cps）の中央値であることを特徴とする群である。K 元素の強度（cps）値の中央をC1群、より高い散布をC2群、最も低い散布をC3群と分けた。

C1群の K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータは、相模川左（東）岸の下流域に位置する、高座郡寒川町宮山所在の宮山台畑東遺跡から出土した、古墳時代後期の相武の甕A（ヘラケズリ整形甕）である（図 68 ①）。

C2群は、宮山台畑東遺跡から出土した古墳時代後期の相武の甕B（ヘラケズリ整形甕）、また小田原かわらけ C 群 K/Ca、Rb/Sr、Fe/Zr の値に重複・隣接するデータである。

相武の甕 A・B（ヘラケズリ整形甕）は「7世紀頃の相模地方で生産・流通している土師器甕…平塚砂丘-伊勢原台地のあたりから東側に分布」（田尾誠敏 2007）すること、また多摩丘陵東側の、横浜市青葉区新石川一丁目に所在する弥生後期の新石川釈迦堂遺跡出土の土器と相武の甕 A は重複することから、多摩丘陵の胎土（粘土）とする土器試料であったと推定され、C1・2 群と相武の甕 A・B の元素の強度（cps）値の散布図から近い地点の胎土の群であると推測された。また、小田原かわらけ C 群は通称「江戸かわらけ」と呼ばれる近世のかわらけの一群である。

C3群は Ca 元素の強度（cps）値が約 200～250（cps）とやや低く、K 元素の強度（cps）値が約 50～100（cps）と最も低いことを特徴とする群である。このC3群は、小田原市千代に所在する千代東町遺跡出土の縄文時代中期の土器試料の散布図にほぼ重複する。

C群はC1・2群とともに神奈川県から東京都（旧相模国から武蔵国）にかけての胎土（粘土）に由来すると推定される土器試料であった。C3群も Ca・Fe 元素の強度（cps）値がともにやや低い地域が埼玉県西部（旧武蔵国）にみられることから、この地域の胎土（粘土）に由来すると推定する。

縄文土器試料D群（図 69）

土器試料D1・2群は Ca 元素の強度（cps）値が約 160（cps）以下、Zr 元素の強度（cps）値が約 20（cps）以上であること大きな特徴とする。D1・2群は Zr 元素の強度（cps）値の幅が広いことからD1群はD1-1・D1-2・D1-3群、D2群もD2-1・D2-2・D2-3群に細分類した。

先述したように Zr 元素は、自然界では東海地方西部の特に名古屋市東側一帯の低丘陵地帯の段丘面に広がる河川において強度（cps）値が高い分布を示しており、この地域には古代の「東海湖」に由来する良質な粘土層が広がっている。この地帯に所在する銀塚遺で生産されたと推定される須恵器が出土した相模国足下郡衙周辺遺跡である小田原市永塚長森遺跡と、駿河国駿河郡衙周辺遺跡である沼津市下石田原田遺跡出土の須恵器と比較した結果、Zr 元素の強度（cps）値の幅が広いが重複がみられ、そ

のたの散布図においても重複・隣接を示した。縄文土器試料では沼津市内の愛鷹山麓の愛鷹スマートインターチェンジ北側に所在する西大曲第Ⅱ・西大曲東遺跡から出土した縄文土器試料の、Ca元素の強度(cps)値が約160(cps)以下の試料がほぼすべての散布図で重複・隣接を示した(図69①・②)。

D3群は、Ca元素の強度(cps)値が約200(cps)前後とD1・2群に比較してやや高い散布を示すことを特徴とする。静岡県富士宮市泉に所在する泉遺跡の31号住居跡から出土した、古墳時代前期のS字状口縁付甕形土器(以下、S字甕)の白色系のS字甕土器試料と、すべての散布図で重複・隣接を示した(図69③)。この白色系のS字甕は愛知県中央部を中心として出土し、東日本に急速に移動拡散した、古墳時代初頭から前期の代表的な土器である。

縄文土器試料E群(図69)

E1群はCa/K元素の強度(cps)値の散布がC群と重複するが、Zr/Fe元素の強度(cps)値の散布ではZr元素の強度(cps)値が低いことを特徴とする。

E1群はC1群と同様に、相模川左(東)岸の下流域に位置する寒川町富山台畑東遺跡から出土した、古墳時代後期の相武の甕A(ヘラケズリ整形甕)が散布図に重複・隣接するデータである(図69④)。

小結

蛍光X線分析による胎土分類の特徴と胎土分類の比較から、他地域のデータとの重複・隣接が確認されたもの、またそれによる胎土(粘土)の推測・推定地域を以下に記し、小結とする。

A1群	重複なし	地域	長野県南部から山梨県北部
A2群	重複あり	地域	神奈川県西部
B1群	重複あり	地域	神奈川県西部から静岡県東部
B2群	重複あり	地域	神奈川県西部
C1群	重複あり	地域	神奈川県東部から東京都
C2群	重複あり	地域	埼玉県西部
C3群	重複あり	地域	埼玉県西部
D1群	重複あり	地域	愛知県中央部
D2群	重複あり	地域	愛知県中央部
D3群	重複あり	地域	愛知県中央部
E1群	重複あり	地域	神奈川県東部から東京都

引用・参考文献

- 田尾誠敏 2007 『律令制化の土師器』小林達夫・安藤広道・田尾誠敏・後藤健一・手塚直樹『土師の考古学』暮らしの考古学シリーズ①学生社
山本輝久 2002 『数石住居地の研究』六一書房
山本輝久 2010 『精緻形(数石)住居と縄文社会』六一書房
堀安アーバンゴタ編集委員会 1994 『特集集-Ⅷ』石
参考資料
産総研ホームページ (http://www.aist.go.jp/aist_j/Information/a_D/out_aist.html)
産総研 研究情報公開データベース-Ⅷ「地球化学データベース」

VII まとめ

胎土分類の比較による縄文土器

蛍光X線分析による胎土分類の比較から得られた、胎土(粘土)の推測地域をもとにした土器の記述をまとめとする。

前原遺跡出土遺物 A群(図70)

A1群は地域として長野県南部から山梨県北部が推測される。

図44-2(0582 SB10)・図44-1(0665 SB10)・図42-2(0610-02 SB08)は口縁部に「コ」の字文(鋸歯状文)を横位に施文、図40-3(0719-01 SB08)はヘラ状工具による逆U字形文を施文、図42-2(0610-02 SB08)は棒状具による押し引文を施文

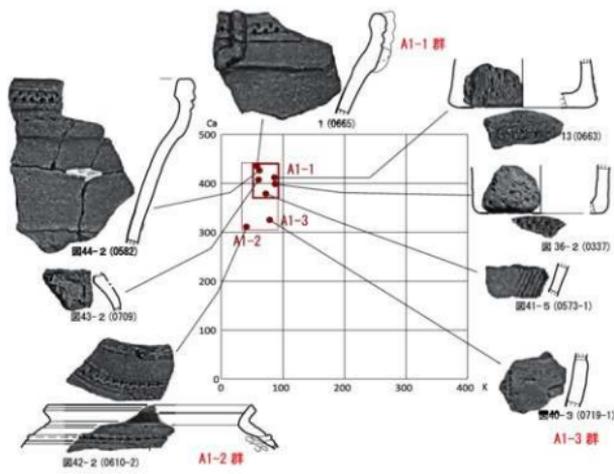


図70 前の原遺跡出土遺物 胎土分類 A群

SB08)は斜位の沈線文を施文、図42-9 (0612-03 SB08)は横位の隆線を施文、図36-1 (0370 SB01)は隆線に爪形文を施文する。図46-2 (0858-02 SB11)は横位と縦位の半截竹管状工具による集合沈線文を施文することから縄文時代中期後半にみられる施文である。図41-6 (0675-01 SB07)・図44-7 (0773-0 SB10)は細い原体の縄文を施文、図46-4 (0858-01 SB11)は密に縄文を施文、図41-2 (0566 SB07)・図41-3 (0569-01 SB06)は撚糸文を施文する。

B2群は地域として神奈川県西部が推測される。

図40-2 (0537 SB05)は垂下する隆線と結節状の刺突文を施文、図49-5 (0770-08 SB14)は垂下する隆線に連続して押圧、図40-6 (0625-01 SB05)は密に縄文を施文、図49-4 (0846-02 SB14)は縄文地に斜位の沈線文と半隆起線文を施文、図44-11 (0662 SB10)は底部脇の無文部である。

前の原遺跡出土遺物 C群 (図72)

C1群は地域として神奈川県東部から東京都が推測される。

図49-1 (0846-11 SB14)は鋸歯状文とヘラ状工具による沈線区画を施文、図42-3 (0846-05 SB14)・図44-8 (0669-01 SB10)は斜位沈線文を施文、図42-8 (0703-06 SB08)は隆線が斜行に施文する土器で縄文時代中期前半に所属する。図38-1 (0455-02 SB03)は縦位に集合沈線文と半隆起線文を施文する。縄文が施文される土器としては、図43-3 (0705 SB09)は縄文のみを施文、図43-1 (0581 SB09)は縄文を磨消し沈線文内に縄文を充填施文、図38-4 (0457 SB03)は縄文地に横位の

する土器群の「コ」の字文(鋸歯状文)を含む施文は縄文時代中期前半の五領ヶ台式から勝坂式にかけてみられる施文である(寺内隆夫)。図41-5 (0573-01 SB06)は縦位の沈線文を施文する。図44-13 (0663 SB10)・図36-2 (0337 SB01)は底部脇の無文部である。

A2群は地域として神奈川県西部が推測されている。

図41-8 (0730-04 SB07)・図44-1 (R0712-03 SB10)は密に縄文が施文、前者にはさらに結節文を施文する。図42-7 (0703-04 0688 SB08)は縦位に沈線文を施文する。

前の原遺跡出土遺物 B群 (図71)

B1群は地域として神奈川県西部から静岡県東部が推測される。

図46-1 (0681-02 SB11)は口縁端部にキザミと隆線による楕円形区画文と三角形区画文を施文、図44-3 (0579-01 SB10)はヘラ状工具による逆U字形文を施文、図44-10 (0852-03 SB10)は隆線による渦巻文と押引文を施文、図44-4 (0773-01 SB10)は横位の連続押引文が施文、縄文時代中期前半にみられる施文である。

図38-2 (0757 SB03)は横位と斜位の沈線文を施文、図42-5 (0703-05

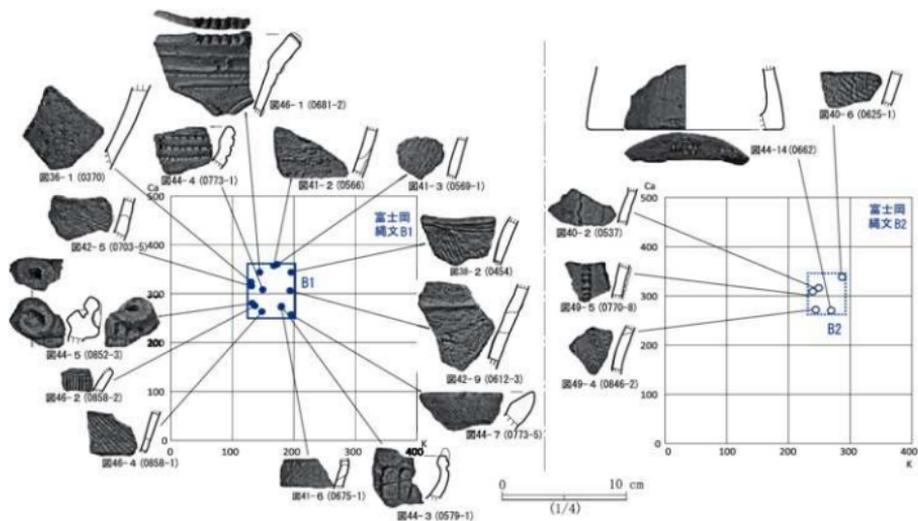


図 71 前の原遺跡出土遺物 胎土分類 B群

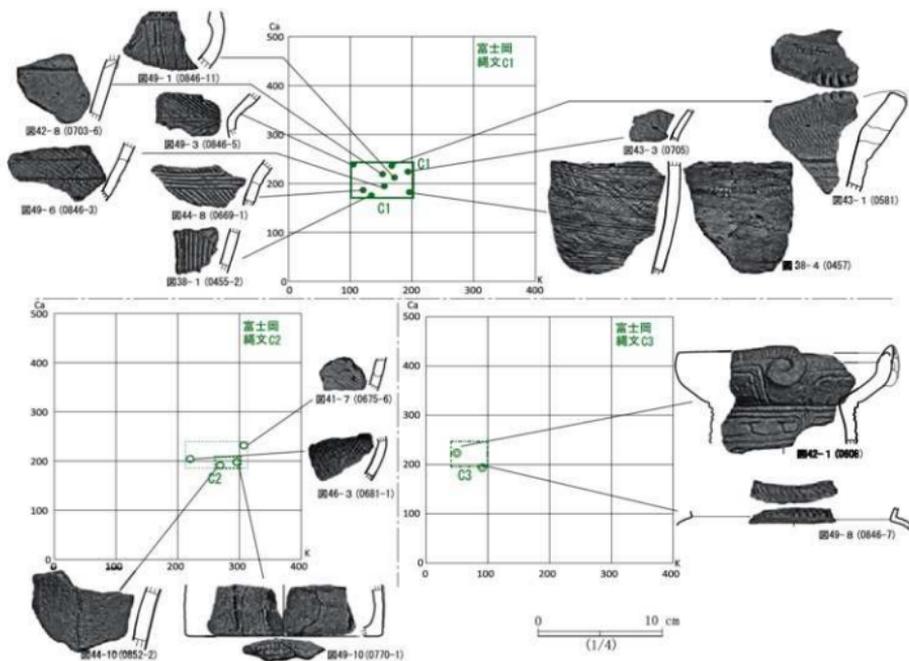


図 72 前の原遺跡出土遺物 胎土分類 C群

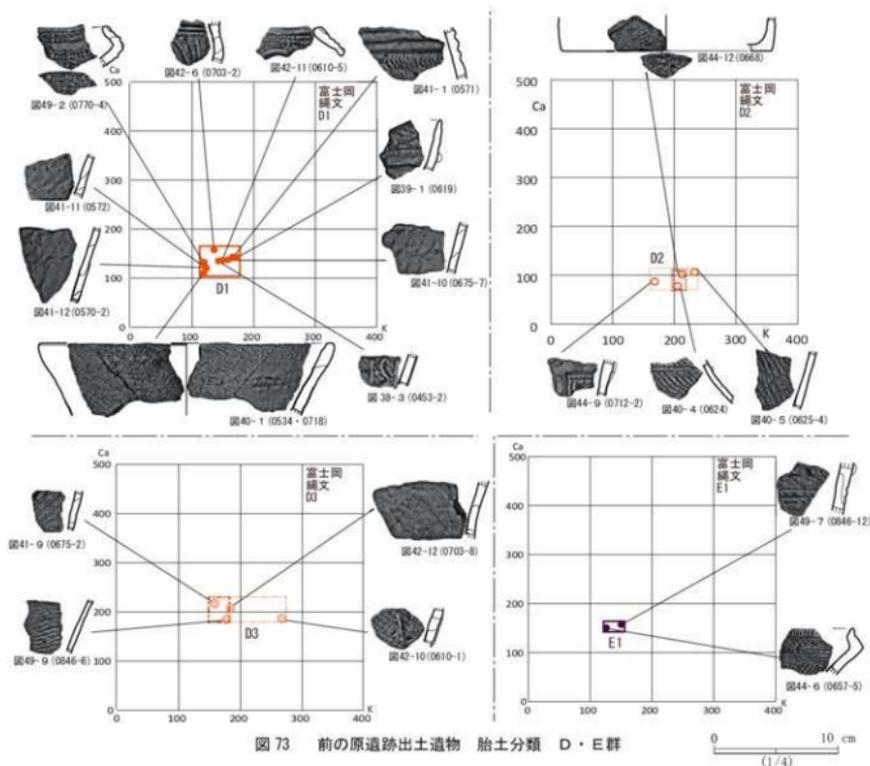


図 73 前の原遺跡出土遺物 胎土分類 D・E群

平行沈線文を施文、図 49-6 (0846-03 SB14) は縄文地に斜位に紐状の細い貼付に連続押圧を施文する。

C2群は地域として埼玉県西部が推測される。

図 44-10 (0852-02 SB10) は降線の懸垂文を施文、図 49-10 (0770-01 SB14) は縄文に細い紐状の貼付文を施文する縄文時代中期前半の土器である。図 46-3 (0681-01 SB11) は縄文を施文する。図 41-7 (0675-06 SB07) は極めて浅い棒状具による沈線文を施文する。

C3群は地域として埼玉県西部が推測される。

図 42-2 (0608 SB08) はキャリバー形の口縁部に渦巻文・沈線文による楕円形区画文を施文する縄文時代中期前半の五領ヶ台式後葉から勝板式にかけてである。図 49-8 (0846-07 SB14) は内傾する口縁部に丁寧な調整に密に縄文を施文する精製土器である。

前の原遺跡出土遺物 D群 (図 73)

D1群は地域として愛知県中央部が推測される。

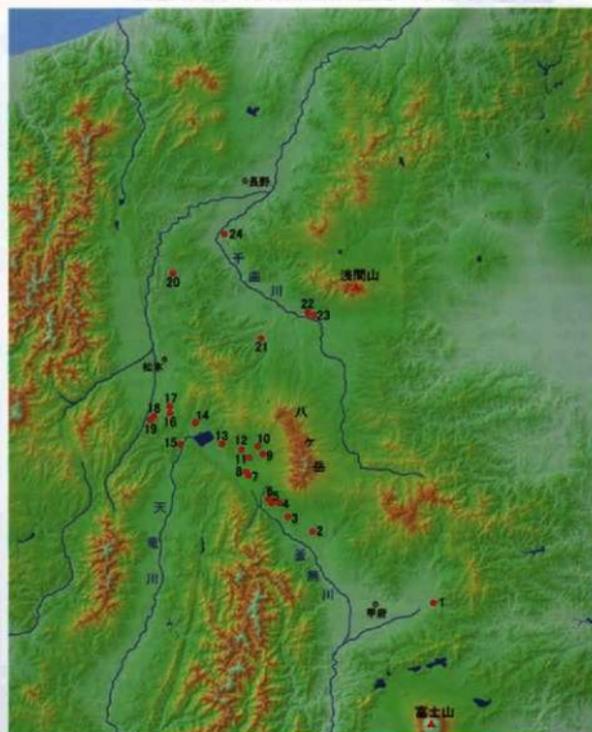
図 42-11 (0610-05 SB08)・図 49-2 (R0770-04 SB14) は多段に連続してC字文、図 39-1 (0619 SB04)・図 38-3 (R0453-02 SB03) は縄文地に降線と細い粘土紐を波状に貼付ける。これらは縄文時代中期前半の東海地方西部土器群である。図 42-6 (0703-02 SB08) は横・縦位の集合沈線文を施文する。図 41-12 (0570-02 SB06)・図 41-11 (0572 SB06)・図 41-10 (0675-07 SB07) は指頭圧痕状文を施文する縄文時代中期前半の土器で、愛知県中央部や東関東地方から信州東部にかけて同様の施文例がある。図 40-1 (0534・0718 SB05) は表裏縄文を施文する縄文時代早期前半の土器、東海地方西部では岐阜県での出土例がある (宮崎朝雄 2008・静岡県考古学会 1998・長野県立博物館 2014)。

約 5,700 年前 約 5,500 年前 約 5,400 年前 約 5,300 年前

前期後葉 末	中期前葉 I	II	中期中葉 I	II	III
網罟C式 十三高縁 縄文	五領ヶ台I式 九兵衛尾根I式	五領ヶ台II式 九兵衛尾根II式	腰楕I式 壺形式	腰楕II式 新道式	腰楕III式 腰内I・II式
					
17頁No.2 中原	19頁No.3 亀田	21頁No.4 殿代	33頁No.13 大石	37頁No.17 長峯	88頁 藤内 (図50-1)

(長野県立博物館 2014 転載)

展示資料の出土した遺跡の位置



1 宮之上遺跡 (甲州市) 2 寺所第2遺跡 (北本市) 3 井戸沢遺跡 (富士見町) 4 新道遺跡 (富士見町) 5 九兵衛尾根遺跡 (富士見町) 6 新沢遺跡 (富士見町) 7 大石遺跡 (原村) 8 北丘原遺跡 (原村) 9 亀田遺跡 (茅野市) 10 長峯遺跡 (茅野市) 11 堀ノ木遺跡 (茅野市) 12 穂根遺跡 (茅野市) 13 大ダッシュ遺跡 (諏訪市) 14 松久保遺跡 (岡谷市) 15 鎌田原遺跡 (岡谷市) 16 堂の前遺跡 (塩尻市) 17 塩原遺跡 (塩尻市) 18 平出遺跡 (塩尻市) 19 浅井中央遺跡 (塩尻市) 20 堂田遺跡 (筑北村) 21 後沖遺跡 (松久保) 22 中野遺跡群 (東御市) 23 久保在来遺跡 (東御市) 24 殿代遺跡群 (千曲市)

(長野県立博物館 2014 転載)

図 74 縄文時代中期の五領ヶ台式土器を中心とした年代と遺跡の分布

D2群は地域として愛知県中央部が推測される。

縄文が施文されるのは、図 40-5 (0625-04 SB04) は斜位に密に縄文を施文、図 40-4 (0624 SB05) は斜位に密な縄文地に貝殻による沈線文を施文、図 44-12 (0668 SB10) は底部脇に斜位に密に縄文を押し圧による沈線文を施文する土器である。図 44-9 (0712-02 SB10) は隆線に連続してC字文と半隆起線文を施文する土器である。縄文時代中期前半の東海地方西部土器群である。

D3群は地域として愛知県中央部が推測される。

縄文施文土器には図 41-9 (0675-02 SB07) は縄文が絡状体状に施文、図 49-9 (0846-06 SB14) は縄文を密に施文、図 42-10 (0610-01 SB08) は縄文地に細い紐状を貼付後に押し圧を施文する。図 42-12 (0703-08 SB08) は無文であるが僅かに指頭痕による凹がみられる土器である。

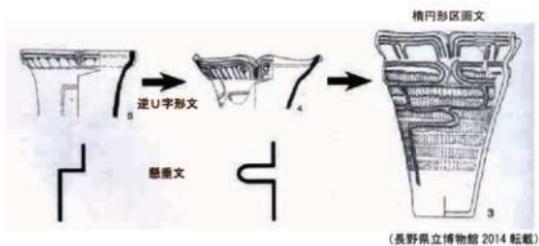
前の原遺跡出土遺物 E 群 (図 73)

E1群は地域として神奈川県東部から東京都が推測される。

図 44-6 (0657-05 SB10) は端部に連続キザミ状C字文・羽状の集合沈線文・横位の隆線を施文、図 49-7 (0846-12 SB14) は横糸文に縦位の沈線文と短い隆帯状の貼付文を施文する。

住居跡以外から出土した縄文土器の主な施文方法によるまとめ

粘土紐貼付の隆線を施文する1号配石遺構の図 50-1・50-2・50-3、2号溝状遺構の図 55-2・55-3・55-4、3号溝状遺構の図 56-1・56-3はU字形・56-4は渦巻文、4号溝状遺構の渦巻文の図 57-1は



縄文時代中期の五領ヶ台式直後式土器から膳板式Ⅰ式の文様の変遷

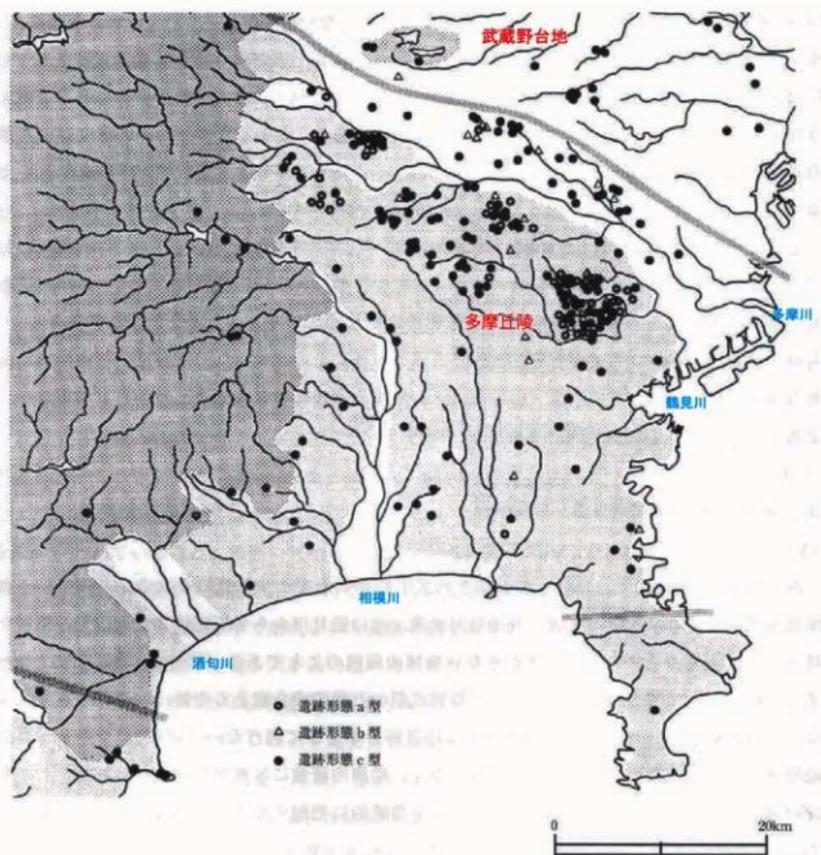


図 75 縄文時代中期の五領ヶ台式土器の西南関東地方の遺跡の分布

土器は縄文時代中期前葉～中葉が主体であったが、胎土分析から推測された胎土の由来する主な地域は関東地方西部・中部地高地・東海地方東部・東海地方西部と広範囲となった。このことからこの調査地点は各地域から運ばれた土器が集合する縄文時代中期前葉～中葉の重要な要衝・結節地点であったことが推測される。そこは東に流れる赤浜川によって段丘化し、富士山の南麓地形と愛鷹山の西麓地形が接し、南には縄文時代前期の温暖化から徐々に寒冷化することによって海面が後退し、また砂礫の流入による浅瀬化・浜堤の形成による陸地化・潟湖化が進む浮島沼が広がる、地形的に変化に富んだユニークな場所でもある。

最後に蛍光X線分析による胎土分析は、縄文土器の分析点数と種類が少ないことから、データベースからの推測・推定は現状では十分でない。今後にさらなる分析事例の増加による比較精度の改善が必要であることを課題とした。(小金澤 保雄)

引用・参考文献

個人論文

- 阿部芳昭編 2021 「土器研究が拓く新たな縄文社会」『季刊考古学 155号』雄山閣
- 井上公夫 2007 「富士山宝永噴火(1707)後の長期間に及んだ土砂災害」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
- 今福利忠 1999 「勝版式土器とその社会組織」『縄文土器の編年と社会』小林達雄編 季刊考古学 普及版 雄山閣
- 今村晋爾 1985 「五類+台式土器の編年 ―その編年と東北地方との関係を中心に―」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号
- 甲本 薫之 2008 「気候変動と考古学」『文学論叢書 97』所収
- 西河学 2011 「第9章 真系統土器が共存する遺跡 ―土器胎土分析で製作地が区別できる―」『真系統土器の出会い』今村晋爾編 同成社
- 小金澤 保雄 2015 「第三章 第2節 大湫倉遺跡の立地環境―ジオアーケオロジーからみた遺跡とその周辺―」『大湫倉遺跡(第2地点)』三島市教育委員会 所収
- 小林 謙一 2008 「縄文土器の年代(東日本)」『絶壁 縄文土器』所収
- 小松原 純子・穴谷 正英・岡村 行信 2007 「静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動」
- 尾尾誠哉 2007 「律令制化の土師器」『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ①学生社
- 谷口隆浩 1999 「勝版式土器の地域性 ―土器型式の広域型・漸移型・極地型―」『縄文土器の編年と社会』小林達雄編 季刊考古学 普及版 雄山閣
- 寺内隆夫 1987 「五類+台式土器から勝版式土器へ ―型式変遷における一視点―」『長野県縄文文化財センター紀要』1
- 土屋一 2007 「富士山の地下水・湧水」『富士火山』所収
- 新津 健 1994 「縄文集落と道」『山梨県考古学論集』山梨県考古学協会一五周年記念論文集 所収
- 野内秀 2005 「事例報告1 早期 早期東海系土器群の流入と石器・石材」『公開セミナー 南関東をとりまく縄文時代の交流 発表要旨』発掘調査成果発表会
- 藤尾 慎一郎 1993 「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告 第48集』所収
- 町田 洋 2007 「第4回デフからみた富士山の成り立ち: 研究のあゆみ」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
- 松田光太郎 2005 「事例報告2 前・中期 前・中期の遺跡間交流と注記文化の成立 ―神奈川県を中心に―」『公開セミナー 南関東をとりまく縄文時代の交流 発表要旨』発掘調査成果発表会
- 松田 時彦 2007 「富士山の基礎の地質と地史」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
- 松本一男 1998 「静岡県内検出の縄文時代住居の時代的変遷と地域的特性について ―住居を構成する属性から時代の変遷と地域性を探る―」『静岡県考古学報告 30』所収
- 三上 徹也 1987 「奥久保式土器 再考」『長野県縄文文化財センター紀要』1
- 宮崎 朝雄 2008 「尖底凹輪文系(室谷上層系・表裏輪文系土器)」小林達雄編『絶壁 縄文土器 ―小林達雄先生古稀記念企画―』アム・プロモーション
- 宮地 直道 2007 「過去1万1000年間の富士火山の噴火史と噴出率、噴火規模の推移」『富士火山』山梨県環境科学研究所 所収
- 武藤 康弘 1999 「縄文時代の整住居の居住施設としての安定性」『東京大学山梨文化財研究所1999年度研究集会資料集』所収
- 山本典幸 2000 『縄文時代の地域生活史』小林 達雄(監修) 未完成考古学叢書(1) アム・プロモーション

発掘調査報告書等

- 静岡県 1990 『静岡県史 資料編1 考古一』
- 静岡県縄文文化財調査研究所 1985 『茶木地遺跡 田方学区新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県縄文文化財調査研究所調査報告 第8集
- 静岡県縄文文化財調査研究所 2009 『久川上川遺跡 第二東名No.39-B地点 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市-1(第1分冊、第2分冊)』静岡県縄文文化財調査研究所調査報告 第200集
- 静岡県縄文文化財調査研究所 2010 『天ヶ次東遺跡 古木戸A遺跡 古木戸B遺跡 第二東名No.44地点 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市-2』静岡県縄文文化財調査研究所調査報告 第228集
- 静岡県縄文文化財調査研究所 2010 『富士山・愛鷹山麓の遺跡 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市-3 総論(富士工区富士地区) 富士岡中尾遺跡(第二東名No.48地点) 平塚遺跡(第二東名CR20地点) 平塚第2号墳(第二東名CR20地点)』静岡県縄文文化財調査研究所調査報告 第230集
- 静岡県縄文文化財調査研究所 2010 『富士山・愛鷹山麓の古墳群 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士市-4 船津L-1第171号墳(第二東名No.39地点) 須津古墳群(第二東名No.45地点) 間門松沢第1号墳(第二東名No.52地点) 麴無ヶ池・間門E-6第6号墳(第二東名No.52地点) 不動瀬遺跡(第二東名No.52地点) 松坂遺跡(第二東名No.53地点)』静岡県縄文文化財調査研究所調査報告 第231集
- 静岡県縄文文化財センター 2013 『富士山1古墳群他 富士市 平成21・22・24年度地域活性化基幹資源整備2期地区農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県縄文文化財センター調査報告 第37集
- 栴檀河内国文化財調査研究所 2017 『日向・日影遺跡 第2次調査 南足柄市原原字日向における宅地造成工事に係る発掘調査報告書』
- 栴檀河内国文化財調査研究所 2018 『日向・日影遺跡 第3次調査 南足柄市原原字日向における分譲住宅建設に係る発掘調査報告書』
- 栴檀河内国文化財調査研究所 2018a 『小田原市No.92遺跡(小田原城三の丸大久保六郎邸跡) ⅧX地点 集合住宅建設工事に係る発掘調査報告書』
- 栴檀河内国文化財調査研究所 2020a 『小田原市No.92遺跡 小田原城三の丸 大久保六郎邸跡ⅧX1地点 共同住宅兼個人住宅新築工事に伴う発掘調査業務概要報告書』

熊波流河国文化財調査研究所 2020b 『小田原市 No.33 遺跡 水塚長森遺跡 第IX地点 建築住宅新築工事に伴う発掘調査業務概要報告書』
 2022a 『千代北町遺跡第XVI地点 神奈川県小田原市千代北町における建築住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
 熊波流河国文化財調査研究所 2022b 『千代東町遺跡第XII地点 神奈川県小田原市千代東町における建築住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
 熊波流河国文化財調査研究所 2022c 『成田諏訪遺跡第V地点 神奈川県小田原市成田町諏訪館における店舗建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
 熊波流河国文化財調査研究所 2022d 『別荘十二天遺跡第XVII地点 神奈川県小田原市別荘十二天における集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 1986 『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
 富士市教育委員会 1988 『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』
 富士市教育委員会 2003 『花川戸第2・3号墳発掘調査報告書—平成14年度 県営社会環境基盤整備重点県道整備事業（愛鷹地区）埋蔵文化財発掘調査—』
 富士市教育委員会 2013 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成22・23年度—』富士市埋蔵文化財調査報告書 第54集
 富士市教育委員会 2016 『天間沢遺跡 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市埋蔵文化財調査報告書 第58集
 富士市教育委員会 1997 『関戸遺跡—市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』富士市市文化財調査報告書 第23集
 富士市教育委員会 2016 『北峰地遺跡 第2次調査 南足柄市関本木北峰地地先における個人住宅工事に係る発掘調査報告書』南足柄市文化財調査報告書 第26集
 山梨県 1999 『山梨県史資料編1 原始・古代1』
 山梨県 1999 『山梨県史資料編2 原始・古代2』

書籍他

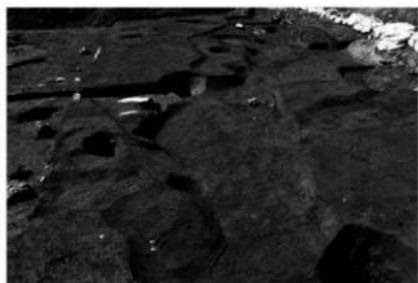
榎アベリクボタ編集室 1994 『特集—八ヶ岳』
 新井 宏一 2007 『理系の視点から見た「考古学」の論争点』大和書院
 荒巻 重雄・藤井 敏嗣 2007 『富士六山』山梨県環境科学研究所
 池谷信之 2005 『黒曜石を渡った黒曜石—見高段間遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」14 新泉社
 池谷信之 2009 『黒曜石考古学—原産地推定が明らかにする社会構造とその変化—』新泉社
 池谷信之・佐藤宏之 2020 『愛鷹山麓の旧石器文化』歌文舎
 井戸尻考古館 2023 『井戸尻の縄文土器8 総集編』八ヶ岳西南麓出土縄文土器85点 テクネ
 今村利恵 2011 『縄文土器の文様生成構造の研究』小林達雄（監修）未完成考古学叢書8 アム・プロモーション
 今村 孝雄 2004 『縄文時代—弥生時代の高精度年代体系の構築』国立歴史民俗博物館
 大津 正倫 編 2012 『神積低地の地形環境学』古今書院
 水野浩 2011 『縄紋土器の型式と順位 その批判的検討』六一書房岡村 道雄 編1998 『特集 解明すなわち縄文文化の実像』『季刊考古学』第64号
 具塚 寅平 1979 『東京の自然史 増補第二版』紀伊国屋書店
 ながのあづま 考古学財団法人 2005 『公開セミナー—南関東をとりまく縄文時代の交流 発表要旨』発掘調査成果発表会
 日下 雅夫 2012 『地形からみた歴史—古代景観を復原する』講談社学術文庫（原本1991『古代景観の復原』中央公論社）
 日下 雅夫 編 2004 『地形環境と歴史景観—自然と人間の地理学』古今書院
 工藤 謙一郎 2012 『旧石器—縄文時代の環境文化—高精度放射性炭素年代測定と考古学』新泉社
 小林達夫 2008 『縄紋社会研究の新視点—一供養14年代測定の利用—』六一書房
 小林 達夫 編 2008 『総覧 縄文土器』総覧 縄文土器 刊行委員会
 縄文中期集落研究グループ / 津津本台地区考古学研究会 1995 『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』発表要旨・資料』
 小林達雄 編 1999 『縄文土器の編年と社会』季刊考古学 普及版 藤山園
 小林達夫・安藤広道・田尾誠雄・後藤建一・手塚直樹 2007 『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ①学生社
 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会 1998 『縄文時代中期前半の東海系土器群—北陸式土器の成立と展開—予稿集』静岡県考古学会シンポジウム・97・第5回東海考古学フォーラム
 鈴木 道之助 1991 『図録 石器入門事典 縄文』柏書房
 大学合同考古学シンポジウム実行委員会 2003 『縄文社会を探る』学生社
 阪田 和弘 1982 『日本の古代遺跡1 静岡』保育社
 土 隆一 編著 2010 『新版 地学のガイド』コナ社
 埴石 敬 2007 『日本の美術9 No.496 縄文土器 前期』至文堂
 勲使河原 彰 2013 『ビジュアル版 縄文時代ガイドブック シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊03』新泉社
 土 隆一 編 2007 『日本の美術10 No.497 縄文土器 中期』至文堂
 富木 晃・西沢 貞実・山内 和也 編 1995 『特集 縄文時代における自然の社会化』『季刊考古学』別冊6』
 長野県立博物館（寺内隆夫） 2014 『縄文土器展 デコボコがざりのはじまり』平成26年度長野県立歴史館冬季展 信毎書籍出版センター
 長野県立博物館 2017 『進化する縄文土器—流れのよもつと区画のよもつ—』平成29年度秋季企画展「縄文土器展2」信毎書籍出版センター
 ニュー・サイエンス社 1997 『特集 縄文時代の集地』『月刊考古学ジャーナル No.422』
 マイクル R. ウォーターズ 2012 『ジオアーケオロジー—地学にもとづく考古学』松田順一郎・高倉純・出穂博実・別所秀高・中沢祐一訳 朝倉書店
 三辻 利一 2013 『新しい土器の考古学』同成社
 宮島 了誠 編 1999 『特集 縄文時代の東海南北』『季刊考古学』第69号
 安田 喜憲 1980 『環境考古学事始—日本列島2万年—』日本放送出版協会
 安田 喜憲 1996 『森の日本文化 縄文から未来—』新思社
 山口 恵一郎 1974 『日本図説大系 中部1』朝倉書店
 山本 暉久 2002 『敷石住居址の研究』六一書房
 山本 暉久 2010 『精緻形（敷石）住居と縄文社会』六一書房
 山本 典幸 2000 『縄文時代の地域生活史』小林達夫監修 未完成考古学叢書①
 吉越 昭久 編 2004 『人間活動と環境変化』古今書院
 渡辺 誠 編 2010 『特集 縄文文化研究の新動向』『季刊考古学』第73号



写真図版3 花川戸第4号墳 周溝 検出状況 南西から



写真図版4
花川戸第4号墳
周溝 完掘 南
西から



写真図版5 花川戸第4号墳 周溝 完掘 北東から



写真図版6 1号住居跡 検出状況 北から



写真図版7 2号住居跡 検出状況 西から



写真図版8 3号住居跡 検出状況 西から



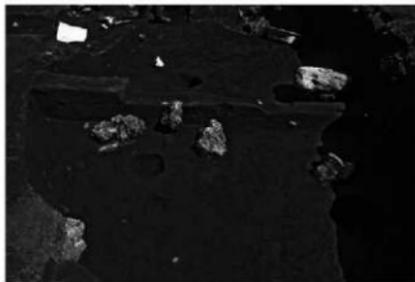
写真図版9 4号住居跡 検出状況 南から



写真図版10 5号住居跡 検出状況 南東から



写真図版 11 6号住居跡 完掘 南から



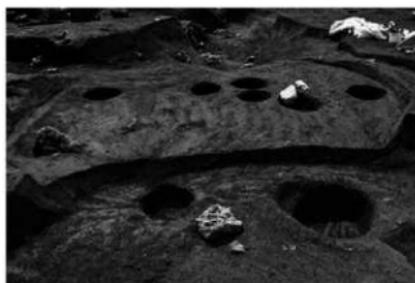
写真図版 12 7号住居跡 検出状況 西から



写真図版 13 8号住居跡 検出状況 南から



写真図版 14 10号住居跡 遺物出土状況 南から



写真図版 15 11号住居跡 完掘 南東から



写真図版 16 12号住居跡 検出状況 南東から



写真図版 17 13号住居跡 土層 南から



写真図版 18 14号住居跡 検出状況 北から



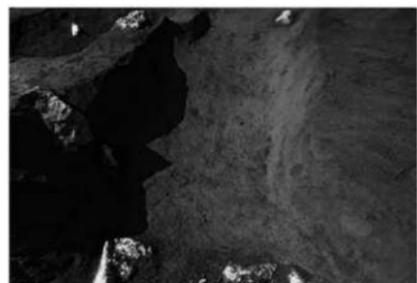
写真図版 19 3号溝状遺構 検出作業 北から



写真図版 20 4号溝状遺構 遺物出土状況 北から



写真図版 21 8号溝状遺構 検出状況 東から



写真図版 22 5号溝状遺構 完掘 北から



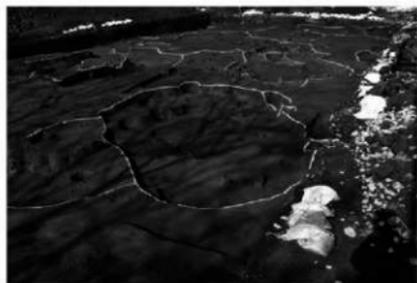
写真図版 23 標準土層 北から



写真図版 24 調査区西側 南から



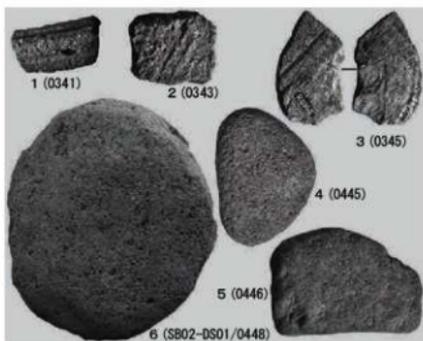
写真図版 25 調査区東側 南から



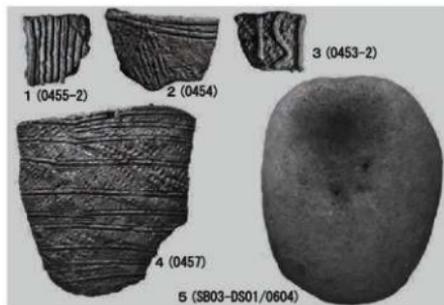
写真図版 26 調査区北東側 北東から



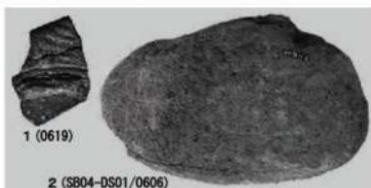
写真図版 27 1号住居跡 出土遺物



写真図版 28 2号住居跡 出土遺物

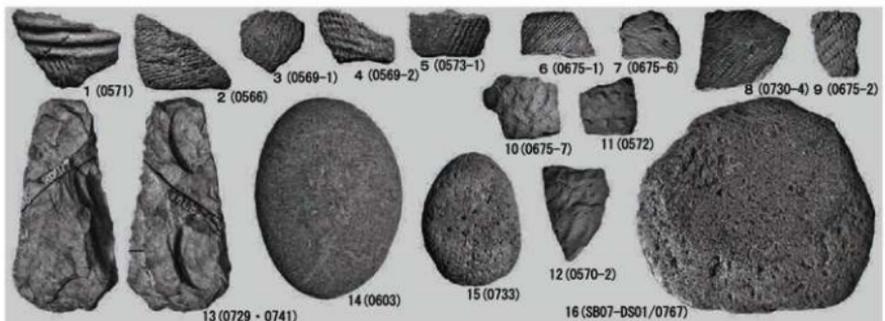
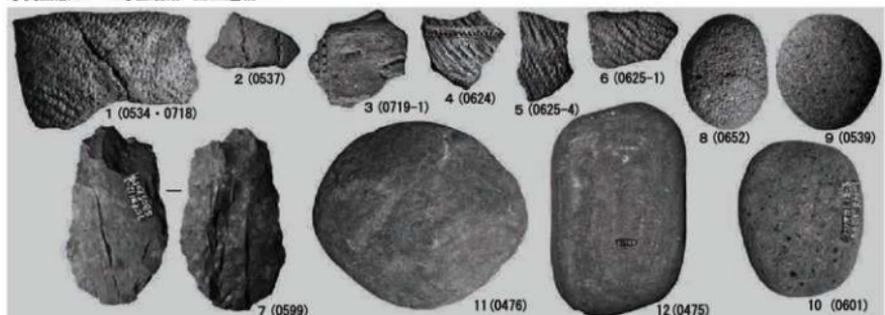


写真図版 29 3号住居跡 出土遺物

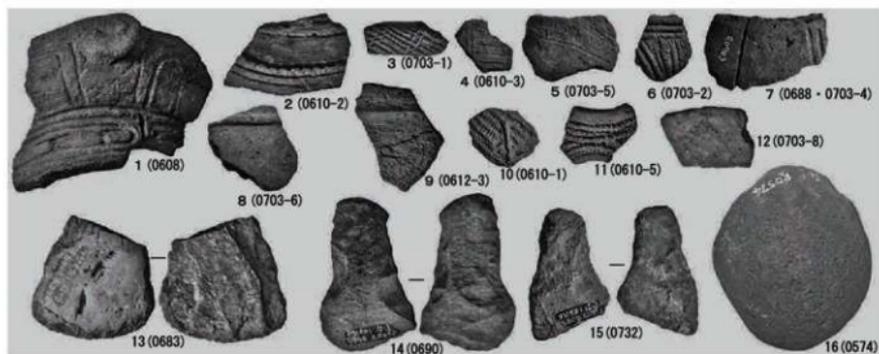


写真図版 30 4号住居跡 出土遺物

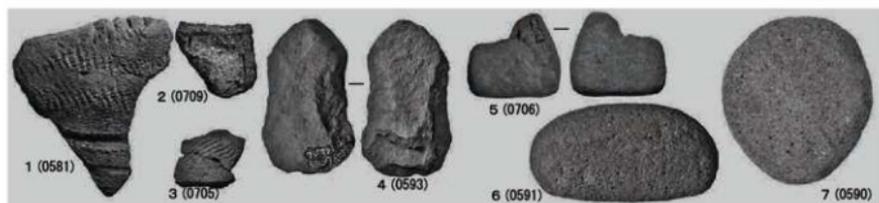
写真図版 31 5号住居跡 出土遺物 ↓



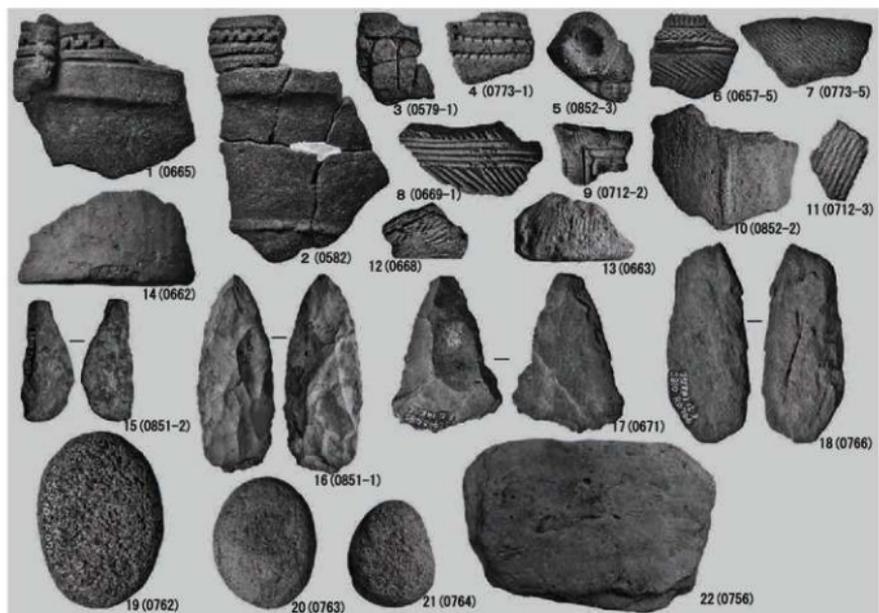
写真図版 32 7号住居跡 出土遺物



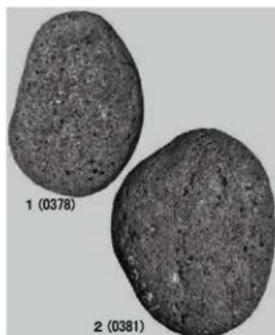
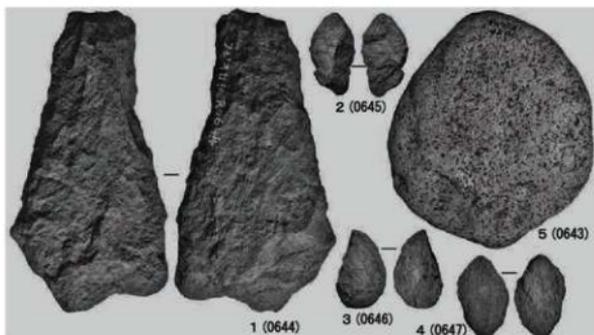
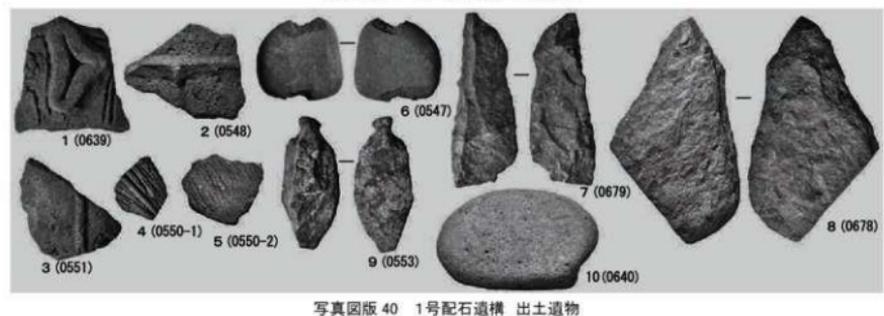
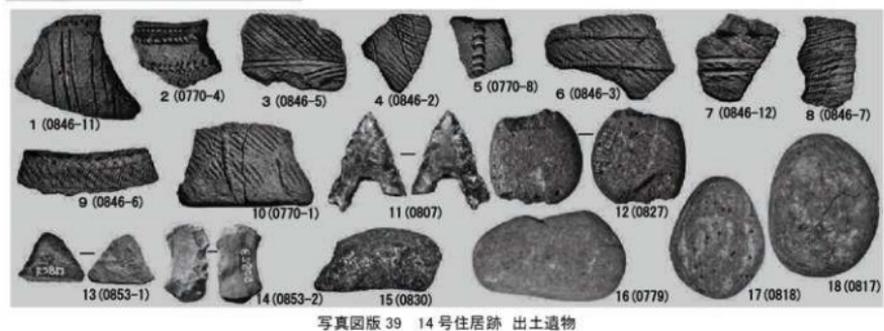
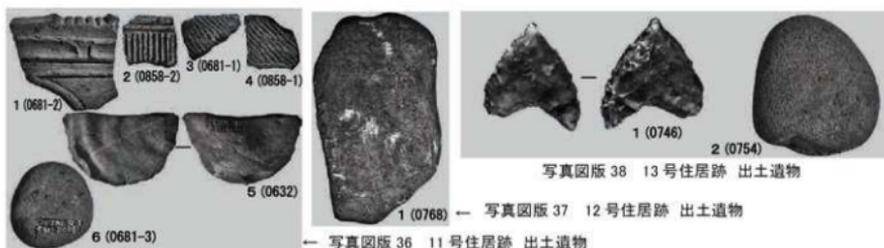
写真図版 33 8号住居跡 出土遺物

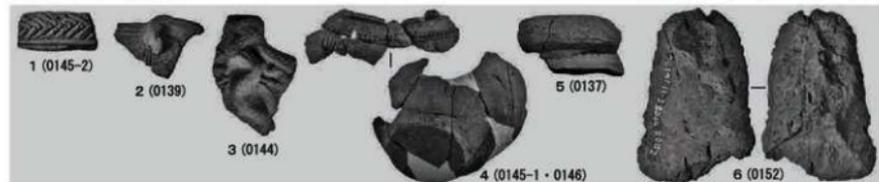
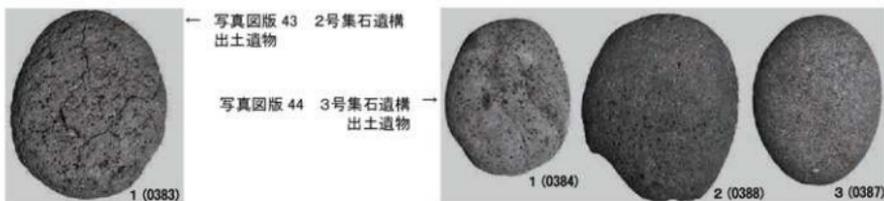


写真図版 34 9号住居跡 出土遺物

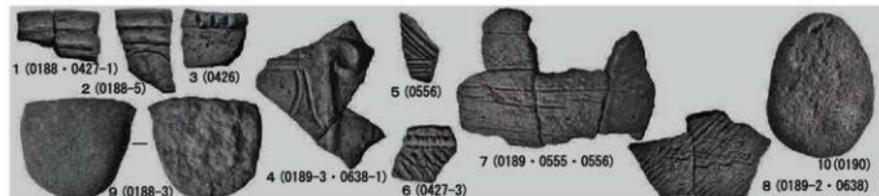


写真図版 35 10号住居跡 出土遺物

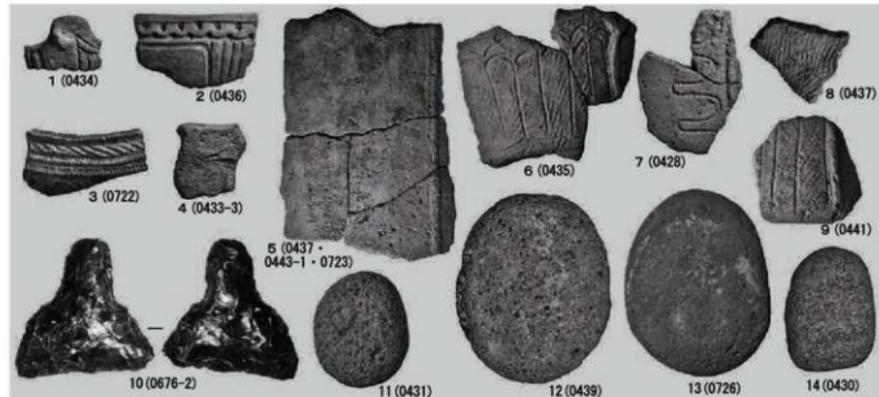




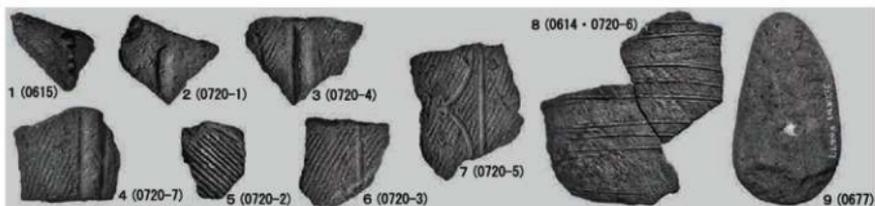
写真図版 45 2号溝状遺構 出土遺物



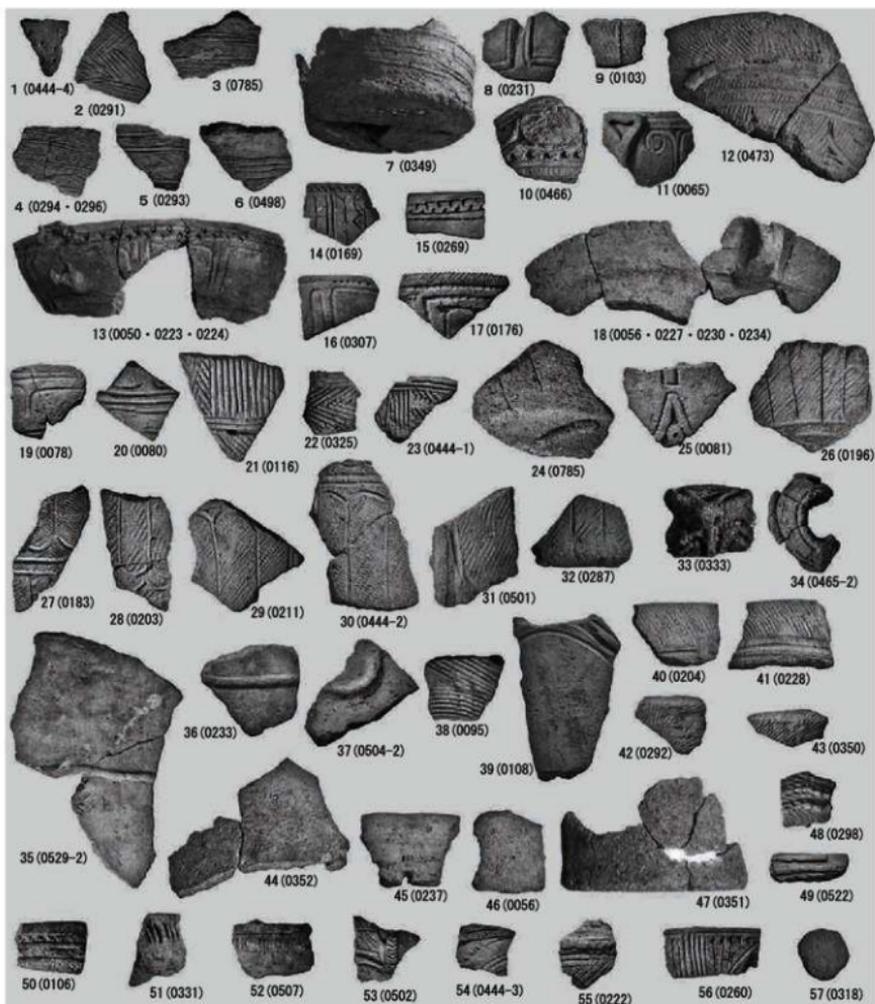
写真図版 46 3号溝状遺構 出土遺物



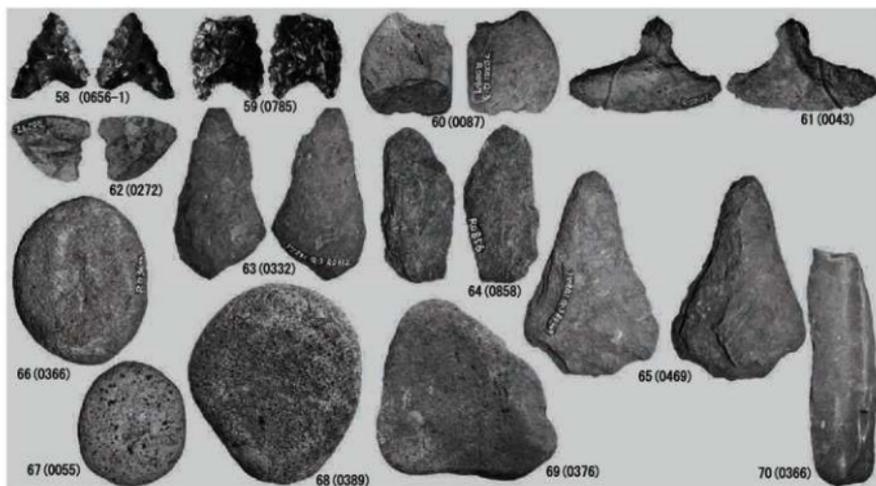
写真図版 49 6号溝状遺構 出土遺物



写真図版 50 7号溝状遺構 出土遺物



写真図版 51 包含層出土遺物①



写真図版 52 包含層出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	まのり はらひ いせき ふにむかちちこふんぐん		
書名	前の原遺跡・富士岡1古墳群		
副書名	集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告		
シリーズ番号	第91集		
編著者名	佐藤 祐樹・小金澤 保雄・小金澤 彩可		
編集機関	富士市教育委員会		
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地	電話	0545-55-2875
発行機関	同上		
所在地	同上		
発行年月日	2024年9月30日		

遺 跡 名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
前の原遺跡 富士岡1古墳群	静岡県 富士市 富士岡1614番地	58	35度 10分	138度 43分	2012.02.16～ 2012.03.31	302	集合住宅建設による	
		192	19秒	40秒				

採 取 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前の原遺跡	集落跡 敷布地	縄文時代 前期後半～ 中期初期	住居跡 土坑 配石遺構 集石遺構 溝状遺構 ピット	縄文土器（埴輪式・玉頸台 式等）、石器（石鏃、スクレイパー、 石鏃、石匙、打製石斧、磨・ 砥石、凹石、石皿）	縄文時代前期後半～中期初期の住居跡が14軒検出された。 縄文時代前期後半～中期初期の遺物が出土した。
		中世以降	土坑 溝状遺構 ピット	陶磁器	
富士岡1古墳群	古墳	古墳時代後期	古墳周溝 溝状遺構 ピット	土師器	花川戸第4号墳の周溝が検出された。

要約 富士山と愛鷹山の現となる赤沼川の河岸段丘上に縄文時代前期後半から中期初期の集落が検出された。また古墳時代後期の古墳の周溝が検出された。土器は縄文時代中期前半～中葉が主体であったが、粘土分析から推測された粘土の由来する主な地域は関東地方西部・中部地帯・東海地方東部・東海地方西部と広範囲となった。このことからこの調査地点は各地域から運ばれた土器が集合する縄文時代中期前半～中葉の重要な要衝・結節地点であったことが推測される。そこは更に流れる赤沼川によって段丘化し、富士山の南麓地形と愛鷹山の西麓地形が接し、南には縄文時代前期の温暖化から徐々に寒冷化することによって海面が後退し、陸地化が進む浮島沼が広がる地形的に変化に富んだユニークな場所でもある。

本書は長期保存を考慮してすべて中性紙を使用しています。

紙質	表紙	レザック	215kg
	見返し	色上質紙厚口	
	本文・写真図版	コート	90kg
印刷	オフセット印刷 モノクロ写真図版はダブルトーン印刷（黒色＋灰色＋スクリーン線 175線以上）		
文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用できます。なお利用にあたっては、出典を明記してください。 この報告書に関する記録図面類（写真類・画像データを含む）は、富士市教育委員会で保管していますので、利用する場合には連絡し、必要な手続きをお取りください。			

富士市埋蔵文化財調査報告 第81集
前の原遺跡・富士岡1古墳群

集合住宅建設による埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 令和6（2024）年9月30日

発行 富士市教育委員会

静岡県富士市永田町1丁目100

電話 (0545) 30-7850 FAX (0545) 30-6210

E-mail: ky-bunkazai@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本

松本印刷株式会社 沼津営業所

静岡県沼津市原 401-12

電話 (055) 967-6155

(富士市行政資料登録番号 R6-35)

